

『並行世界』へと赴く

舞茸の都市

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ノーベル物理学賞受賞者の天才“天野総司”はとある実験途中で機器が暴走してし
まい、その影響か意識を失ってしまう。

天野が次に目を覚ますと其処は今までの常識とはかけ離れた世界だつた!?“?
これは主人公“甘野操司”がヒーローを目指すかも（?）しれない物語

目

次

甘野操司の

O r i g i n a l S t

o r y

第1話

第2話

第3話

第4話

第5話

第6話

第7話

第8話

第9話

第10話

111 99 86 69 56 43 32 21 12 1

雄英高校序章編

オリキヤラ紹介

第12話

第11話

第1話

第2話

第3話

第4話

第5話

第6話

第7話

第8話

U S J 編

252 229 211 200 185 174 162 149 145 135 125

第
1
話

第
2
話

第
3
話

304 286 275

甘野操司の Original Story

第1話

突然だが、皆さんは『多元宇宙論』というものをご存知だろうか。

複数の宇宙の存在を仮定した理論物理学による論説のこととで、物理的に観測不可能な様々な事象を数学や物理学を元に理論を構築し、既知の観測や観察とともに予想された物理理論の一つである（wikipedia引用）。

この言葉の中にある「宇宙」というのは、所謂 spaceのことではない。物質的宇宙を含む我々の生きている全事象（例えば時間、空間、エネルギー、物理定数など…）のことを総称して「宇宙」と呼んでいる。

この論説は現代物理学、特に量子力学における主流な理論となつていて、この理論を応用した考え方のひとつとして、『並行世界（parallel world）』という考え方がある。我々の生きている世界と並行している世界が多数存在し、それらが

相互に作用しあつてゐる、というものだ。

例を1つ挙げてみる。例えばあなたがサイコロを振った、そしてその結果1の目が出たとしよう。この時「1の目が出た」という事象は必然的、もしくは偶発的に生れたものではない。サイコロを振った事により1の目が出る、2の目が出る、⋮、6の目が出る、といった6つの『並行世界』が互いに干渉しあい反発しあい生まれたのが我々が見ている現実世界に起こつた「1の目が出た」という事象である。つまり、出てきた1の目、というのは他の世界からの干渉と反発の結果出来たものである。

これが『並行世界』による相互作用、という考え方だ。

この考え方には魅了され、一生をかけて研究し続けた男がいる。その男の名は天野総司。彼は苦心の末2×年には遂に『並行世界の発見と発生原理の解明』を果たし、助手の音村獅童とともにノーベル物理学賞を手にすることとなる。

その研究成果について少し解説しておこう。

前述の通り、我々の生きている世界は大量の『並行世界』による相互干渉と反発から生まれるもののはつだ。ならば、他の世界、他の様に干渉しあつた結果はどこに生まっているのだろうか、天野は其處に注目した。そして、天野は「他の世界」というものは

我々が生きている空間の外側にある」と考えた。

苦心の末、天野は『並行世界』へ干渉するためには7次元の世界まで拡張する必要があることを発見し、拡張のための新たな物理指数を定めることで他の世界を観測する、そして恣意的に干渉することができる様になつた。その指数の名をアマノーオトムラ指数と呼ぶこととした。

これが天野の研究成果である。

しかし、齡70を超えた男の関心は尽きない。次に天野が目指したのは『並行世界の発生原理を利用した現実世界の創造』である。

この日も研究所の一室で実験は続いていた。今回天野達が行つてゐる実験は、試料に記されている1つの打点をケース内で発生させた他の並行世界に強制作用させる事で5つに増やす実験だ。スケールが小さい、と思う方もいるかもしれないが、実験といふものは普通安全性の高いものから始めるものである。大きなスケールで始めてしまうと、対処できない場合も出てくる。その点で天野はとても慎重な男だ。スケールを間違えるミスなど犯す訳がない。そう、故意に何かを操作しなければ……

「天野先生、機器のセット終了しました」

「はい、ありがとう。後は僕がやるからちょっと下がつて。ちゃんとコントロール頼むよ、音村助手」

「……はい」

天野が操作する機械は特定の場所の次元を変化させる装置だ。それにより『並行世界』を強制的に作り出す。その際、音村をリーダーとするサポートメンバーが5～10人体制で後ろから誤作動のチェックなどを行うのが、いつもの研究である。

天野達はまずケース内のエネルギーを上げると共に次元を上げる様機器を操作する。

「6次元突入、エネルギー準位をあげて」

「了解。δ線照射。ケース内を安定化」

順調に研究は進む。

「7次元突入します。アマノ——オトムラ指數を3つあげて」

「了解。2分後に指數が3つ上がります」

天野の判断でこのケースの中に試料を入れる。

「7次元突入完了。試料投入。同時に録画開始してください。」

打点が1つから増え始め、天野は安堵している。

(あとはエネルギーがなくなるだけだ。のんびり見てるか)

研究途中、ある事に気づく。

(ん？おかしい。僕達の解説した原理に基づいて実験は進めた。上手くいけば、試料に打点が5つしか付かないはず。何故打点が"数十個"も付いているんだ？)

打点が増えている時点で他世界への干渉は済んでいる。おかしいのは制御しているはずのものが過干渉を起こしている点だ。

「おい、一旦中止しよう。アマノーオトムラ指數を2つ下げて。ゆっくりと6次元まで落としてくれ」

……返事はない。

「おい、誰か。誰もいないのか？そんな訳ないだろ。音村くん？」

天野が後ろを振り向くと、其処には動きっぱなしの機械と1人の青年の後ろ姿が。

(あれは誰だ。音村くん?にしては雰囲気が違うような。まあ良い)

その青年に呼びかけようとした時

青年が何かレバーを1つ下ろそうとした。

(え、あのレバーって、もしや!)

「馬鹿野郎!やめろ!!」

青年がガコンとレバーを下ろし、

パリン

ケースの割れる音と共に

天野の目の前に広がる世界が

と曲がつた。

"ぐにやり"

天「!!? !!?」

天野に強い頭痛が襲いかかる。

(立つて……いられ……ない……)

天野の操作していた機械が急に熱を帯びる。完全に機器のオーバーワーク。天野は頭痛の原因を現在起きている過干渉によるものと踏んでいた。天野は装置を強制的に止めようとするが機器はもう触ることができないほど熱くなっている。

(ああ、僕は死ぬのか？まあ、歳も歳だから、しようが…………な…………い…………k

天野はそのまま目を閉じてしまう。

静まり返った研究室に誰かの声が響く。

「ふふふ。先生、そんなに『並行世界』が好きなら、向こうの世界に行つてしまえばいいと思いますよ。貴方の存在はこの世界にはなかつた事にしておきますから、御安心を」

* * * * *

「そうじー、起きなさい。もうお昼になるわよ」

天野が目を覚ますと其処は暖かい陽射しの降り注ぐ部屋だった。
(ん? ここはどこだ。研究室でも、病院でもない。)

天野は目の前にいる女性に聞いてみるとした。

「あのー、ここはどこでしよう。あなたはどなたでしようか?」

「またそうやつて寝ようとする。今日はそんなことに引っかかりませんからね！お母さんは操司の母親なんだから、そんな嘘バレバレですよ！」

早く起きてきなさい、とそう言い残して、母と自らを名乗っていた人物は去つていった。

(どういう事だ、これは。)

とりあえず起き上がるうとするといつもと感覚が違う。手元を見ると、やけに小さい。

(これはもしや…)

天野は近くにある鏡を見て驚愕した。体が縮んでしまつていた。

(はあ、どこの名探偵だよ、全く)

部屋に貼つてあつた名前シールから自身の名を「甘野操司」だという事を知る。

甘野は状況を整理した

(まづここ)は僕の知る世界じゃない。記憶では並行世界の実験途中だつた。あの青年が下したレバー。あれは恐らく音村くんが研究していた核融合によるエネルギー生成器のレバーのはず。

つまり、あの膨大なエネルギーによつてケースが壊れ7次元空間が僕のところまで広がつたために、僕自身が『並行世界』へ飛ばされたつて事か。

…ふう、厄介だな。

取り敢えず情報収集は朝食を摂つてからだ)

事の発端は中国輕慶市、発光する赤子が生まれたというニュースだつた。

それ以降、各地で『超常』は発見され、原因も判然としないまま時は流れる。いつしか『超常』は『日常』へ、『架空』は『現実』へと成り代わつていき、世界人口の約八割がなんらかの特異体質を持つ超人社会。それが現代社会である。

そんな混乱渦巻く世の中で注目されている職業がある。それは

“ヒーロー”

元々は個性を悪用する者から市民を無償で救けていた人々がいた。彼らは活躍するにつれてヒーローと呼ばれるようになり、政府は世論に押される形でヒーローを職業と認定した。それ以降、ヒーローは子供達にとつて最も憧れる職業となり、誰もがヒーローを目指すようになる。

これは元ノーベル物理学賞受賞者の『天才』天野総司が『並行世界』で甘野操司として活躍する物語である。

第2話

操司はこの世界の状況を知るために母からインターネットを借り調べていた。

(おいおい、これを人間と呼んでいいのか…)

発光、硬化、獣人化……インターネットから拾った情報は元の世界ではありえない事だらけだった。それを可能にしているのが『個性』の存在。操司はこの『個性』のメカニズムに興味を持つていた。

(炎を吐く程度なら大道芸でもあるくらいだから出来なくもない。でも身に纏うとか考えられんわ。皮膚は一体どんな成分で構成されてるんだよ)

様々なことを調べていくうちに行き着いたのは、N.O. 1ヒーロー、オールマイトの存在だった。

絶対的な平和の象徴。彼がその名を世間に知らしめるようになつてからは犯罪件数が急激に減少している。

それもそうだ。犯罪というのは2つのファクターによつて減少させることができ。1つは規律の整つた、それでいて論理の破綻していない管理システムの構築と施行。これは操司が元の世界で実行されていたことだ。警察と政治による法整備と取り締まり。これにはそしてもう1つは絶対的な力、抑止力の存在。この世界では後者が用いられることで社会を整えている。

両者にはそれぞれデメリットがある。前者は非常に真面目に整えない限り社会全体に停滞感が生まれる。停滞感は即座に社会への不満へと変容し、結果として社会の解体へと繋がりかねない。後者は絶対的なもの、そのものに依存してしまっため、それが崩れれば社会の乱れが一気に暴発してしまう。

つまり、どつちも一長一短なのである。

オールマイトの存在は操司にとつて不安を抱かせた。

(この人がいなくなつた後の社会が大変だ。彼がいなくなれば敵の数は倍増し、社会は乱れる。そうならないためには、新しいシステムの構築をしなければ)

「あら、いきなりパソコン貸してとか言うから何考えてるのかと思えば、オールマイトの事調べてたのね」

操司が考え事をしていると母、甘野愛衣がやつて來た。母はおつとりした風貌の割に

180前後は有るのではないかという程の長身だつた。朝食のヨーグルトに砂糖と間違えて化学調味料を入れたあたり、中々独創的な天然だと言える。

「あ、お母…おかあさん。そーなんだ！ オールマイトつてかつこいいよね!!？」
操司は見た目のことも考えて話し方を子供っぽく変えていたが、まだ慣れないうだ。

(気になるのは僕自身の個性だな。でも自分の個性を尋ねると怪しまれる可能性もなくはない)

「ねえねえ、おかあさんのこせいつてなあに？」

操司は母の個性について尋ねることにした。というのも、個性というものは遺伝的なものであると先ほどの情報にあつたからだ。

「お母さんの個性はね、「愛情」つて言つてね。お母さんの持つてる幸せな気持ちを周りに分けてあげられるの。」

(なるほど、心情操作つてところか。)

「だからね、ほら！」

途端操司の心の中に何か暖かいものが湧き上がつてくる。まるで陽だまりにそつと手を置いたかのような温もり。操司は思わず笑みを浮かべる。

「ね、お母さんは今と一つでも幸せだから、操司にも分けてあげるね」「うん！ありがとう、おかあさん！」

(僕はこの世界では幸せな家庭に生まれてきたな)

操司のこうした感情は母の個性のせいなのか、それとも自然と湧き上ががつてくるものなのか、それは操司にさえも分からなかつた。

これが、甘野操司、齢4歳と3ヶ月の頃である。

* * * * *

丁度5歳になる一週間前、操司が折り紙をしていると、机に置いてあつた操司の折った鶴が急に浮いた。操司の個性が遂に現れた瞬間だつた。

その個性の名は『物質操作』自身の肌に触れたものを動かせる個性である。操司は平静を努めていたが内心ではとても喜んでいた。

(身体を動かすことは嫌いではないが、頭を使う方が得意だ。これなら頭脳戦を主にして戦える。しかも、動かす、という行為自身は極めて物理的だ。これならいける)

医師の説明を聞きながらそのようなことを考えていた。その際、操司の横顔を母の愛衣が若干心配そうに見ていた事を操司は知らない。

操司の個性が判明した日の夜、操司が寝静まる頃。愛衣は夫に操司の個性について話していた。

「…なるほど。操司はきちんと個性を持つて生まれてきたか。ひとまず良かつた」

操司の父の名は甘野和眞。彼は現代社会に約2割しかいない無個性である。現在はヒーロー事務所で経理をしている。

彼自身が子供の時はまだ無個性が3～4割いたため、（若干の不平等さは感じられたが）爪弾きにされることはなかつた。しかし、操司の生きている現代は違う。自分の影響で息子が無個性となり、それが虐めに発展してしまった事を恐れていた。そのため、妻から神妙な顔で話を切り出された時は緊張していたのだった。

「そんな事はどうでもいいんです。私は、あの子が自分の力を過信してヒーローになるとか言いださないかを心配しているんです」

操司の個性は決して強力なものではない。ただ物を動かせるだけだ。しかし、昼間の操司の嬉しそうな顔、そして以前急にPCを借りてオールマイトについて調べているところを見てしまつていた愛衣は、操司がオールマイトのようになりたいのではないか、ということに不安を抱いていた。

確かにここ最近聞くヒーローには、目立つから、や、かつこいいから、などといった曖昧な感情で就いているものもいないとは言い切れない。そのため、個性としてヒーローに向かない者でさえもヒーローになろうとしている風潮がある。それに操司ものつてしまふのではないか、という不安は尤もなことだつた。

それに対して和眞は何も気にしていないかのように答える。

「自分が何になりたいかなんて自分に決めさせればいいんじゃないかな？」

僕だつてヒーローになりたくて必死に鍛錬したわけだしさ」

和眞は高校入学までヒーローになりたかった。しかし彼は無個性。そこで彼が考えた事は、ありとあらゆる武術を自分のものにすることだった。今では、空手や柔道を始めとする日本武術、カンフーを始めとする中国拳法からボクシングなどの西洋武術まで多岐にわたる武術に造詣が深い。

「でも、あの子をそんな危険な場所に晒すのはどうかと思いますし、あなたと私の子なら絶対に向きませんよ」

「愛衣はただ息子が愛おしいだけなんだよ。その気持ちは素晴らしいけど、彼の考えにも寄り添つてあげないと、愛情はただのエゴイズムに成り下がってしまう。そこは堪えることも必要なんじやないかな」

愛情というのは子供の成長の上で大切なことだ。しかし、押しつけがあまりにも激しくなつてしまふと、それはただのエゴイズムに成り下がる。愛情をどの程度見えるように与え、どの程度隠すのか。このバランスをとることがとても大切なこととなる。

そこで和眞がふとある事を思いつく。

「うん。決めたよ」

「? 何をですか?」

「次の僕の休みから操司に武術を少しずつ教え始めよう。きっと操司にとつていい経験になるさ」

愛衣は机をバン！と叩く。

「それはあの子がヒーローになる事を押し付けてる事にはなりませんか？！」？

貴方は自分の断念した想いをあの子に押し付けるつもりなのですか！」

「やだなあ、愛衣。そんなことはないよ。僕は息子がこれからどんな危機にさらされようとも生き延びる糧を与えようとするだけだよ」

「でも！」

「愛衣は操司をどうしたいんだい？弱くしたいの？それとも強くしたいの？」

「あの子は私たちの玩具ではありません！それはあの子が決めることであつて「そう、それ！」

和眞の突然の大声に愛衣はキヨトンとする。

「操司が何になりたいかなんて操司にしかわからない。僕たちのできることは操司がやりたいと言つたことを成し遂げられるようにサポートしてあげれば、それでいいんじや

ないかな」

愛衣は黙つたままゆつくりと頷いた。

「なあに、操司ならきっと大丈夫。だつて僕達の息子なんだから」

和眞は操司のことを信頼している。それは、操司が絶対に自身に嘘をつかない、そして立派な姿で成長してくれることに対する信頼である。だからこそ和眞は操司に対して客観的になれる。これが甘野一家が良いバランスを保つていられる秘訣である。

こうして、操司の、そして甘野家のある種の運命を決める夜は過ぎていった。

第3話

それから甘野は取り敢えず勉学に励むことにした。

(こここは『並行世界』だ。僕の知らない知識が常識になつてゐるかもしだれない。勉学はやつても無駄にはならないしね)

小学校入学後の6年間、甘野は年齢にふさわしくないような内容までこなしていった。小学6年時には高校2年までの学習内容は全て終わらせる程であった。

母の愛衣が操司の勉強している所を覗き見て動搖し、実は頭脳系の個性なのではないかと疑われることになつたために病院に連れて行かれたのはまだ記憶に新しいことである。

操司は中学に入学した。場所は、私立聰明中学校。操司の家の周りで頭の良い学校と言つたらここだけであつたためだ。因みに操司の手応えは全教科完答であつたが実際の入試成績は学年2位。

（うーん、少し気を抜きすぎたかな。それともあの図形の問題で三角比を使つたのが減点されたか？）

操司には小、中学生とはどんなものなのかを教えたいたい所である。

* * * * *

入学初日の朝。操司は全力疾走していた。

（やばい！集合時間まであと10分!!？

昨日調子に乗らずに寝ればよかつた！）

ただの寝坊である。

操司はなんとか5分前には中学校に着き、指定の教室に入つた。すると、教室内は

思っていたよりも賑やかであつた。

(ふーん、エリート校だから皆眼鏡かけた面目くんかと思えば、意外と普通の中学生だな)

操司が自分の席に座ろうとすると、

「あ、あの！」

誰かが後ろから声をかけてきた。操司が振り向くと其処には一組の男女がこちらを見ていた。女子は恐らく身長150前後で肩にかかるないくらいの髪型。色は若干茶色みがかったが、恐らく黒だろう。明るく活発な雰囲気が全面に出ている。男子の方は推定170cmで三白眼が特徴だ。こちらは女子とは対照的にクールな、落ち着いた雰囲気が感じ取れる。

「ん？なんですか？」

「君つてさ、甘野操司君ですよね」

「はい、そうですけど……」

あ、知り合いでしたか？すいません、覚えてなくて……人の顔と名前覚えるの苦手なんですね

「あ、いやいや、そうじゃなくて」

なら何の用なのだろう、と操司が不思議に思つていると、

「あなたの席つて、其処の1つ前じやないですか？」

「えつ…………」

操司は固まる。

その後女子に對して土下座しそうなほどの勢いで謝つたことはまた別の話である。

* * * * *

「ははは、もう大丈夫だつて！別に其処まで氣にしてないし」

操司の土下座ムードに少し嫌気がさしてきたのだろう。女子は話を区切ろうとする
「もう、その話は終わり！」

「んじや、お互に自己紹介でもしようか」

「…うん、わかつた。

僕は甘野操司。よろしくね」

「私は冬野優姫（ふゆのゆうき）。んで、こつちが」

「烏丸瑛九郎（からすまるえいくろう）だ。よろしくな、操司」

「よろしくね、冬野さんにカラスくん」

「烏丸だ」

「えー、いいじやんカラスくん。カツコ良くない？」

烏丸は少し不機嫌そうな素振りを見せる。操司が呼び方を変えようとした時、「クロくん何照れてんの、もう」

「いや、照れてない」

（不機嫌ではなく照れだつたのか。これは表情読み取るのに少し掛かるな。

てか、これはいじれるか？）

「そんなー、照れなくていいよカラスくん！」

「だから照れてないって！てか烏丸だ！」

「わかつたよ、カラスくん、じやなくてクロちゃん」

「呼び方悪化してるぞ！てか優姫！お前は笑いすぎだ！」

「だつて、クロちゃんつて。

どこのサークス団だよつて考えるとさ…ぶつはあ」

操司は烏丸が某サークス団に属している所を考えて、優姫とともに笑つてしまふ。
これが操司と2人の出会いであつた。

その後先生が来てクラスは静かになり、入学式は滞りなく進んだ。操司はその際一年代表挨拶で優姫が出ていたことにより、入試1位が優姫だと知り驚いたのであった。

* * * * *

下校時、3人はたまたま帰る方向が一緒だつたため、一緒に帰ることにした。

話の最中、優姫がこう切り出す。

「ねえねえ、2人はさ、将来は何になるの？」

「俺はヒーローになる。雄英高校に入つてオールマイトイみたいな立派なヒーローにな」

「ふーんそなうなんだ。カラサワくんもヒーローになりたいのか」

「烏丸だつ！もうカラしか合つてないぞ！」

ていうか操司もヒーローを目指してゐるのか？」

操司はヒーローを目指してはいなかつた。それよりもならなければいけないと思つていた職業がある。

「ううん、違うよー

優姫さんは何になりたいの?」

操司は優姫に振ることで自身の夢を語ることを逃れようとした。

「私もヒーローになりたいんだ。でもあれだな、オールマイトみたいな熱血漢よりも、ベストジーニストみたいなスマートでクールなヒーローになりたい」

「優姫がマツチヨはちと厳しいしな」

「でも、性格はお世辞にもクールとは言えないね」

優姫がオールマイト並みに筋肉質な姿を想像して操司はおもわず笑つてしまつた。
「もー、そんなに笑わなくともいいじゃん。

ていうか、操司君はどうなの?」

「ん? んーっとね。言つてもいいけど、怒らないでね?」

2人はキヨトンとした顔をする。操司はそんな2人を見て苦笑いしながら
「僕はね、政治家になる。」

「へー、珍しいね」

ヒーローというものが職業と化した時代において、ヒーローを目指していない者の

方が少ない。ある調査では、中学生の約9割がヒーローになりたいと答えたとの事である。

「何でだ？」

「ん？なりたいから、ではダメかな？」

「違う。俺らが怒るつて思つた理由だ」

そう、ただヒーローではない職業になりたいだけで怒るほど瑛九郎も優姫も短気ではない。それはまだ付き合いが1日にも満たなくとも分かることだった。

操司は一度躊躇つてから話し始める。

「んつとね。僕はね、ヒーローという職業をぶつ壊したいんだ。」

操司の目的は安定した社会の実現であつた。オールマイトのみによつて支えられているこの世の中を操司は危うく思つていた。いつ悪が暴走するかわからない。その中で社会を安定させるためのシステム、つまりは法の整備をきちんとする事でトップヒーローがいなくとも、さらに言えば、ヒーローという存在がいなくなつても成り立つようにしたい。それが操司の目標であつた。

しかし、ここで弊害がある。操司の周りには将来ヒーローになりたいと思つているものが多い。操司自身の目標が達成されれば、恐らくヒーローという職業は衰退、消滅

するだろう。ヒーローになる、という多くの人達の夢を自分の夢一つで潰してしまつても良いのか、と操司は考えていた。

操司は2人にこれらの事を包み隠さず全て伝えた。それに対する2人の反応は、

「良いんじゃないか？確かに、オールマイトがいなくなつたら敵は急増しそうだしな」

「でも、そしたら私たち何する？」

あ、操司君のボディガードしよう！

雇つてね、操司君！よろしく！」

何も変わらなかつた。操司は戸惑つてしまふ。

「え、2人とも良いの？」

「俺はボディガードは嫌だぞ。守るよりも攻める方が性に合う」

「クロ君今日は今までにないほどいじられてるし、それに喜んでるのは攻めるのが性に合つてないと思うなあ」

「いや、喜んでないから！」

「つて、その事じやなくて！」

僕は2人の夢を壊そうとしてるんだよ？」

2人はなんて事ないかのような顔をして続ける。

「うん。それはわかつた。でもさ、それを私達が止めようとしたらさ、今度は私達が操司君の夢を壊す事になる。それは違うじゃん」

「そうだな。夢を見る権利は誰もが等しく平等にある。操司の夢も俺らの夢も同時に叶えれば一番だけど、ダメならそんときはそん時だ。今はそう考えて良いんじゃないか？」

操司は肯定されるなんて思いもよらなかつた。自分の考えている事は多くの人達の夢を壊す事になるんだ、と信じて疑わなかつたのである。しかし、目の前の2人は平然と自分の事を肯定する。これまでのどんな喜びよりも暖かいものが心の中に芽生えた気がした。

(……僕はこの世界でどうも恵まれすぎていてるな。大事にしないと)

「操司君？ 何考へてるの？」

「えつ、いや、どうやつたらカタキトル君をボディガードとして従事させる事ができるのかなーって」

「烏丸だ！ 最初と最後しか合つてないわ！」

「いいじやん。烏丸、カタキトル、つて、韻踏んでる感あつて」「あ、なるほど。つてコラ！」

「ふつ、あはははは！」

和やかな時間は早く過ぎるようを感じる。

これから先そう遠くない未来、2人に襲いかかる受難の事など、3人には知る由もなかつた。

第4話

それから操司と優姫、瑛九郎の3人はよく一緒にいるようになつた。クラスメイトと仲が悪いわけではないが、この3人でないとどうもおさまりが良くないようだ。勉学においては、優姫と操司が大体同じ程度で常にTOP2を独占、瑛九郎も学年で20位以内には入るほどであるから、頭が悪いわけではない。運動においては、優姫が他の2人に比べれば若干劣るが、それは性別の差というものもあるし、そもそもクラス内で言えば運動はできる方である。

よつて、学年内でこの3人を「聰明エリート3人組」と呼ぶ者も少なくなかつた。3人は全く気にしていなかつたが。

そんな私立聰明中学校にだつて様々な行事がある。体育祭、文化祭、マラソン大会
⋮ etc.

そんな中操司を最も苦しめるあの行事がやつて來た。

「ああああ、なんで写生大会なんて有るんだよおおおお…」

そう、実は操司、絵を描く事が苦手である。以前、人を描いたら「死体現場にある白いやつみたい」と言われ、犬を描いたら

「操司君つてさ、人間コンパスか人間定規だよね、きつと」と言われ、リングを描いたら

「すごーい！数学の幾何学模様みたい！座標軸はどこに設定してるの？」

と言われるほどだ。この日は写生大会当日であるため、一日中自分で決めた場所の風景画に取り組む事になつていて。

操司が嘆きながら登校していると、2人が近づいてきた。

「おっはよー、操司くん！今日は頑張ろうね！」

「ああ、おはよう、優姫さん。

……写生大会なんて滅べば良いのに、てか滅ぼそつかな。ここでヴィランに墮

ちるのも1つの手だよな」

「おい、物騒だな、止めとけよ。親友が敵となるヒーローとかファイクションの世界だけで十分だ。

…………まあ、共感はするがな」

絵が苦手なのは瑛九郎も同じようだ。

「でも、私も一緒に描きながら教えるから、頑張ろう！・2人とも！」

そう、以前写生大会で書く場所を決めていた際、優姫は強引に2人とも自分と同じ場所を描かせる事にしていた。3人が描く場所は街の傍を流れる河川敷であり、他に其処を描こうとする人は居なかつた。他の人に自分の絵が見られない事は良かつたのだが、操司と瑛九郎にとつて一番の天敵は

「優姫さん！今日は僕の描いた絵について感想言わなくて良いからね！」

「俺も同様してくれ」

「えー、なんでー！」

彼女、冬野優姫である。操司が以前言われた感想を前述したが、あれは全て優姫による発言。しかも全て悪気があるわけではないのがいつそう操司のメンタルをえぐる。

操司よりも優姫との付き合いが長い瑛九郎ならば尚のこと。

「ねえ、瑛ちゃん。今日はがんばろう」

「どれだけ精神崩壊を起こないようにするかが勝負だな」

「ちよつとー！2人とも私の事デイスつてない？？」

などと話しつつ校舎にたどり着く。

朝のホームルームが終わると直ぐに全員が体育館に集まり、美術の先生による注意事項を聞く。通りがかりの方にきちんと挨拶をするだとか、友との無駄話は厳禁だとか今日1日で終わらなかつた時は課題になるということまで細々と注意された。

それらも終わり、遂に移動、そして写生開始となつた。3人の選んだところは河川敷、往復は徒歩で移動する。ならば、中学生ならば当然、

「ふつふつふ。クロ君ありがとね、荷物持つてくれて」

「ちくしょう、覚えてろよ2人とも」

「じやんけんに3回も負けた瑛ちゃんが悪い」

こうなる。

何気ない話を続けていた3人だが、急に優姫が切り出してきた。

「ならさ、操司くん！走つていこつか!!?」

優姫はそう言つて全力で走り始める。

「あ、ちよつと、優姫さん!?」

「操司、俺は走りたくないからあいつを追いかけてくれ」

瑠九郎は3人分の画材一式を持つていて。走るのは流石に辛かつた。

「うん、分かつた！」

そう言つて操司は優姫を追いかけて走り出した。

「……頑張れよ」

瑠九郎の呟きを聴くことなく。

* * * * *

操司が走つて河川敷に向かうと、優姫はもう既に着いており、目の前を流れる川を何かを考えているかのように見つめていた。

優姫は操司の存在に気付き、こちらに笑顔を向ける。

「あ、操司くん、遅いよー！」

暇だつたんだからね」

「はあ、はあ、優姫さんがはやいんだって。これでも頑張ったんだよ」

そう言つて操司は息を整えつつ今回描く景色を見た。操司の目の前には緑が生い茂り、川の向こう側には木々がざらりと立ち並ぶ。左側には川の両岸を結ぶ橋が立つている。川の水は透明度が高く、向こう側の景色を写し、自然にできた写生画のようになつてゐる。

操司はおもわず魅入つてしまふ。その様子を見て優姫は微笑みつつ話しかける。

「どう、この場所。春なら奥の桜が満開になるからもつと良いんだけどね。綺麗でしょ」「うん。良い場所だね」

「ふふ、ならよかつた。この場所は私の大好きな場所でさ、何かあつて悩んだり落ち込んだりするとここでぼーっとしてゐる。2人に私の大切な場所を教えてくて」

「ふーん そつか」

操司は優姫の微笑みにどきりとしてしまう。

(……まあ、優姫さん可愛いししようがない。恋ではないよな、友達だし)

「どうしたの？ 黙つちやつて」

「いや、優姫さんも落ち込むことつてあるんだなあつて思つて」「何それ、ちょっと心外だなあ。とか言いつつも、そういうえば落ち込むことつてあんまりないかも。

それよりも何か決心をしたいときによくここに来るかな」

「それが優姫さんらしいね。今日はなんか決心することあつた?」

優姫は少し躊躇いながら答える。

「うん。まだ決心出来てないけど」

「そつか」

操司は優姫の思いつめた顔を見て心配する。

「僕にできることあつたら言つてね。何でもするから」

そんな操司の答えに優姫はふふふ、と笑う

「(私は操司くんのせいで悩んでるのに……)

鈍いなあ、もう

「へ? なに?」

「いや、何でもない。決心できたなつて話」

「そつか、なら良かつたよ」

と、ここで瑛九郎がついたようだ。

「あ、瑛ちゃんが来た」

「やつと着いた：：画材つて何気重いな。お、2人とも何かあつたか？」

「へ？ ただ優姫さんと仲良く話してただけだよ」

「そうか。分かつた。ほら、2人の分」

そう言つて瑛九郎は2人に画材を渡す。

「クロくん：ありがとね」

「おう、決心はまだついてなかつたか」

「うん。ついてたと思ってたのにね。でももうついたよ」

「分かつた。後から事情は聞くからな」

2人の会話を聞いて操司はキヨトンとする。

「だから事情も何も話してただけだよ」

「…ふう。そうなら良いけどな」

「ほら、2人とも、描くよ！ 課題にはしたくないから早く終わらせよ！」

こうして3人の写生大会は過ぎていった。

帰りもじやんけんに負けた瑛九郎が3人分の荷物をすべて持ち、しかも2人に肉まん

を奢ることになつたのはまた別の話である。

* * * * *

某日、闇深まつた頃のとある場所

2人の男が向かい合つていた。初老の男はへなりとその場に座り込み後ずさりをして距離をとろうとする。若い男の方はそんな抵抗も気に留めずすかずかと近づいていく。

「やめてくれ、やめてくれ。なあ、俺はお前に何かしたか？何もしてないだろ！」

「まだ分からんか。それがお前の罪だ」

「だ、だれか、たすけ…」

逃げようとする男に対し、別の男はナイフを突き立てる。血飛沫が周りに飛び散

る。

「始末完了。さて、帰るか」

男が個性を使おうとすると

“ガタン!!!!”

何かが倒れる音がした。気になり音のした方に近づく。どうやら扉の奥のようだ。

男が扉を開けると、そこには傷だらけの少年がいた。少年は漆黒のように深い目をしており、まるで意思などないかのような顔つきでこちらを見ていた。

「……」めんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい

……」

ぶつぶつと呟いている。男はそんな少年の姿をじつと見た。

「ボウズ。お前の親は死んだ。いや、殺した」

少年は何も考えられないかのように男を見つめている。

「……俺と来るか」

こくりと頷く。

「ならさつさと支度しろ。ヒーローと騙るクズどもが来る」「おじさん、名前は？」

「……切屑。切屑 崩土（きりくず がれ）だ。
行くぞ、早く支度しろ。源氏 照久（げんし てるひさ）」

悪は蠢く。

平和の陰に

ひつそりと

確実に

第5話

「ねえ、クロ君。私どうすればいいのかなあ」

「何がだよ。って言つても最近の行動であからさまだな。操司の事か？」

「うん。そう」

写生大会が始まる前。いつからか優姫は操司に対してもやもやした感情を抱いていた。

「私ね、最近操司君に会つて話してると、急に鼓動が速くなる事があるんだ。運動した後とも違うし、病気かな、とは思つてたんだけど。なんかそれがさ、操司君を見た時に限るんだよね。」

「これってさ、いわゆる、恋、なのかな」

「しらねえよ。俺はそんな感情持つたことないからな。でも、そう思うつてことはなんか特別な思いはあるんじやねーのか？」

「特別な、感情？」

首をかしげる優姫に対して、瑛九郎は続ける。

「そう。だつてそうだろ。もし恋つてもんがただの動悸ですつて言われたら世の中のラブストーリーは全部崩れ去つてしまうだろ。そこにある種の特別な感情が有るから、ラブストーリーっていう分野は何百年も不動の位置にいる。それこそ源氏物語の頃からな」

恋、という言葉は世の中に広く浸透している。しかし恋について定義をしろと言われる時もが納得する答えを出せるものは恐らくいない。それは恋というものが人によって感じ方の違う、多面的なものであるからだろう。恋愛小説というのはこうした感情の一部分を見せていくに過ぎず、だからこそ飽きられることはない。

「…………ん——、もうわかんないよ、そんなの！」

大体それがわからないのだから相談しているのである。

「んじやあ何だ。お前は俺にお前の感情を決めつけて欲しいのか？あれは恋でこれは恋じやないってか？そんな自身を他人に縛られる行為、嫌じやないか？」

「やだ」

優姫の即答に瑛九郎はおもわず笑つてしまつた。

「なら俺が話せるのはこれだけだ。自分が恋だと思つたらそれは恋だ。きっと。だか

ら、自問自答をしつかりして答えを出せ。んで答えが出たらそれに自信を持て

優姫は黙つて瓊九郎の話を聞いている。

「なあに、焦るな。もしそれが傍から見て絶対恋なんかじやない！ただのエゴだ！とか思つたら俺が止めてやるから」

「……途中まで感動してたけど、最後の言葉はクサすぎない？」

「うるせい。それが俺なんだ」

「ふふ、でもありがと。もう少し考えてみる」

そしてあの写生大会である。あの日を境に優姫は完全な自信を持つてこう言えた。

" これは恋なんだ" と。

あれから優姫は操司に対して何度かアプローチをしてきた。それは操司の心にどきりとくるものであつたが、操司はそんな感情を他人に見せないようにしていたため、優姫は効果なしだと誤認する。つまりは、進展がないということだ。

3人はそのまま冬を迎える。

この日の朝もいつも通り3人で登校していた。

「そういえばさ、今日は一斉下校日だよね。部活もないよ」

「え、ほんと!??:コンサート近いのにな」

操司は音楽系の部活に所属していたため、冬のコンサートの準備で忙しい。その為、最近は3人で帰ることが少なくなっていた。

「そうだな。なら帰りは3人で、か」

「久々だねー、操司君も一緒に帰るのは」

「2人とももう帰る話? 早いって」

そんなことも話しつつ3人は登校した。校門前では優姫の友達が話をしており、ばつたりと出くわした。

「あ、ゆうきー、おはよー」

「おはよー！んじや2人とも帰りね」

「あ、うん……」

優姫が離れていった。少し憐れな顔をみせる操司の事を見た瑛九郎は小さくため息をつき操司に話しかける。

「なあ操司。お前朝やらなきやいけないことつてあるか？」

「ん？ ないよ」

「ならこのまま俺についてもらつてもいいか？」

「分かつた」

2人はこのまま一階にある1年教室には目もくれず屋上へと辿り着く。

「んで、なに？」

「あのさ、お前、俺に隠してる感情があるだろ」

操司は急に真面目な顔になつて黙る。

「俺、分かつてるぞ。お前さ、優姫に対し何かしらの感情を持つてるよな」

「そんな、優姫さんはただのともだ：『隠すなよ!!?』」

普段滅多に感情を見せせて怒鳴る事のない瑛九郎の大声を聞いて操司は驚く。

「なら今日の朝何でお前優姫が離れていた時にそんな寂しそうな顔してたんだよ!!?」

何で最近毎朝俺らと会う時に最初に優姫のこと見て嬉しそうに笑うんだよ!!? なんで

：何でお前は俺に自分の感情を隠そうとするんだよ!!?」

瑠九郎の叫びに思うところがあつたのか、操司も言い返す。

「だつて、そりや、言いたくなるだろ！僕が言つたらこの関係は崩れる。誰が好き好んでこの楽しい日々を壊しに行くんだよ！」

僕には、無理だよ……」

操司も自身の優姫への恋心には気づいていた。しかし、今の状況が心地よいばかりに優姫へさらに近づこうとは思えなかつた。

その考えを瑠九郎はぶち壊そうとする。

「なら何か？お前が暴露したら俺と優姫がお前から離れていくとでも思つたのか？そんなに俺と優姫のことが信用できないか？」

「それはちがう、違うんだ……」

操司は黙つてしまふ。

「……………そうか。お前はさ、自分を信用できてないんだな」

瑠九郎の指摘に操司は身体を小さく震わせる。

「自分のことが嫌いで、自分に自信が持てないんだな。だから、周りのこととも信頼しきれない。周りが自分と仲良くしてくれるのはただの社交辞令だつて考えが頭をよぎる。そうやつて周りに対して自分を取り繕うとしてたんだよな」

「…………そうだよ。 そうだよ！ 悪いかよ、自分のことが嫌いで!!？」

甘野操司は自分のことが嫌いだ。一人称は僕でなよなよしいし、頭がいいとは言つても自分よりも良い優姫だつている。他人の夢を潰そととする夢まで持つてしまふ。そんな自分は社会に必要なものと心の奥底では感じていた。

そんな操司が考えついた、操司に出来ること。それは自分の思う理想の自分を演じることであつた。自分の思う理想の自分になることで（あえて悪い言い方をすれば）周りを欺こうとする。

そのことを露呈されて剥き出しの自分を曝け出してしまふ操司に対し、瑛九郎はこう続ける。

「おまえ、初めて俺に本心を曝け出したな」

「えつ？」

「ずっと他人に對してフィルターかけてたよな。んで外界と接しないようについて感じだつた。フィルターを外せていたのは優姫だけだつたな。あいつはきっと気づいてないだろうけど」

瑛九郎は操司に近づき、手で顔を固定して目を見ながら話し続ける。

「ちよ、瑛ちゃん？顔が痛いよ」

「黙つてろ。いいか、操司。俺は人の感情に対してもうこう言う気はないしそんな権利はない。でもな、お前は別なんだよ。俺にとつてお前は親友だから。だから何も気にしてほしくないんだよ」

操司は黙つて話を聞く。操司にも何か思うところがあつたようだ。

瑛九郎はそんな彼の目を見て固定していた手を離す。
「話はこんだけだ。うだうだするんだつたら俺に相談に来いつてだけ。んじや、教室行くか」

瑛九郎は戻ろうとするが、操司はまだ考えている。見兼ねた瑛九郎が続ける。
「そんなにうだうだするんだつたら俺が先越しちまうぞ」「……そんな気ないくせに」

操司の答えに瑛九郎は笑いながら答える。
「正気になつたらいい。行くぞ」

「うん、分かつた。

瑛ちゃん？」

「なんだ？」

「…こんな僕のために、ありがと」

「はあ、お前は自分を卑下するの禁止な」

「え、それはきついよ。僕のアイデンティティが8割なくなる」

「嫌なアイデンティティだな、てか残りの2割はなんだよ」

「んー、メガネ」

「それはうちの中學の8割と被るぞ」

「おー、すごい。それって個性の浸透率と一緒にやん」

「視点そこかよ」

ようやく普段のようになつた2人は教室に戻つていつた。

* * * * *

場所は変わり、とあるヒーローの巡回中。

1人の少年が路地裏に入つていくところをヒーローは見る。まだ小さく弱々しい少年の不審な行動を見てヒーローは少年に声をかけることにした。

「おい、きみ。1人でそんなところに入るるのは危ないぞ！きみは一体何をしようとして

るんだい？」

「何がおかしい」

途端に少年の雰囲気が変わる。

「そりや、質問の内容だよ、クズ野郎が。何をしてるんだって？見てわかんないの？」

ヒーロー狩りに決まつてんじやん』

直後、ヒーローの頭上にいつの間にかあつたコンクリートがぬるりと崩れ去る。

「なつ」

そのままヒーローはコンクリートの山に埋められてしまう。
本来ヒーローならばこのくらいの攻撃は避けることはたやすいはず。しかし出来なかつた。何故か。

胸にナイフが数十本と突き刺さり、足は何かに掴まれていたからだつた。
「始末、完了」

「はーい、皆お疲れー」

少年の合図とともにガラの悪い男たちが数人影から出てくる。
「んじゃ、この町はもうめぼしいヒーローいないから一旦もどろつか」

「はい！了解です！」

少年の合図に男たちはそそくさと立ち去つていく。その場には少年と若い男の2人のみが残つた。

「よくやつたな、照久」

「いえいえ、あの阿保どもまとめてヒーロー1人ぶつ殺すくらい訳ないですよ。全ては崩土さんのためです」

崩土は照久に問う。

「…お前の正義はなんだ」

この問いに照久は即答する。

「僕の正義は崩土さん、貴方そのものです。そんなわかりきつたこと言わせないで下さ
い」

「…そうか。なら良い」

そんな崩土に対しても照久は話しかける。

「それより、あの短気な阿保どもは僕らの帰りが遅いと何やらかすかわかりませんから、
さつさと帰りましょか」

「そうだな。帰ろう」

この時、源氏照久、既に11歳。あの事件から四年が経つていた。照久と崩土は『ヴィ
ラン盗団』というものを結成する。約60人の大盗団だ。団長は源氏照久、参謀は切屑
崩土が勤めている。奪うものは金品というオーソドックスなものからヒーローの命ま
で。

「次の場所は、保須市。インゲニウムというヒーローが大量のサイドキックを雇つてい
るらしい」

「へえ、面白そうですね。大量のクズを一斉駆除、か。楽しみだ！」

恵は確実にすぐ傍まで来ている

第6話

操司と瑛九郎が思いを吐露した次の日の夜。操司は瑛九郎に電話をかけた。

「…もしもし」

「あ、瑛ちゃん。やつと出た遅いよー。3コール以内に出るつて約束じやん
「俺らは何処のバカツプルだよ。そんな約束した記憶はない」

「そうだねー、と操司は笑い返す。

「んで、なんかあつたか？」

「うん。僕さ、決心したよ。明日の昼、優姫さんに僕の思いを話す」

「そうか」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………なんか他にないの!!?」

先に沈黙を打ち破つたのは操司だつた。

「へ？いや、俺が何か言つたところでお前はその決心を曲げないよな」

「うん。まあ、そうだけど」

「なら頑張れ」

「…うん。ありがと」

また沈黙が訪れる。今度は瑛九郎が先に話しかけた。

「んで、他になんかあるか？」

「……あのさ。もつと大事なことがあるんだけど」

「…どうした」

瑛九郎は訝しげに続きを促す。

「実は、さつき机の角に右手の小指をぶつけていた『プツツ。ツー、ツー、ツー、』

ふざける気だと判断した時点で切る。瑛九郎は即断即決の漢らしい人間だつた。

次の日の昼、3人は屋上に集まつた。

聰明中学校は給食はない。弁当をそれぞれ好きな場所で食べることになつてゐる。屋上で青空の下弁当を広げる。これが操司達のいつものパターンだつた。

3人は昼食を済ませ、後は戻るだけとなつた時、操司が優姫に話しかける。

「優姫さん。あのさ、話があるんだけどさ」

「どうしたの？ 操司くん」

優姫が操司に気を取られている隙に琰九郎はそつと抜け出す。

操司は一度大きく深呼吸をして、話を続ける。

「あのさ、……」

操司はこれから先、自身で言つた言葉を覚えていない。ただ、覚えていることは、優姫が嬉しそうにしていた事、そして、急に身体に人の温もりを感じ、

「遅いよ、ばか」

と耳元でつぶやかれた事だけだつた。

「全く、やつとか」

扉越しに琰九郎が全て聞いていた事は2人とも知らない。

* * * * *

（2人が付き合う事になつたため、瑛九郎はその日一人で帰ろうとした。
（カップルに挟まるつてのもなんか気まずいしな。先に帰つた方がお互にとつてい
いだろ）

しかしその願いは叶わなかつた。

「えーいーちゃん！何一人で帰ろうとしてるのかな？」

「そうだよ！クロ君も一緒に帰ろうよ」

「お前らの甘いムードに胸焼けするから遠慮する」

「大丈夫。甘いと言つてもあんこみたいな甘さだから。ほら、瑛ちゃん和菓子なら好き
だつたでしょ」

「ムードの甘さに和風洋風は関係ない！」

抵抗しつつも結局一緒に帰る事となつた。

帰り道での会話はいつもと変わらない。

「クロ君はさ、操司君から相談されてたの？」

「いや、俺が直接聞いた。というか2人とも態度が違ひすぎて丸分かりだつたから聞か
なくとも分かつてた」

「え、僕はポーカーフェイス得意だと思つてたんだけど」

「あれをポーカーフェイスだと言い張るのなら世の中の哺乳類は全てポーカーフェイスの達人だ」

「僕のポーカーフェイス猿よりも酷かつたの!!?」
といつた具合である。

3人が話しながら帰っている途中、操司の歩き方が急に変になる。
「どうしたの?」

「…お腹痛い」

腹痛のようだ。

「駅まで我慢しろ」

「それは無理。災害レベル虎くらいヤバイ」

「なら大した事ないな」

と、軽口を叩きつつも近くにトイレのある建物がないか探した。
「操司君。銀行あるからそこで良いかな?」

「オッケー。ごめんね、ちょっとだけ待つてて」

「おう、さっさとしてこい。」

そう言つて操司は銀行に入り、瑠九郎と優姫は銀行の入り口付近で待つ事にした。

銀行内は平和だつた。しかし、そんな所にも悪は侵食する。

"パン!"

「全員動くな! 動いたものから殺すぞ!!?」

銃声とともに全身黒で統一された男が5人がその場を制圧する。混乱が巻き起ころる
銀行内を4人が制圧しつつ1人が銀行員に要求を出す。

「金を出せ。五千万だ。それ以下は受け付けない」

「し、しかしそんなお金ありま「ウルセエ!!」

「あるつて調べがついてるから来てんだよ。さつさと出せ」

銀行員が怯えていると奥から支店長のような男が来て話をする。

「ある事にはあるのですが、出すのに時間がかかります」

「何分だ」

「10分は最低でも…」

「8分で出せ。オーバーしたら30秒ごとに2人ずつ殺していく。良いな」

「…は、はい」

そんなやりとりが行われている間に4人の男たちは中にいる人間をまとめ、1人がその手足を縫い付けていく。これは誰かの個性なのだろう。

「よし、こつちは終わつたぞ」

「他の場所にいた奴らも全員集めてきたぞ。こつちも縫え」

あつという間に全員が固定されてしまつていた。

* * * * *

場所は銀行前。銃声が聞こえたかと思えば銀行のシャツジャーが急に閉じてしまい、瑛九郎と優姫は中にいる操司の事を案じていた。

「あの阿保、何トラブルに巻き込まれてんだよ」

「ねえ、どうしよう。操司君が、操司君が～!!?」

慌てている優姫の頭に瑛九郎はチヨップする。

「…痛い。」

「落ち着いたか。なら、やる事を決めるぞ」

2人は中の状況を想定しつつ話し合っていた。

「おそらく中の奴らは個性を使っている」

「確かに5人だつたはず。1人異形型がいるかな? つていう体格だつた。」

「突入するか?」

「いや、今の私たちじや殺されるだけ。対抗策がないままだとね。個性は使つちやダメかな?」

「ヒーローを目指すものとしては反対だ。法に違える事になるからな」「だと、私たちにできる事つて何もなくない?」

普通一般人の個性使用は法律で禁止されている。ヒーローを除く一般人は個性を公共の場で使つてはいけず、優姫たちにもその法律は当てはまる。その事を考えれば、そして、これから優姫たちが歩んでいこうと思つてゐる道のりを考えれば個性は使いたくない。

しかし、ここで瑛九郎が答える。

「…それは違うな。何ができるかじやない。何をしたいかだ。

優姫、お前はどうしたい?」

「…一般人を、操司君を助けに行きたい」

「奇遇だな、俺も同じ事を考えた」

2人の気持ちは固まつた。後は作戦を練り、実行するだけ。誰も傷つけず、操司を、そして一般人を助ける。この無理難題に2人はどう立ち向かうのか。

運命の時まで、残り7分を切る。

* * * * *

その頃操司は、

（トイレから出たらこんな事になるとはなー）

男たちに縫い付けられている最中だった。操司は縫われながらも状況を分析する。犯人は5人グループ。うち1人は腕が8本あるところを見ると異形型の個性だろう。もう1人わかっている個性は、自分たちを今縫い付けている男のものだ。恐らく見たま

んま、物と物を裁縫みたいに縫えることだろう。痛みはなかつたな。なんとも不思議な個性だ。後は不思議な匂いがする。これも誰かの個性だろうか。精神コントロールだといけないから、極力吸わないよう心がけよう。まあ、何もできないけど、気持ちだけね。

操司のできることは何か、何をすべきか、必死に頭を働かせていた。

と、ここでふと隣を見ると少年が泣きべそをかいて自分の身体を操司の身体と縫い付けられているところだった。ぱつと見る限り5、6歳なのだろうか。幼いながらも整った顔立ちに操司は一瞬どきりとさせられる。

(はあ、彼女ができたその日に違う人、しかも男の子にときめくなんて、優姫が知つたら何言われるだろう)

なんてことを考えつつ、少年を安心させようと小声で話しかける。

「ぼく。大丈夫だよ。直ぐにヒーローが。んーと、こちら辺だとインゲニウムか、が来てあんな悪役かぶれ直ぐにやつづけてくれるから」

「…………グスツ…………グスツ…………

ほんとに？」

「うん、ほんとさ。だから、笑顔で待つてよっか」

「……うん、わかつた」

若干ではあるが少年が泣き止んでくれて操司はホツとする。

(さてと、外ではきっと2人が僕のこと助けようとしてるだろうし。僕の方も動きます
か)

そう考えつつ、操司は右手を地面に、左手をポケットにそつとつける。
と、ここで先程の少年が話しかけてきた。

「ねえ、おにいちやん。おなまえなんていうの？」

「ん？ 僕の名前は甘野操司っていうんだよ。君は？」

「ぼく、てるひさ。源氏照久」

悪は確実に、ゆっくりと平和を侵す。

運命の時まであと6分30秒。

第7話

銀行内で男に縫い付けられた人々は男達の目の届くところに寄せられていた。

「何もしようとするんじゃねーぞ！銀行が五千万出してくれりやあ済む話なんだからよ」

5人中2人はしなければならない仕事が終わつたのだろうが、のんびりと構えているよう見受けられる。警戒心をまだ持つてゐるのは異形型と思われる腕が8本ある男と、身体が横にやけに太い男の2人。恐らく誰かが反撃に出ようとした時のガード役だろう。あとは交渉を未だに続いているリーダー格の男。

「…残り5分だ。さつさとしろ」

「…お願いしますから10分にしていただけませんでしようか。手続き等大変なんです」

「ダメだ。それを妥協すればお前らはすぐにつけ込む。1分が2分、2分が4分、4分が8分と増えていく。そうして許容してしまうと高を括るんだろ。きっとこの人達は甘いから妥協してくれる、と。そうなつてしまえば人というものは本来の力を發揮できな

い。

「これはお前らのために妥協しているんだ。8分。これ以上は妥協しない」

「そうして男は心の奥底で楽しんでいるかのような声を出す。

「なあに、時間が過ぎればランダムに人が死ぬだけだ。お前には何の関係もない赤の他人だ。気楽に行けよ」

銀行内には再び沈黙が場を支配する。

* * * * *

一方、優姫と瑛九郎はどうやつて入るか、そしてどうやつて安全に人々を助けるかについて話し合っていた。

「裏口はどう？」

「入れはするだろう。5人で中を全部制圧なんて不可能だからな。複製の個性がなければ、だが」

「んじや、私が見てくるよ」

そう言つて優姫が手をくるりと回すと、目の前に身長3cmほどの女の子が3人現れた。

優姫の個性は【雪女】自分の使い魔（小人て優姫は雪ん子と呼んでいる）を出せたり、雪を周りに降らせたりすることができる。

「見つからないように裏口とホール、トイレ前行つてきて。着いたら視覚共有、よろしくね」

『はーい』

そう言つて小人達は走り出した。

「あとは彼女達がつくのを待つことにして、やつぱり正面突破はダメかな？」

「人質に被害が出たらどうする。犯人達だけじゃないんだ」

「…やつぱそうか。

あっ、視覚共有完了した

「どうだ？」

「…裏口には誰もいないみたい。隠れてるわけでもなさそだし、あの子達が通つても何もないなら罠もないかも」

「なら裏口から突破だな……」

「トイレ含む他の場所には誰もいなさそう。あつ、操司くんも含めて皆一箇所に集められてる」

「犯人達の様子はどうだ」

「拘束されてるものを見るに、多分皆を1つに繋げてる何かがある。なんか、縫われてる? みたいな」

「個性だな。他のやつはどうだ」

「異形型は2人っぽい。腕が8本の大男とすつごいデブ」

「後者は異形型ではなくないか?」

瑠九郎の問いに優姫は否定する。

「いや、絶対異形型。だってデブの顔が顔の部分にないんだもん。左掌に顔がある」

「…そいつは手袋をしてるか?」

「いや、してない。不用心だよね」

「……あといい。戻つてこい。バレると厄介だ」

「オッケー」

「優姫が手をまたくるりと回すと小人達はその場でさあつと溶けてしまう。

「異形型には勝てそう?」

「コソ泥してるような奴には負けん。あと、顔が掌にあるデブも任せろ」

「だと、残り3人か…」
2人が考えていると

パサリ

と音がして、2人の目の前に四つ折りにされた小さな紙が落ちてきた。
「これは？」

その紙を見て2人は顔を見合させる。そのまま領き合った2人は決まつた作戦を行
動に移すこととした。

運命の時まで、残り4分30秒。

* * * * *

(さて、あとは何をしようか)

操司は頭をフル回転させていた。

この匂いは何の効果があるのかわからんが、いざという時のために呼吸は浅めにしてるから、これでダメならしようがない。犯人達のタイムリミットは残り約5分はないな。あの銀行員の焦り様からして恐らく2分はオーバーする。その時間を稼ぐしかないか。交渉術は知らないな。ふむ…

そう考えつつ操司は自分に縫い付けられてる糸の一端に手を触れる。

この糸抜くときは痛くないのかな。痛いのは嫌だぞ。なら、あいつらを捕まえて無理やり解かせるしかないか。右手は床につけっぱなしだし、もうそろそろいけるかな？いや、糖分が足りないな。くそ。手があと5本くらい欲しい。

操司が思案していると、1人の銀行員が何やら手元を動かす素振りを見せた。それに反応しないほど男達は鈍くない。すぐに銃を突きつける。

「おい、お前！今何しようとした！」

「いえ、何も」

「ふざけるな！早く手を出せ！」

激昂する1人の男をリーダー格の男がなだめる。

「おい、そんなに怒鳴るな」

「…はい、すいません」

何も起こらなかつたことにホツとしたのもつかの間、男は覆面のために顔が見えないはずだが、何故かにやりとしたように感じられた。

「こいつは死にたいつて言つてるんだよ。おい、お前、殺してやれ」

「なつ」

「りょーかーい」

命令された男は銃を構える。銀行員は死を覚悟したのか、目をぎゅっと瞑る。

パン

ボスツ

銃と銀行員の間に突如柔らかい壁が盛り上がり、銃弾はそれに当たつてしまふ。
「えーとさ、さすがに殺すのはないんじやない？」

そう言つて立ち上るのは、他でもない、操司であつた。

「な、お前、縫い付けたはずだぞ！」

「ああ、この糸のこと？」

「そう言つて操司は糸を男達に見せる。
「いやー、抜くときに痛みがなくてよかつたよ。痛いのは嫌いだからね」

「おい小僧」

「ん、なに？ 僕には甘野操司っていう名前があるからさ、甘ちゃん、とか、操ちゃん、と
かって呼んで欲しいな」

「あの壁は小僧の仕業か？」

そう言つてリーダー格の男は顎で柔らかい壁を示す。

「もう、甘ちゃんか操ちゃんって呼んでつて言つてるじやん」

「答えろ」

「はあー、せつかちは損だよ。いつ血管切れちやうかわかんないからさ。プツチンプ
リン並みにいっちゃうかもよ」

「答えろ」

操司は観念して、真面目な顔になる。

「僕以外に誰もいるはずないだろ。馬鹿かあんたらは」

「おまえら、撃て」

男の合図で一斉に銃が撃たれる。と同時に操司の前には柔い壁が幾つもそびえ立ち、すべてそれに防がれる。

「おお、怖い怖い。さて、次はこっちの番だね」

そう言つた途端、男達の足元から男らを捕まえるようにコンクリートが纏わりつく。

「なつ！」

「おい、てめえ！」

「くそ、動けねえ！」

5人は瞬く間に顔以外を固められてしまつた。

「ふふふ、5人とも、蛹みたいだよ」

「コンクリートを操れる個性か」

「残念、少し違います。まあ、何だろうとあとおじさん達は警察のお繩につくんだから関係ないよね」

悔しそうな顔をする5人に操司はネタ明かしをする。

「僕は触つたものを操れるんだよね。だからコンクリだけじやなくて、ほら」

そう言つて操司はポケットに入っているグミの袋をふわふわさせる。
さらに操司は続ける。

「さて、今の気分はどう？おじさんたち。思いも寄らなかつたでしよう。ヒーローならまだしも人質に、しかも縛り上げたやつに今度は縛り上げられるなんて。まあ、おじさんたちに最も足りなかつたのは、その知力かな？あとは刑務所内でゆつくり反省会でもしておいてよ」

5人は黙つて操司の話を聞いている。
しかし、その内の1人だけ、リーダー格の男だけが雰囲気が違う。操司がその男に目を向けると

「…………ふつ、ふふふつ、ふはははつ、はははははははははははははははははははは!!!!」

急にリーダー格の男が笑い出す。操司が厳しい目線を向けると

「ふふふ」

「くっくっくっ」

と他の男たちもつられて笑い始めた

「……なに、おじさん達。狂つた？」

操司は5人を睨みつけ、いつ何があつてもいいように警戒する。暫くするとリーダー格の男が話し始めた。

「はあ、はあ、はあ。いやすまん。おまえが勝ち誇つてゐるのを見て無性に壊してやりたくなつた」

「は？」

男はまだ嫌な笑みを浮かべ続ける。

「お前はまだ俺の個性を知らない。それがお前の敗因だ」

途端、男を拘束していたコンクリートが崩れ始める。

!!!!

焦つた操司は再び男を捉えようとする。纏わりつこうとしたその途端にその壁は崩れる。何度も、何度も繰り返すが全て無駄だつた。

「…何だよおじさん、その個性。どんなチート？」

「いや、チートでも何でもない。確か操司だつたよな。俺も自己紹介をしよう」

(なんだ、急に)

不審に思い目の前にいる男への警戒を怠らない操司に男は名乗る。

「俺の名は切屑崩土だ。個性は【崩し】目で見た無機物を。パラパラと崩し去ることのできる個性だ」

「なるほど、そりや僕が君と相性良くないわけだ」

そう言いつつもう一度拘束を試みるが、今度は軽々と避けられる。

「その時点でお前には勝機はない。あともうひとつ。お前は死刑確定な」「？そんなに簡単にあんたらから殺されるつもりはな『グサリ』：は？」

突如腹に何か冷たいものを感じる。操司が下を見ると、腹にはナイフの刃だけが見えていた。

「よくやつた。照久」

「皆さんが捕まつたときは少々焦りましたけどね」

背後にはナイフを何本も持つた少年が。そう、先程操司の左側にいた少年。先程までぐずっていたはずの少年が、先程とは違う、しかし妖艶にも見える顔つきで操司を刺し

たナイフと同じものを持つていた。

「グッ、はあ、はあ。

てる、ひさ…くん?

なにしてんだよ。怒るよ?」

「ん? 理解力ないねゴミ野郎。何してても何もこういうことだ、よつ」

ヒュツと投げた2本のナイフは今度は操司の右肩と左太ももに突き刺さる。操司は何とか立っているが、それこそ立っているのでやつとだ。

そこに崩土が話しかける。

「おまえの個性、一見万能そうだが、集中しないと使えないな。俺への攻撃中に黙り続けてたのがいい証拠だ。それに、ポケットにグミがあるんなら、糖分が原動力つてところか。後半は拘束のスピードが落ちていたことからも何らかの制限が来たことは明らかだな。

「残念だつたな。いい個性ではあるがお前自身の経験が足りない」

崩土が話している間もナイフは止まらない。1本、また1本と確実に操司の身体に突き刺さる。

刺さったナイフが10本に及ぶと、崩土はナイフ投げをやめさせる。

崩土はニヤリと嫌な笑みを浮かべつつ満身創痍の操司の側に立つて囁くように続け

る。

「どうだ。思いも寄らなかつただろう。一度捕まえたはずの男とおまえの隣にいた少年に殺されることになるなんてな。なあ、お前に最も足りなかつたものを教えてやろう。それは知力だ。あとは天国でゆつくり反省してくれ」

「切屑……！」

操司の、崩土に向けて必死に放つた拳を軽々と避け、操司と距離をとつた崩土は照久に命令する。

「照久、やれ」

崩土が言い終わると同時に照久は総勢20本とも思えるナイフを同時に投げつける。
(にげ、なきや。

でも、からだ、が、
うご、か、ない)

そのまま操司の身体は総勢30本のナイフを受け入れることに

ヒュウツ

カラカラカラカラカラアン

「操司くん、助けに来たよ」

「ちよつとばかし俺らの思つてた様子と違うけどな」

ならなかつた。突如操司の目の前に突風が吹きつけ、ナイフは全て吹き飛ばされる。

操司が風の吹いてきた左側を見ると、そこには操司のことを誰よりもよく知る2人が。

その姿は操司にはとても眩く、暖かくて、

「もう大丈夫だ。後は俺らに」

「後は私達に」

『任せろ（て）＝？』

思わず視界がぼやけてしまつた。

「お前ら3人とも、死刑確定な」

今、悪と正義が対峙する。

運命の時まで、残り3分

第8話

時はほんの2、3分前まで遡る。優姫と瑛九郎が作戦を練つていると、目の前に四つ折りにされた紙が落ちてきた。いや、降りてきた、と言つたほうが正しいだろう。それほどその紙の動きには指向性があつた。その紙を手に取つた2人が中を見ると、其処には

『僕は大丈夫。中は任せて2人はヒーローを呼んで』

と書かれていた。

「操司の字だな」

「操司君のばか。これ見たら助けに行かないと思が済まないじやん」

「ああ、全くだ」

2人は顔を見合わせ作戦を即座に決めた。

「裏口から一点突破。速やかに敵の捕獲。異論は？」

「俺にはない」

「なら行こうか」

そうして2人は裏口に向かつて走り出したのであつた。

* * * * *

そうして場所は銀行ホール内に至る。

「2人とも、ハア、あの、リーダー格の、男の個性は【崩し】見た無機物を、崩す個性、らしい、から、ハア、ハア、気をつけて」

息も絶え絶えに敵の情報を見る操司。

瑠九郎はそんな操司を一瞥し、すぐに敵の方を向く。

優姫は操司に話しかける。

「操司君。2つ目の指示通りイングニウムには連絡したからあと2、3分で来る。ただ、1つ目の指示には逆らったよ」

「……」

操司は死にたくなかつた。しかし、それよりも操司は2人に死んでほしくなかつた。2人と両親だけは命に代えても守りたかった。その思いがあの一枚の紙に詰め込まれていたのであろう。

そして2人はそれを読み取つた。それは、2人が操司の友達だから。親友であるから。操司が2人のことを大切に思つているのと同様に、2人も操司のことを大切にしていたのである。その事が2人を動かしたと言えよう。

操司は心配そうな表情で2人を見つめている。優姫はそのことに気づき、ふふふ、と笑いつつ操司にそつと語りかける。

「……大丈夫。私たちは何があつても死なないから。だからさ、操司君も生きててね。応急処置とか出来ないから助けを待つしかないけど、きっと助かるから、ね」

操司は優姫の説得に軽く頷き、力が抜けたのか、その場にぽてんと座り込んだ。

さて、と優姫の方を向き直す。

「今あいつらは何してる?」

「男が他の奴を解放してるとこだ」

崩土は操司に捕まっていた4人の拘束を崩して解いていた。また、照久の方も立ち上がり、5人と合流する。6 v s 2。しかも、戦闘を経験している6人と中学生2人。傍から見れば勝ち目はなかつた。

「さて、よくも邪魔してくれたね、お二人さん。君らも死ぬ氣かい?」

崩土の問いに琰九郎が答える。

「生憎勝てない戦いは挑まないもんでな。死ぬ気も傍観する気もないさ。しかも見る限り誰も死んでないのに君らもつておかしくないか?」

「…ガキが!」

「え、そつちにもガキはあるじやない?」

優姫は単純な疑問を口にする。崩土はその疑問に答えることなく、話を進めた。

「ふん。まあ、君らを殺した後にあいつも殺すつもりでいるから、精々頑張つてくれ給え」

「私無視されるの?..?」

と、ここで敵の雰囲気が変わる。何かするつもりのようだ。2人が横並びになつて構

えていると、

「土田、やれ」

2人の間に巨大な壁が生まれた。優姫の方には、先ほど壁を作った土田と呼ばれていた男、腕が8本の男、そして、長い針を持った男の3人が、一方で瑛九郎の方には、崩土、照久、巨漢の男が構えていた。

戦いの火蓋は切つて落とされる。

* * * * *

瑛九郎の方では、いきなり巨漢の男が攻めてきた。

(思つてたより速いな。でも、まだ遅い)

瑛九郎は男の攻撃を軽々とかわしながら、崩土に話しかける。

「そつちは来ないのか?」

「生憎俺らは遠距離攻撃が得意なもんでな。苦手な所にわざわざ飛び込む必要はない」

「あつそ」

「てめえ、俺が相手だろうがよ!!?」

そう叫んだ巨漢の男は左拳の大振りで瑛九郎に攻撃を当てようとする。

「甘い」

攻撃を軽々と避けた瑛九郎はその手を掴み、相手の懷へと潜り込む。「良いか、攻撃つてのはこうするんだ!!?」

瑛九郎が相手の襟と左手を掴みそのまま背負い投げをしようとする。と、そこで瑛九郎の右足下の地面が崩れる。

「なつ」

瑛九郎は踏ん張れず、相手から手を離してしまった。また距離をとる2人。

「そうか、そつちはそんな戦い方をするのか」

瑛九郎は大体要領を得てきた。恐らく直接戦闘は巨漢の男一人だけ。操司に刺さつていたナイフと同じものが子供の手元にあるところを見ると、子供はナイフ投げで応戦。リーダー格の男は目で見たものを崩すため、瑛九郎の隙を突こうとするようだ。

(個性、使うか。疲れるんだよな)

そう思いつつ瑛九郎は男たちと向かい合う。

「異部器、やれ」

「イエッサー」

異部器（いぶき）と呼ばれた巨漢の男が再び攻めてくる。

「動きが単調すぎるんだよ」

再び相手の懷へと入ろうとすると、

「お前もな」

足元を崩される。

「おわっ」

異部器が左手を振りかざす。今度は仕留めた、と異部器が思つたその時、

瑠九郎の姿が消えた。

「は?」

異部器の拳は宙を切つた。

「こつちだ」

瑠九郎の声は崩土と照久の後ろから聞こえる。と同時に2人は襟首を掴まれる。

「なつり?」

2人は驚きのあまり動きが鈍る。

「ほらよ」

瑠九郎は2人の頭を思いつきり衝突させ、異部器の方に思いつきり投げつける。異部

器がそれに気付き2人を受け止めようとする。

「今度はこつちだ」

瑛九郎の声は先程までいた筈の場所からは聞こえず、今度は異部器の後ろから聞こえる。

瑛九郎はそのまま異部器を前に蹴り飛ばし、3人をぶつける。

倒れる3人を前に、瑛九郎は警戒を続ける。

「お前ら、師匠に比べりや死ぬほど遅い」

突然だが皆さんは鴉天狗（からすてんぐ）をご存知だろうか。

天狗といえば鼻が高く顔の赤いものを想像する人は多いとは思うが、あれは近世以降に急激に流布したものであり、もともとは鴉天狗が正しい姿だとされている。

鴉天狗とは鴉の嘴をしており、自在に飛翔することが可能だとされる伝説上の生き物である。剣術に秀でており、牛若丸に剣術を教えたのは鴉天狗とともにされている。ま

た、鴉天狗には神通力が使える、とも言われている。

神通力として知られているのは、仏道における六神通。天狗達は元々僧侶だったもの達だと言われていて、神通力とは六神通のことを指すと思われる。

一つ目は神足通。自分の行きたいところに、自由自在に出現する能力だ。

二つ目は天眼通。未来を予知する能力だ。

三つ目は天耳通。なんでも聞いてしまう能力だ。

四つ目は他心通。他人の心の中を察知する能力だ。

五つ目は宿命通。自分や他人の過去の世について知る能力だ。

六つ目は漏尽通。真理を悟る能力だ。

琰九郎の個性は【鴉天狗】異形型かと思われるが、実は発動型の個性である。鴉天狗の出来ることは大体全て出来る、とされてはいるが、実際にはまだ神足通と天眼通しか十分に扱えておらず、剣術も他よりは多少出来るレベルである。

今回は天眼通で崩土がどう動いているのかを先読みし、神足通で崩土達の背後に回り込む。2人を投げ飛ばしたらすぐに天眼通で異部器の動きを読み、神足通で異部器の背後に移り蹴り飛ばした、という動きであった。

一瞬チートかと思われる個性であるが、弱点はある。まず、扱うにはまだ瑛九郎自身の力が足りないため、連續で使えるのは最長で47秒程度だ。同様の理由で、瑛九郎には神足通と天眼通しか使えない。また、発動型の個性であり、使用しすぎるとその後個性が発動しなくなる期間が、オーバー時間1秒ごとに1ヶ月ずつ増えていく。極め付けは、神通力の残り4つだ。瑛九郎はこれらを発動させることができたが、一旦発動してしまうと自分の力で止めることができず、暴走してしまう。暴走状態の瑛九郎を止められるのはオールマイトか瑛九郎の師匠のみであろう。使い方を誤れば危険な個性なのだ。

「くそ、てめえの個性はなんだ。瞬間移動か」

崩土が先に立ち上がる。

「へえ、回復速いな。結構強くやつたと思うんだけどな」

実際やられていた照久の方は立ち上がれないようであることからも、瑛九郎は手加減しなかつたようだ。

「黙れ。てめえは殺す」

そう言つて崩土は遅れて立ち上がり、異部器に命令を下す。

「異部器！お前、あつちのやつらを連れてこい。あつちの女は武闘家ではなさそうだからすぐに終わつただろう。こいつを6人で殺すぞ」

「イ、イエッサ！」

2人の会話を聞いていた瑠九郎は

「…ふつ、はははははは」

噴き出すように笑い始めた。機嫌の悪い崩土は不愉快そうに叫ぶ。

「何がおかしい！」

「はははは。はあ、はあ、いや、すまん。ついおかしくてな」

崩土は不愉快そうに睨み続けると、

「ドオン」

急に隣の壁に穴が開き、砂埃が立ち込める。と、ここで瑛九郎が続ける。

「だつてよ。俺よりあいつの方が何倍も強いし、えげつないぞ」

すると、血塗れの土田と針を持った男が転がるように勢いよく飛んでくる。そして砂埃の晴れた先にはボロボロになつた腕が8本の男の顔を左手で掴む優姫の姿があつた。

「バカな、小娘1人に……」

崩土の啞然とした咳きを聞いていたのかいなかつたのか、優姫は崩土の方に顔を向け、ニヤリと笑いつつこう続ける。

運命の時まで残り1分を切る。

「ねえ、知ってる？恋する乙女って誰よりも強いのよ」

第9話

敵のうちの1人、土田の個性によつて瑛九郎と分けられてしまつた優姫は考えていた。

(恐らく操司君をあそこまで痛めつけたのは子供とリーダー格の男の2人。この3人は別にどうでもいいんだけどな。しかも、異形型の奴もこっち来ちゃつてるし、クロ君こいつ倒すつて意気込んでたのにな)

「なあ、待村。こいつをさつさとやつちまつて切屑さんの所行かないといけないよな」「ああ、すぐ殺るぞ」

2人の会話を聞いて優姫は思わず笑い出す。
腕が8本の男が苛立つて声を荒げる。

「おい！何がおかしい！」

「だつて、その言葉つてすぐやられるフラグじやないかなつて思うとさ…」

「テメエ!!?」

激昂した土田が地面を掴むようにして動かす。

土田の個性は【粘土】触れたものを粘土みたいに動かせる。手を離すと硬度は元に戻る。

「行くぞ、お前ら！」

その言葉を合図に2人は真上に飛び上がる。何をするのだろうと優姫が見ていると、土田は2人に向かつて掴んでいた地面を投げつけた。地面は勢いよくこちら側に迫つてくる。2人は地面に乗り、同じ勢いで近づく。傍から見れば2人の男が津波に乗つて襲いかかっているかのようだつた。

そんな中、

「わーお、こわーい」

と言いつつ、優姫はその土の塊を片手で受け止める。そう、片手で。

「は？」

「おい、行くぞ！」

待村は動搖するが、腕が8本の男は迷わず飛び出してくる。

「死ねえ!!?」

「勇気は認める。けど、それは愚策だね」

ふう、と優姫が息を吹きかけると、その吐息は直様吹雪へと変化する。

「うおつ」

寒さに少し身じろぐ腕が8本の男。その隙を見逃さず優姫は彼の顔を掴む。そして、「よーいしょつと」

それを地面に叩きつける。ドスンと鈍い音がして地面には蜘蛛の巣状のヒビが入った。

「なつ! どんな怪力だよ!!?」

皆さんは雪女に関してどの程度までご存知であろうか。というのも、雪女の伝説は至る所にあり、その1つ1つにおいて、姿や年齢、悪さをする者から良い事をする者まで様々なのだ。呼び名ですら、雪女、雪娘、雪郎、雪降り婆など多様に存在する。

雪女の伝承話の1つとして吹雪の晩に子供（雪ん子）を抱いて立ち、通る人間に子を抱いてくれと頼む話が伝えられる。その子を抱くと、子がどんどん重くなり、人は雪に埋もれて凍死してしまう。また、頼みを断わると、雪の谷に突き落とされるとも伝えられる。次第に増える、雪ん子の重さに耐え抜いた者は怪力を得るともいわれている。そ

のため、雪女はよく怪力であるとされている。

その個性を身に宿している優姫は、鍛えれば鍛えるほど筋力が容易につく。優姫も瑛九郎と同じ師匠に享受しており、その師匠によつて優姫はここまで力を得ることができていた。

「んー、地割れまでいきたいなあ」

まだまだ向上心はあるようであつた。

「よし、捉えた!!?」

と、ここで先ほど臆してしまい動けなかつた男、待村が優姫の腕を壁に縫い付ける。待村の個性は【縫い付け】その名の通り何と何の間でも縫い付けられる。ただし、それには専用の針（もはや短剣ほどの大きさがある）が必要。

「え、動かないな」

左手に男の顔を握りしめ、右手は縫い付けられた優姫。なんとか自由になろうともがく。

「2人で行くぞ！」

男達はそれぞれの武器、短剣のような針と土を固めてできた棍棒で同時に優姫に襲いかかる。が、彼らはその時頭になかった。優姫が怪力である事を

「んじや、えーい」

優姫は土壁に縫い付けられた腕を思いつきり押しこむ。すると、押し込んだところを中心として土壁が壊され、辺りには土埃が盛大に舞う。前が見えない中2人は猛進を続けようとするその時、

優姫が左手に持つていた男を振り回した。

2人はそれに反応できず、男、兼棍棒に打たれる。

思わず衝撃に意識を持つていかれそうになりながらも、2人はそこで肌に何か突き刺さるのを感じた。それは、氷柱であつた。優姫は腕が8本の男の腕それぞれに氷柱を仕込み、それを2人に向かつて振りかぶつたのであつた。

「どんだけ」

そのまま2人は隣の崩土たちが戦つているところに吹き飛ばされたのであつた。

* * * * *

「優姫、それは流石にやりすぎじゃ」

「ん?なんか言つた? 琥九郎君」

「……いや、なんでもない」

琥九郎は優姫の笑顔の圧力に屈してしまつた。

「うん。んじや、早くあいつらを血祭にあげよ……捕らえようか」

「優姫!?!?」

恋する乙女は時には残酷にもなり得た。

「……ええ」

急に俯いてぶつぶつと呟きだす崩土。2人は少々緩めていた気持ちを引き締め、崩土の動きに集中する。今まともに動けるのは異部器と崩土のみ。その他は気絶ないしは重傷を負い動ける状況ではない。

「（俺が巨漢の男をやるからお前はリーダー格の男を頼む）」

「（わかった）」

小声で2人が合図をとつた直後。

「調子に乗つてんじやねえ!!!!」

崩土がすごい勢いで迫ってきた。

「きたぞ！」

「分かつてる」

優姫が前に出て崩土の両手を抑える。崩土が優姫の腹を蹴りあげようとするが、優姫は脚で蹴りをいなす。崩土の背後から異部器が迫つてくるが、優姫がふうつと息を吐くと2人の間に氷の壁ができる。優姫がちらりと氷の向こう側を見ると、瑛九郎が神足通で異部器の背後に回り込み、そのまま異部器のことを下腹部から蹴り上げているのが見

えた。

「くそつ、くそがあ」

「あなた、くそしか言えないの？もうちよつとボキヤブラリー増やそうよ」

「黙れ！」

そう言つて崩土は優姫に頭突きを仕掛けたため、優姫は崩土の手を離して後ろに避けた。2人は睨み合う。

* * * * *

瑛九郎の蹴り上げは異部器には全く効いていなかつた。

「きかねえよ！お前の蹴りなんてな！」

豪快に笑う異部器に対し、瑛九郎はさして動搖していない。

「(やはりな)」

そう思いつつまた瑛九郎は攻めていく。胸部、左脛、右臀部、右前腕……数秒の間にあらゆる場所を殴り、蹴り、掴んでいた。

「ははは、効くはずないだろ！さつきは油断したがもう油断はしない！」

そう言つて振り下ろされた拳を避け、瑛九郎は距離をとる。瑛九郎は異部器に聞く。

「なあ、お前。本当に俺の攻撃は効かないんだな？」

「ああ、効くはずないだろ！」

「なら、言つておこう。次の攻撃でお前はうずくまる」

そう言つて瑛九郎は駆け出す。狙つたのは右腋窩。つまり、脇の下だ。

「なつ、」

異部器は明らかに動搖するが瑛九郎は止まらない。指を一点に集中させ、相手の攻撃をかいくぐり、正確に当てた。

「ぐお」

男は思わず衝撃にうずくまつた。

「お前の個性、名前はよく分からんが、顔から内臓から何から何まで場所が普通のところはないだけだ。あとはそれをわかりにくくするために脂肪で隠してるだけだ。なら、それを探ればいい。あいにく、俺には眼があるんでな」

異部器の個性は「部位転換」である。大まかには瑛九郎の言つた通りであるが、違ひは1つだけ。異部器はその時その時で内臓などの場所を変えられる。その動きを隠すために太つている、という意味もあつた。しかし、相手は瑛九郎である。天眼通の力の前では効果はなかつた。

(くつ、少し使いすぎたか？まだ制限時間は過ぎてないはずだが)

瑠九郎がそう思案していると、

ドオン

背後から大きな音が聞こえた。瑠九郎が背後を見ると、そこには……

* * * * *

崩土と優姫の方は、まだ決着がついていなかつた。

2人がにらみ合っている最中、崩土がふと思いついたように優姫に話しかける。

「なあ、お前。さつき、恋するとかなんとか言つてたよな。

その相手つてあのガキか？」

「だつたら何？」

優姫の不愉快そうな顔を見て崩土はニヤリと笑いつつ、仰々しく続ける。

「はあ、もう俺らの今日の計画は失敗だよ。金は手に入らない。ガキどもに俺の部下達がやられる。そのガキどもは未だ一人たりとも殺せていない。ああ、今日はなんて最悪な日だ！」

訝しげに優姫は崩土を無言で睨んでいる。崩土は続ける。

「もうそろそろヒーローも来ちまうんだろうなあ。あの屑どももな」

「だから、あんたらは終わりだつて」

「なら、せめてあのガキだけでも殺そう」

そう言つて崩土は個性を使う。そう、操司の真上の天井を。

「なっ！」

優姫が駆けつけようと一步を踏み出すと、その床も途端に崩れ去る。それに躊躇優姫は地面に顔をつく。

瑠九郎はまだ異部器と戦つており、操司の危機に気づいていない。

「操司君！」

優姫が操司の方に顔を向けると、操司も顔を優姫の方に向いている。彼は、笑顔だった。死ぬ間際であるというのに。

と、そこで、操司の真上の瓦礫が操司を呑み込んだ。瑠九郎は優姫達の方に振り向き、操司のいた筈のところに瓦礫が固まっているところを見て呆然とする。

「一人目、死刑完了」

「い、いやあああああああああ!!」

「なつ……」

運命の時は訪れる。

第10話

操司の個性は【物質操作】手で触れたものを操ることができるのである。操る物の重量や複雑さに応じて糖分を必要とし、足りなくなると激しい頭痛に襲われる。

ここまで医師と和真によつて伝えられたことだつた。しかし、操司は常にある疑問を抱いていた。それは、

「いつたいどういう仕組みで思い通りに物体を動かしているのだろうか」ということだ。

我々は物を動かす際、必ずエネルギーを消費する。例えば何か物をを転がす際、我々は力をエネルギーに変換する。力によるエネルギーは運動エネルギーへと変換され、摩擦力がない限りはそのエネルギーが保存され物体は動き続ける。例えば、電池というのは化学反応によつて化学的エネルギーを電気エネルギーに変換させる。例えば、お湯を沸かしたいと我々が思う時、空氣の燃焼という化学反応で化学エネルギーを熱エネルギーに変換する。

このように、全ての人為的行為はエネルギーというものを介する必要がある。これは自然界における大原則のひとつである。

しかし、操司の個性にはエネルギーを変換させる等ということは起こっていない。いや、起こり得ない。我々の目に見える事象が起こるだけのエネルギーが自然に発生するなどということはあり得ないからだ。もしそのようなことがあるならば、我々は日常のふとした時に身体が燃えることだつてあるだろう。

操司の個性はそんな自然の大原則を無視したものなのだろうか。

答えは"否"である。

ならば、操司の個性、つまり、物体操作を行うにはどのような仕組みが起こっているのか。

それには操司の、いや、天野総司の研究内容が深く関わる。

天野の研究で発見されたもの。それは『並行世界』ともう一つ、

『アマノオトムラ指数』（以降、AOと略記する）

である。この新物質を利用することで天野は『並行世界』へと故意的に干渉し、現在を操作することが可能となっていた。さらに言えば、天野が操司となっているのはこのAOの操作を誤つたことが原因である。

さて、察しのいい方であればもう気づいたであろう。

操司はこのAOを自由に操作できる。それこそが操司の本来の個性なのであった。

その物に触る、という条件を用いることでそのAO含有率を上げ、干渉の起こりやすい状態にする。そして、その物質に含まれるAOを操作することでどの世界とどのくらい干渉させるかを調整し、傍から見ればあたかも物質が勝手に動いているように見えたのである。

操司がこのことに気づいたのは、優姫と瑛九郎が敵と戦っている最中。自分に刺さつているナイフをどうにかできないかと思い、触つてみると、急にナイフがきえ、あたかも元から刺さつていなかつたかのように傷口が消滅した。操司はこのことを分析する。そして今までの行動と照らし合わせる。その結果以上の結論にまで行き着いたのであつた。

(だとすれば、このナイフは全部抜けるし、傷も残らない!)

操司がナイフを取り除こうとすると、

「操司君!!?」

頭上から瓦礫が落ちてきた。

操司の真上に。ピンポイントで起きた天井の崩壊が終わる。
聞こえる音はパラパラと小石や砂が転がる音、そして優姫の嗚咽の混じった啜り泣き
のみであつた。

目の前で人が死ぬ。しかも赤の他人ではなく、自身にとつて大切な人が。

優姫、そして瑛九郎にとつて初めて初めての体験であつた。受け入れがたい事実を突きつけ
られ呆然とする瑛九郎。彼の背後にはまだ異部器が立ちはだかっている。

「てめえらも、終わりだ！」

襲いかかる異部器に対応できず、腹這いの状態に倒される瑛九郎。

「くそつ、こんな時に」

早く抜け出し操司を助けに行こうともがくが抜け出せる気配はない。

「なあ、俺の個性はだいたいわかつてんだろ。お前の言つてたことはあつてるよ。ただ

な、1つだけお前がまだわかつてないことがある。それはな、俺は自身の体内のものの配置を自由に変えられるんだよ。だから、こうやつてお前のことを潰すために一点に集中させることだつて、な！」

途端に重さを増す異部器に対し瑛九郎は苦しそうにもがく。

それにハツと気づいた優姫は

「クロ君!!?」

助けに行こうとするが

「お前の相手は俺だ！」

崩土に隙を突かれ押さえつけられる。

「離して！」

「そう言われて離す馬鹿はいねえよ。

お前は仲間が殺されるところを見てろよ。あと少しであいつの内臓はペツちゃんこだ

離れようとする優姫を完全に抑え込む崩土。実戦ではまだ崩土の方が上手であり、優姫に勝ち目はない。

「よし、潰せ、異部器」

「イエッサー」

思わず瑛九郎から目を背け、ぎゅっと目を瞑る優姫。
「（クロ君、操司君。死なないで！）」

ドオン

「ぐわああ！」

異部器が吹き飛ばされる。

「ぼくは死なないよ。優姫との約束は守らないとね」

操司が無傷で塙九郎の側に佇んでいた。

この場の誰もが啞然とする中、操司は言葉を発する。

「あれ、みんな僕が死んだこと前提にしてた?」

何とも締まらない男、それが操司であつた。

「操司君!!?」

「おまえ、生きてたのか!!?」

「うん、何とかね」

操司は琰九郎の顔を見て無事なことを確認し、今度は崩土の方に向き直す。

「いやあ、ひどいなあ切屑さん。あんなことされたら僕死んじゃうじやん」

へらへらと笑う操司に対し、対照的に崩土は怒りと悔しさで顔が歪んでいた。

「お前、どうやつて……」

「んー、教えてもいいけど、理解できないと思うからやめておく。それより、優姫を離してくれるかな」

操司の言葉と同時に

ボン

と音がして、崩土は腹部に強い衝撃を感じる。

「（意識が……飛びそうだ……）」

そのまま崩土は数m飛ばされる。

今操司がAOを与えたのは、空氣にある。もともとあつた筈の空氣を並行世界と干渉させることで崩土の腹部の周りに集める。操作をやめれば、過密化した空気が一気に散乱し、崩土の腹部を襲つたのであつた。

自由になつた優姫と琰九郎は操司の側へと駆け寄る。

「操司君!!?」

いや、優姫は駆け寄るでは済まなかつた。操司の元へ抱きつく。

操司は優姫の行動に驚きよろけるが何とか踏みどまり倒れるのを避けた。

「良かつた…生きてる操司君だ…」

「…………なあ、優姫、その辺にしどけ。操司の顔が卓球のラケットみたいになつてる」

操司は顔を真つ赤にしたままピクリとも動かない。髪の毛が黒い分益々色の差が激しく見えていた。

「あ、ごめん」

「…………はつ、いや、大丈夫だよ。心配かけてごめんね。結構早く来れるよう頑張つたんだけど」

「……どういうことだ?」

操司は瓦礫に衝突する直前、自分自身のAOを高めていた。そして並行世界とこ干渉により瞬時に瓦礫の真上に移動していた。本来であれば。しかし、まだ操司は自身の個性の秘密に気づいたばかり。また、一刻を争う場面だつたのもあり、誤つてAOを余計に高めすぎていた。その結果、過干渉が起こり、思い通りに移動ことができなかつたのであつた。

「まあ、詳しいことは後で。まずは、あいつを捕まえよう」

そう言つて操司達が崩土の方を向くと、崩土は照久の側に立つていた。入り口側は操

司達のほう。崩土が逃げるにはどうしても戦わなければいけなかつた。

「（くそつ、ガキ共め）」

心の中で崩土が悪態をついていると、

「大丈夫か、君たち!!?」

インゲニウムがサイドキックを5、6人ほど連れて現れた。
「あ、インゲニウム」

「こつちは平氣です。後はあいつを捕まえるだけです！」

「分かつた！後は私たちに任せて君たちは安全なところへ！」

ふと操司が崩土の方を見ると、崩土の眼の色が明らかに先ほどとは違っていた。

「…………イングニウム。ヒーロー。社会のゴミ、いや、社会を食い潰す病原菌どもめ!!
?」

崩土の髪が逆立つ。怒りが現実に現れているかのようだつた。
操司はそれを見て鳥肌が立つ。

「(なんか、やばい!) みんな、何かくるよ!」

操司の言葉と共に天井が、いや、建物が吹き抜けになるかのように屋根までが崩れ去
る。

「伏せろ!」

その言葉と同時にイングニウムが、そしてイングニウムのサイドキック達が人質と操
司達をかばう。

ドドドドドドドドドドドドドドドド

土埃が舞い、前が全く見えない。

「そつちはどうだ！」

「無事に保護しました！」

間一髪市民の安全は守られたが、敵の様子は分からぬ。

「次に遭つたら殺すからな、インゲニウム、そして、ガキども!!？」

瓦礫の崩壊によつてかき消されたその言葉は瑛九郎のみに聞こえた。

煙が晴れると、元々崩土がいた筈の場所の奥に穴が開いており、崩土と照久の姿だけが見えなかつた。

崩土達ヴィラン盗団による保須市銀行襲撃事件は、ヴィラン盗団の構成員4名を捕ら

えるだけに留まつた。

第11話

「君たちは一体何をやつてているんだ！」

インゲニウムの声が響き渡る。

崩土達が逃走した後、3人はインゲニウムに呼ばれ、現在に至るまでの経緯をすべて話していた。話し終えるとインゲニウムは（フルフェイスのためよく分からないが）怒気を含ませながら3人をその場に座らせた。そして現在に至る。

「公共での個性の無断使用は法律に反する。どんな理由があろうとも君たちは法律を破つてしまつたんだ。厳正な処分が下されてもおかしくないんだぞ！」

実際には、インゲニウムの元に氷を操るサイドキックと筋力増強系の個性を持つサイドキックがいたため、すべてをインゲニウム達の行動として3人の行為をなかつたことにした。

「しかも相手は敵。一歩間違えれば君たちも死ぬところだつたんだ。その事を君らは分かつてゐるのかいり？」

『……すいません』

「…………まあ、君らのやつたことは決して褒められたことではない。ただ、その行動力はヒーローになるためには必要だよ。これからも頑張ってね」「はい！ありがとうございます！」

インゲニウムからの説教が終わり、その場を去ろうとする3人に、インゲニウムはふと思いついたように呼び止める。

「あ、そういうえば君たちつて私立聰明中学校の一年生だよね」「はい、そうですが」

「ならさ、1つお願ひがあるんだけどいいかな？」

3人と向き合つたインゲニウムは先ほどとは違う柔軟な雰囲気で話しかける。フルフェイスでも感情を読み取れるあたり、流石はヒーローだと思う。

「実はね、俺の弟が君らと同じ学年でヒーロー志望なんだ。飯田天哉っていうんだけど、知つてるかな？」

3人は首を縦にふる。というのも、飯田天哉は3人とはまた違つた意味でよく知られていた。話と共に手がせわしなく動く、ロボットみたいな男だという噂がある。成績も一桁に名を連ねるほどであつたので、名は聞いたことがあつたのだつた。

「あいつはさ、すごく真面目ですごく熱血なんだ。ただ、考えがぶれない分変な事をやらかすこともあると思う。だから、もし変な事をあいつがしているのを見かけたら、止め

てやつてくれないか?」

インゲニウムの話を操司達は黙つて聞いていた。

(インゲニウムつて弟思いなんだな。やっぱいい人だ、この人)

そう思いつつ操司は答える。

「大丈夫です。インゲニウムの弟さんだつたら絶対変なことなんてしないと思います
し、いざとなれば僕たちもお手伝いをします。僕らは同級生ですから」

操司の言葉に続いて2人も頷く。その姿を見てインゲニウムはホツとしたようだ。

「ああ、ありがとう。宜しく頼む」

『はい!』

こうして3人とインゲニウムの邂逅は終わつた。

「さて、帰ろつか。遅くなつちやつたしね」

操司の言葉に反応した瑛九郎は時計を見てハツと気づく。

「あつ!……

なあ、優姫。今日は師匠との鍛錬の日だつたよな」

「あつ……」

途端、2人が目に見えて落ち込んでいた。操司は状況を把握できず尋ねる。

「どうしたの？なんか予約してたことあつた？」

「やばいよ、クロ君！どうしよう！」

「これは殺されるな……

ばつくれるか」

「え、私だけ置いてかないでよ！死なば諸共つて言葉知らないの？？」

「俺はまだ死にたくないんだ！」

操司の言葉があたかも聞こえないかのようにふたりはあせっていた。いや、実際聞こえていなかつたのかもしれない。

「だから、2人とも！師匠つて誰！」

ハツと氣付いた2人が操司に答える。

「…俺たちの個性や戦闘の指導をしてくれてる人なんだが、端的に言えば…」

「理不尽の塊」

本来ならば操司がツッコミに回るところだが、2人の深刻な表情に操司はそんな気も起こらない。

「理不尽の塊？」

「ああ、そうだ。問答無用で投げ飛ばされるし、殴られるし、蹴られる」

「しかも本人は愛の鞭とかいて力を緩める気ないし。本当ゴリラみたいな人」

「ほーう、誰がゴリラだつて?」

「だから私たちの師匠がに決まつてるじや……」

背後から聞こえた声に優姫が答えるが途中で違和感に気付く。ちらりと瑛九郎を見ると彼は真っ青な顔でこちらを見ていた。ギギギ、と音が聞こえそんなほどに鈍い動きで後ろを振り返ると、そこには

「へえ、ゴリラ、ねえ。タチが悪い、ねえ。理不尽の塊、ねえ。」

身長170cmない程度の女性が背中に般若でもいるかのようなオーラを撒き散らしつつ笑顔でそびえていた。

「よう、2人とも。あたしのレッスンさぼるたあ死ぬ覚悟は出来てるんだろうなあ」
『すいませーん!』

「今日は帰つたら鍛錬いつもの5倍な」

「師匠!俺らは事件に巻き込まれて「問答無用!」つはい!すいません!」

「そもそもあたしのレッスン受けといてなんでたつた敵団体の1つや2つ瞬殺できねえんだよ!戦闘は5秒以内に終わらせろつていつも言つてんだろ!」

そう叱りつつ師匠と呼ばれる女性は2人の首根っこを掴んでずるずると引きずつて

行つてしまつた。

「へ？ あの人ガ、師匠？」

あまりにも速い展開に操司はついていけず、ただその場で呆然としていた。

* * * * *

「くそつ、あのガキどもめ……」

照久を連れてあの場から離れていた崩土は悪態をつきつつ自身のアジトに戻るべく歩き続けていた。

「照久も気を失つたままじや次の行動にも移れやしない。今日は最悪だよ…… 「なあそこの君」…………あ？」

呼びかけられ振り向くと、そこにはスーツ姿の男が一人で立っていた。

「誰だお前」

「私かい？いや、名乗るほどの者ではないさ」

とは言いつつも、既にもう太陽は沈み、夜は訪れている。この暗闇の中で男が一人立っているのにもかかわらず、何も用がないとは考えにくい。崩土は男を警戒した。

「で、何の用だ」

男が自分を引き留めた理由を探ると、男は優しげに語りかけてくる。

「君は恐らく今日保須市で銀行を襲撃した盗賊団の参謀だね」

「なぜお前がそれを！」

崩土は驚く。

崩土の属する『ヴィラン盗団』は、機密主義を前提として動いている。誰がどう動くかは本人と崩土、それと照久しか知らず、他の者には情報を与えない。そうすることできり立っていた。つまり、情報が漏れることはあり得ないのであつた。

にも関わらずこの男は自分達の行動だけでなく、自分の立場まで全て知っている。崩土による男への警戒度は高まっていた。

「なぜかつて？そんなことはどうでもいいさ。僕が話したいのは君の個性のことだ」

「……失せろ。そもそもば殺すぞ」

崩土による警告を無視し、男は話を続ける。

「君の個性、確か『崩し』と言っていたね。とても強力な個性だ。素晴らしいよ。そこで折り入っては相談なんだが」

崩土が相変わらず警戒している

「(こういった相手を先ず褒めてくるような奴に限つて何か悪巧みをしている。こいつも例には守れないはずだ。何を求めてくる。金か? 協力か? それとも、傘下になれとか?)」

すると、思いもよらない言葉が返ってきた。

「君の個性を弔のために明け渡してくれないか」

「は? 出来るはずないだろ。死ね」

そう言つて崩土は男に飛びかかる。

「そうか、残念だ」

p r r r.

p r r r.

p r r r.

男の携帯が鳴る。

「もしもし、ドクターかい？」

「先生、彼は無事来てくれることになりましたか？」

「いや、残念だけど交渉決裂だ。今ちょうど終わったところさ」

電話の奥でドクターと呼ばれた男は少し残念そうな声を上げる。

「個性はもう奪つた。後は死体だけだが、持つて行くかい？」

「ふむ：彼の精神力に期待していたんですがの。死体は要りません」

「分かった」

男はそう言つて電話を切る。

さてと、と男が帰ろうとすると

「ん、ん！」

照久が起き上がつてきた。

「あれ、ここは銀行じゃ：：って、崩土さん！」

最初は事態を飲み込めていなかつたようだが、崩土の死体を見て顔が蒼ざめる。
男は照久へと話しかける。

「ねえ、君」

ちらりと男の方を向く照久。

「（憎惡の眼。この子は使える）僕と一緒に来ないか？」

悪は繋がり、拡がり、浸透してゆく。

第12話

操司達の日常に平和が戻り、いつの間にか約2年という時が過ぎていった。

2年に入つてのクラス替えで3人は違うクラスになつてしまつたが、三年間一緒に登校し、一緒に帰ることだけは欠かさなかつた（たまに瑛九郎がこつそりと1人で帰ることもあつたが）。また、操司は飯田天哉と同じクラスとなり、そのまま仲良くなつてもいた。1年の頃は瑛九郎が引き受けていた操司のツツコミ役を今度は飯田がやつっているらしい。

そして現在3年生となつた操司達は受験に向けて勉学、鍛錬を重ねている。

なぜこの話になつているのかというと、

「なあ、甘野。お前はいつたい進路をどこにするんだ」「んー、どうしましようねえ」

現在担任との進路相談を（強制的に）受けているからだ。操司は大まかな方向性を担任に教えてはいるが、人生設計を細かくは伝えていない。よつて担任も心配になつたらしい。

彼は今進路を迷つていた。

1つは操司の夢に最も近い『政治家』になるべく勉学のエリート校を受験すること。確かにこれならばすぐに政治家になることは出来る。しかし、これにした場合、果たして将来自身の考える政策を施行出来る立場まで上り詰めることが出来るのであろうか。また、それが出来たとして、ヒーローを否定するような法律に皆が賛同するのだろうか。可能性は低い。

そして、もう1つは、『ヒーロー』になること。先ずはヒーローとして人々からの人気を得る。その後一般市民に対し現在の政治の在り方を説き、支持を得る。その後政治の世界に携わる、といったルートを通る。これには先ず根本として、オールマイトほどの人気を得なければいけないという前提がある。ここを乗り越えられなければ自身の夢には近づくことすら出来ないだろう。

どちらにもメリット・デメリットがあるため、操司は悩んでいたのだった。ちなみにこのことを話したら優姫からはヒーローになることを勧められ、瑠九郎からは政治家になることを勧められた。

「……よし、決めました」

操司の言葉に先生の顔がパツと明るくなる。

「おお、どうする」

「はい、僕は雄英高校ヒーロー科に行きます」

「政治は良いのか？」

「はい。ヒーローになるという子供の頃の夢を叶えようと思います」

「…よし、よく言つた！頑張れよ、先生も応援してるからなー!!?」

「ありがとうございます。では、失礼します」

そう言つて操司は教室を出た。

「…はあ、よくも子供の頃の夢とかぬけぬけと言えたな」

ドアの外には瑛九郎と優姫、そして飯田の3人が立っていた。

「ははは、ばれた？」

「バレバレだよ。操司くん、嘘つく時声のトーン少し変わるじゃん」

「え、まじか。直さないとな」

3人のさらつと言つた会話に飯田が驚愕する。

「なつ、甘野くんはヒーローになりたいわけではないのか!!?嘘はいけないぞ！甘野く

ん！」

「まあ、嘘では無きにしもあらずつてどこかな？」

「まあ、4人で雄英に入れたらきっと楽しいし。私は嬉しいよ！」
「うら」

すでに操司を除く3人は雄英高校ヒーロー科を志望していたため、残るは操司だけであつたようだ。

そのままの流れで4人で一緒に帰ることとなつた。

優姫が話を切り出す。

「さて、誰か推薦受ける？」

「この中で成績順なら操司だな」

「僕やだ。面接嫌いだし。優姫さんやつたら？」

「私はいいや。雄英の試験楽しそうだからさ。それ受けたい。天哉君は？」

「俺はそこまでの実力を持つてない。それよりも俺は烏丸君がいいと思うのだが」

「俺は操司と同じだ。面接は勘弁だな」

「見た目がヤンキーか敵だもんね」

「操司、お前覚えてろよ」

誰も推薦を受けるつもりはないようだ。

和やかに時間は過ぎていく。
とここで操司が思い立つたかのように話しかける。

「あ、そうだ瑛ちゃん」

「なんだ？」

「あのさ、僕にも師匠のレッスン、受けさせてもらえないかな？」

「……お前、死ぬ気か？」

瑛九郎はこめかみを抑えるような仕草をしつつ返答する。優姫も慌てて止める。

「いや、やめたほうがいいって。死んじやうよ!?!?」

「2人とも、少し僕のことバカにしてない？」

少し操司がふてくされるが、すぐ話を元に戻す。

「あの銀行襲撃の時から今まで僕は一応鍛錬はしてきたんだ。でも、やり方が正しいのかすらわかんない。だから、師匠が欲しいんだよね」

「なら、他の人でも「いや、2人と同じがいい」……」

「2人と同じなら出来る気がする。僕はまだ弱いけど、2人に追いつかない。その為なら何だつてするよ」

操司の言葉を優姫は不安そうな目をしながら聞いていた。黙つて聞いていた瑛九郎が口を開く。

「…わかつた。伝えておく」

「ほんと！やつたー」

操司が喜んでいると

「2人の強さにもやはり秘密があつたのか。なあ2人とも。俺も一緒に鍛錬をさせてはもらえないだろうか」

「天哉君まで？」

「はあ、分かつた。2人とも覚悟しとけよ」

「恩にきる！」

どうやら飯田も共に鍛錬をすることになつたようだ。

「いやあ、楽しみだなあ」

こうして操司の進路を決める日は過ぎていった。

* * * * *

その次の日曜日。飯田と操司の初めての鍛錬の日だつた。

「育田道場、か。」

育田道場と書かれた看板があるその建物は、さながら空手の道場かと思うような外観だつた。しかし、不思議に思うことは、壁のほぼ全てが修繕された後の残つていることだ。

「緊張するなあ」

「甘野君でも緊張することはあるのか」

「そりやああるさ。意外?」

「正直少しだけ」

などと話していると

「あ、操司君に天哉君！」

優姫が外から走つてきた。

「あ、優姫さん。瑛ちゃんは？」

「ん? 今は多分師匠と組手。先ず中入んなよ」

と言つたところで、

ドオン

中から壁を突き抜けて人が飛び出してきた。2人が驚いている中、優姫は「いやー、やつてるねえ」と呆れ笑っていた。

「反応が遅い！お前五回は死んでるぞ！」

「すいません！もう一度行きます！」

「烏丸君!!？」

飛び出してきたのは瑛九郎であつた。

「何だ？クロ。知り合いか？」

中から先ほど怒鳴っていた声の主が現れる。身長は170cmない程度。女性にしては高い方で、黒の長髪をたなびかせながら近づいてくる。操司と飯田は挨拶することにした。

「今日からお世話をになります、甘野操司です！」

「おなじく、飯田天哉です！よろしくお願ひします!!？」

「おう、あたしは育田 天宮（いくた てんこう）だ。先ずは中入つてこい」

育田は快活に笑つた。

一行は中で話をする。

「と言つても、君らの事は2人から聞いている。ヒーロー志望らしいな」「はい」

「ならばある程度急いで基礎は作らないとな。格闘歴は?」

「ありません」

「僕もないです」

その後さまざまなことを聞かれた。個性のこと、体力、知力について、家族について

⋮ etc

やがて、育田による質問が終わる。
「よし、分かった。

んじやあ、先ずここですることについて話しておこう

そう言うと育田は姿勢を整える。

「ここは道場だが、特に流派というのではない。様々な武術を学ぶことで身体を強くする。あとは個性も鍛える」

「個性ですか？」

飯田の問いに育田は即座に頷く。

「ヒーローになるなら個性の制御も必要だろう。主には、甘野は暴走しないよう制御する訓練を、飯田はその個性を実践でどう使うかを学んでもらう。これは死ぬほど辛いから覚悟してください」

育田のニヤリとした笑みに2人はぞつとする。まるで獲物を見つけた蛇のような目つきだった。

「さて、早速始めるか

『よろしくお願ひします!!?』

こうして、雄英高校入学試験に向けて4人は鍛錬を重ねた。

オリキヤラ紹介

これまでに出てきた者の中でこれからも出てきそうなキャラのみの紹介となります。

先ずは主人公たち3人

・甘野 操司（あまの そうじ）

↓以前の世界では「天野総司」という名で物理学の研究をしていたが、実験の不備によりヒロアカの世界に飛ばされる。他人に対しても基本丁寧だが、仲良くなると遠慮がなくなる。自分にイマイチ自信を持っていない。優姫と付き合っている。

個性は【強制干渉】並行世界を今いる世界に強制干渉させることでこの世のあらゆる事象を変化できる。実際に操っているのはアマノオトムラ指数のみ。操作には糖分を必要とし、足りなくなると激しい頭痛に襲われる。

・冬野 優姫（ふゆの ゆうき）

↓この物語のヒロイン。ヒーローを目指しており、性格は元気で活発。雄英高校志望。操司と付き合っている。

個性は【雪女】雪ん子と呼ぶ身長3cm程の使い魔を出して使役させたり、吹いた息を吹雪に変えたり、雪を降らせたりできる。また、怪力もある。目標はパンチで地割れを起こすこと。

・鳥丸 琉九郎（からすまる えいくろう）

↓甘野とともに雄英高校ヒーロー科を目指す。一見すると無表情で冷静に見えるが情に厚い。

個性は【鴉天狗】仏道で言われている6神通を使えるが、制御できるのはそのうち2つのみ。また、剣術にも秀でている。現在は空を飛べるよう練習中で、20秒までなら飛べるようになつた。

ここまでが主人公系の方々です。以下、これから出てくる見込みがあり、かつ、今までに出てきたオリキャラ紹介

・甘野 和眞（あまの かずま）

↓操司の父親。ヒーロー事務所の經理、サポートをしている。頭は良く機転もきくので重宝されているらしい。また、若い頃にヒーローを目指しており、その時にこの世のあらゆる武術を修める。

個性は無し。無個性だが、そこらのチンピラよりも何倍も強い。

・甘野 愛衣（あまの あい）

↓操司の母親。おつとりしていて、息子のことを大事に思っている。そのため、若干過保護になりがち。

個性は【愛情】自分の持つ愛情、幸せな気持ちを他人に分けることができる。分ける際は相手の身体の一部分に触れる必要がある。

・育田 天宮（いくた てんこう）

↓琰九郎と優姫の師匠。中学3年からは操司と飯田天哉（マンガ〇rアニメ参照）のことも指導するようになる。性格はサバサバしているが、弟子のことをよく見ていて優しい師匠。ただ、手加減というものを知らず、よく弟子を投げ飛ばしては壁に穴を開けている。個性はまだ明らかになっていないが、チート主人公たち3人を軽くあしらえる程に強い。

(実は甘野和眞と相澤消太の姉弟子という設定もあるが、本編には出てこないと思う)

・源氏 照久（げんしてるひさ）

↓小さい頃に親を殺されるが、その張本人とともにヴィラン盗団をつくり、悪事を働く。現在何処にいて何をしているのかは不明。

ということで、次回こそ、原作に入ると思います。
お楽しみに！

雄英高校序章編

第1話

甘野操司の朝は早い。

4時にセットしていた目覚ましの5分前に起き、アラームが鳴る前に止める。顔を洗いジャージ姿に着替えるといつものランニング20kmコースの走り込みに入る。調子に乗つて40～50km走ることもあるが、そんな時に限つて遅刻をするため、最近は余分に走ることはやめた。ランニングが終わるとシャワーを浴び、すつきりした状態で勉学にうつる。所謂朝学習というやつである。

ここまで流れは中学2年になつてから崩したことがない。操司はこの一連の流れを「流一」と呼んでいる。彼のネーミングセンスは独特なのである。

この日もそうだつた。雄英高校の入学試験日である。優姫と瑛九郎との待ち合わせ場所へと急ぐ。

「操司！」

操司が出発しようとしたところで愛衣が呼びかける。

「ん？ どうしたの？ 母さん」

「…………母さんはまだ操司がヒーロー科に進むことがいいことだとは思つてない。でも、これは操司が考えた上でやりたいと思つたことなんだよね」

真面目な顔で問いかける愛衣に対しても、操司は首を縦にふる。

「なら、母さんは応援する。今そう決めたから。…………いつも通り頑張ってきなさい」

「…………ふふ、ありがとうございます。行つてくる」

愛衣らしい応援に微笑みで返す操司。そのまま操司は試験へと向かつた。パタリと閉まるドア。愛衣はまだそこに操司がいるかのように見つめている。すると、和真が降りてきた。

「よく頑張ったね、愛衣」

「…………私は操司が後悔しないように動いて欲しいと思つていますから」

「愛衣らしいね。でも、後悔つてさ、誰もがするもんだよ。後悔を経験したことのない人は大抵自分で物事を考えられていない人ばかりだ。

だからさ、愛衣。僕は操司が後悔をしても構わないって思つてる。ただ、未練はないほうがいいけどね」

「それは貴方らしい励ましですよね」

「ふふ、違ひない。さて、ご飯はできてるかい？ お腹がすいたよ」

そう言つて甘野家は日常へと戻る。2人とも、思考のプロセスは違えど息子を大切に思う気持ちは本物である。それをお互いに尊重しあえるようになつた。それは一家としての方針を固めたおかげがあるのかも知れない。

操司が2人との待ち合わせ場所へと到着すると、そこには既に2人がいた。

「あ、遅いよ、操司くん」

「ごめんごめん。ちよつと気合い抜けてて」

「普通逆だろ」

「よし、んじや行こつか」

そうして3人は歩き出した。目的地は雄英高校。歩き出すと、後ろからエンジン音がし、3人の脇で止まつた。

「ほら、3人とも、電車で行こうとしてんのか？満員だぞ、乗つてけよ」
中から顔を出したのは育田であつた。

「あ、師匠、ありがとうございます」

3人は車に乗り込み、雄英高校へと向かう。

途中で飯田のことも載せていこうとしたが、飯田の両親が既に車で送っていることを確認したため結局乗せていくことはなかつたのはまた別の話だ。

* * * * *

雄英高校内で飯田とも合流し、そのまま筆記試験に移つた。しかし、私立聰明中学校でトップを誇る操司と優姫にベストテンに入る飯田、瑠九郎の4人だ。筆記に関しては問題はない。

筆記が終わり、4人で答え合わせをしていると実技試験に向けての説明のため、大ホールのような場所に連れて行かれた。

「わあ、プレゼントマイクだ」

「流石雄英高校ヒーロー科。プロヒーローもいるんだね」

「2人とも、説明は静かに聞くんだ」

「はあい」

そう話しつつプレゼントマイクによる説明を聞いていた。

要するに、今から行く演習場内に1～3ポイントのロボがいるからそれに勝てば良い。評価は倒したロボのヴィランポイントで決まる。ただし、0ポイントのロボもいるから上手く搔い潜つてポイントを稼げ、ということらしい。

『俺からは以上だ！最後にリストナーへ我が校の”校訓”をプレゼントしよう!!』かの英雄ナポレオン・ボナパルトは言った。

「真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者だ」と。

" plus ultra" !

それでは皆、いい受難を!!』

受験生は一斉に動き出す。おそらく仲間同士の協力回避のためなのだろう、4人の会場はすべて異なつていた。

「ねえ、最後の言葉、なんか怪しくない？」

「ああ、含みをもたせてた言い方だつたな。良い受難、か。まるで今回の試験は何か裏があるかのようだ…」

「うん、おそらくあるだろうね。確かに、0ポイントロボは逃げる事をお勧めされたよね。思いつくのは0ポイントが強敵だつたりとか?」「もしかしたら入ると0ポイントしか居なかつたりして」

「それはきついぞ」

3人は深読みをしつつ移動していたが、唯一飯田のみが話についていてなかつた。

「ん? ポイント制ではないのか?」

「ははは、天ちゃんは眞面目で素直だね。でも、あの雄英がそんな単純なポイント制だけにするはずないじやん」

「それもそうか?」

と、4人が考えているところで、係員から移動用シャトルバスに乗るよう指示された。

「んじや、あとは個人戦だね」

「ポイントは50も取れれば十分だろう」

「うん、皆で合格するよう頑張ろう!」

「師匠も言つてたけど天哉は考えすぎないようにな」

「ああ、留意する」

「んじや、ヴィランポイント最下位は帰りに皆に肉まん騎ろうか」

『のつた(分かつた)』

その約束をして4人は分かれていつた。

* * * * *

飯田が演習場A、優姫が演習場B、操司が演習場C、瑠九郎が演習場Dであつた。

(さて、80ポイントとつとけばビリにはならないよな。うーん、武器は持つてきただけど、特にいらないかも)

操司は考えつつ準備をしていると、

「はいスタート」

(よし、行くか)

操司はプレゼントマイクが続けて何か言っているのを無視して個性を使う。使つている物は制服の裏に隠していた薄い合金板（3cm×8cmで師匠の知り合いが作ってくれた物）50枚ほどだ。

操司は真上に飛び上がり、その合金のうち2枚に足を乗せる。そのままホバーバークラフトのように猛スピードで飛んでいった。
と、ここで1ポイントロボに出会う。

(まず1点)

合金をものすごい速さでロボにぶつけると、ロボの胴体に穴が空いた。操司の思つていたよりも案外固くないようだ。

(よし、あのチートどもには勝ちたいし、やりますか)

目の当たりにした受験生の驚きを他所に、50枚の合金は四方八方に散らばった。操司の無双はここからスタートする。

* * * * *

一方、優姫のいるB会場では1人の目かつり上がった男がロボを次々と爆破させていた。

(これ、私やばいかも? 少しペース上げないと)

そう思いつつ優姫は手をくるりと回す。すると、雪ん子が30体ほど現れた。皆大体5cm程度の大きさだつた。優姫はこれまでの鍛錬で大きさをある程度まで自由にでききるようになつていたのだつた。

「君らはロボにやられそうな人たちを助けてあげて」

『はーい!!?』

返事と共に走つていく。

(周りを助けることもヒーローとして必要だよね、多分)

優姫の現在持つているヴィランポイントは36。まだまだ足りないと思いロボを倒しに行こうとした時、先ほどの男の方をちらりと見ると、ちょうど背後にいたロボが襲いかかるところだつた。

(危ない!)

優姫は男とロボの間に立ち、ロボを破壊する。男がこちらを見てきた。いや、睨んで

きた、といったほうが正しいだろう。

「ふう、きみ大丈夫かい?」

「ああ!!?てめえなに俺の獲物とつてんだよ!すつこんでろ!!?」

男の言い方にカチンときた優姫。

「なによ、背後のロボに気づかなかつたくせに偉つそうに。君あのままだとやられてたよ?」

「うつせえ、クソモブ女!黙つて俺に敵を寄越せや!!」

「モブつてなによ!その文脈なら動詞!!?直訳したら「うん〇が女の元へ群れをなす」よ!ふざけてない!!?」

「何勝手にモブを動詞にしてんだてめえ!名詞の「一般大衆・鳥合の衆」のモブに決まつてんだろ、クソモブ女!」

「それでも「う〇〇大衆g i r l」てなんなのよ!意味わかんないし!しかも、モブには他に「暴徒」て意味もありますからー!君いつかは暴徒たちに殺されるよ!!?」

「うつせえ、クソモブ女!モブはモブらしくすつこんでろ!!?」

「……」

『(こ)いつにだけは負けない!!?』

案外仲良くなれるのかもしれない。ただ、それを見ていた周りが引いていたことは確かである。

* * * * *

演習場Dでは瑛九郎の独壇場だつた。

ロボが5体同時に瑛九郎に襲いかかる。瑛九郎の手にあるのは一本の日本刀。瑛九郎は一度息を大きく吐き、五体のうち一体に向かつて突進する。

「3ポイント」

それに刀を差しそのまま横に薙ぎ払う。ロボのうち2体が拳を振るうが瑛九郎はそれを飛んで回避する。そのまま瑛九郎は1体に剣を投げつけ、それに飛びつく。

「2足す1で3ポイント」

剣を掴み荒々しく引き抜くとそのままもう1体も破壊する。

「3足す2で5ポイント」

瑛九郎は地面に落ちてた石を拾い2体に向かつて投げつける。石は2体の顔に当たり、そのまま爆発した。

(さて、今俺は何ポイントなんだ?くそ、ちゃんと数えておけばよかつた)

瑛九郎は舌打ちしつつ神足通でロボのいる場所に向かう。

数えていられないらしいが、現在瑛九郎は81ポイント。圧倒的である。

裏ではその会場に配備された口ボが底をつきかけており、担当者が急いで他の演習場から口ボを配置しているところであった。

* * * * *

飯田天哉のいる演習場Aはまさしく混戦であった。

「48ポイント！」

飯田の個性は【エンジン】ふくらはぎにエンジンのような器官が備わっており、この器官によつて爆速を生み出すことができる。

（現在48ポイント。甘野くん達に比べると一歩劣つている可能性は十分ある。エンジンはまだ大丈夫だろうから、少しペースを上げるか）

そう考えた飯田が師匠との特訓で得た新技を使おうとしたその時、

轟音が響き渡り、地面が大きく揺れた。

何かと上を見上げると、数km四方に及ぶ会場を暗くする大きな影。それはたつた1体のロボの影であつた。

「ぜ、0ポイントヴィランだ！」

「逃げろ！」

誰かが叫ぶ声を皮切りに皆が走り逃げる。

（これが0ポイントか。相当な大きさだが、ヴィランは倒したほうがいいのか？いや、でも0ポイントだからこそ逃げるという手もある。ふむ……いつたい何が正しいんだ）

飯田は思案しつつも他の受験生と歩みを同じくする。

とそこで目に入つたのは、この流れに逆行する少年。緑のモサモサ頭にそばかすが特徴的なあの少年だった。飯田は彼のことを2度注意している。そのため彼のことを少しは知つていた。

（彼はあるの女子のことを見てから走り出していた。助けるのか？いや、違う。女子を助けるために0ポイントヴィランと戦う気か！）

「きみ！逃げろ！」

飯田の言葉を無視して走つていくモサモサ頭の男。彼は0ポイントヴィランに向かつて思いつきり飛び上がり、

「スマアアアアアアアアアアツシユ！」

一撃で0ポイントヴィランを吹き飛ばした。

第2話

「試験、しゅ——りよ——う」

プレゼントマイクによる終了の合図がなる。ここまで様子をモニター越しに見ていた教師たちは各受験生の審査をしていた。

この試験にはロボットを破壊することで得られるヴィランポイントの他に、他を助けようとする者に審査制で得点をつける救助ポイントが与えられる。現在はこの審査が終わり、集計と感想を言い合っているところだった。

「それにもしても、今年は面白い人達が多いね」

「今までにも0ポイントを倒す者はいましたが、今年は4体同時に壊されましたか」

演習場Aでは緑谷出久が、演習場Bでは冬野優姫が、演習場Cでは甘野操司が、演習場Dでは烏丸琰九郎が、それぞれ0ポイントヴィランを倒していた。講師たちは彼らの話で持ちきりだった。

「演習場Aの彼は0ポイントヴィランを破壊した後助けられなければ死んでいた」

「そういえば、彼のことを助けたあの人もいい動きでしたね」

* * * * *

演習場Aで出久が0ポイントヴィランを破壊した後。飯田は彼のことを見ていた。
 （あれはちゃんと着地できるのか？いや、腕と両足が腫れ上がっているぞ。あのままだ
 と彼は死んでしまう！）

そう感じた飯田は走り出した。
 ビルに向かつて。

「うおおお！ロータリーエンジン・ダブルブースト!!?」

飯田のふくらはぎにある排気口が若干太くなる。先ほどより若干濃いめの灰色の煙
 を上げながら飯田はビルの壁を垂直に登る。

（いけるか。いや、行くんだ！）

飯田は足に力を込め、そのまま出久に向かつて跳ぶ。

「君！手を伸ばせ!!?」

飯田の必死な顔を見たせいだろうか、出久が無事な方の手を飯田に向けて伸ばす。
 飯田はなんとか出久をキヤツチし、そのまま向こう側のビルにうつる。

「よく捕まつていってくれ！」

「うん！」
飯田はもう一度ロータリーブーストを使いビルの壁を登りきり、屋上へとたどり着く。

『ロータリーエンジン・ダブルブースト』は、飯田が師匠の育田との特訓で編み出した技の1つである。飯田のふくらはぎのエンジンは元々レシプロエンジンと呼ばれる従来と変わらないエンジンだ。ピストンの直進運動を回転運動に変換することでエンジンの機能を果たしている。これをピストンによる直進運動なしに直接回転運動へと変換させるのがロータリーエンジンと呼ばれている。高出力ではあるが、熱効率が悪く、燃料を多量に消費してしまうのが難点だ。

（間に合つたか）

ちょうどその時、プレゼントマイクによる終了の合図がなつた。

* * * * *

「壁を垂直に登りきる男なんてなかなかいないさ。イカしてるぜ！」

「私は演習場Bの女の子が好みだわ。しつかりと他のフォローも忘れない、いい子だと
思う」

* * * * *

演習場Bでも0ポイントヴィランの登場によりパニックになつていた。
(あれは0ポイントヴィランか。みんなヒーロー志望のくせに敵から逃げるなんて、師
匠に知られたら殺されるよ)

そう思いつつ優姫は巨大ロボに向かつて走り出す。

「あ、おいてめえ！逃げるのか！」

目のつり上がつた男は非難するが優姫は無視して走り続ける。

(さてと。破壊すると周りの建物に被害が出るし、動きを止めるだけでいいよね)

優姫は自身の出していた使い魔たちを一旦消し、今度は約2m程度の使い魔を2人出
した。

「2人とも、私を上に飛ばして！あのロボのお腹くらいまででいいから」

使い魔たちは領き、優姫の5m先で待ち構える。優姫が走つてそこに飛び込むと使い
魔2人はそれを思いつき斜め上に投げ飛ばした。

ロボが優姫に気づく。はたき落とそうと手を振り上げると

「遅いよ」

優姫は思いつきり息を吹きかけた。ロボは腹から凍りついて動かなくなる。

「固めとくか」

そう言い優姫は手を2回叩く。すると、ロボの周りに雪が降り始める。

「かたまれー」

ロボが立っていたところは一瞬にして雪山へと変化してしまった。

優姫は使い魔2人にキヤツチされて無事に着地する。

その場にいた者たちは驚愕のあまり動きを止めてしまう。

「なつ…………」

先程まで息巻いてた目のつり上がった男でさえも優姫の強さに口を閉じることができない。

と、そこで彼の元に優姫が近づいてきた。

「そ、ういえばさつき逃げるのか?とか言つてたよね」

ニヤリと笑いつつ続ける。

「違うよ。君に格の差を見せつけるために走つただけだ」

目のつり上がった男が何か言い返そうとしたその時、試験終了の合図がなった。

* * * * *

「そうか？あの子ずっとあの爆豪つて奴を挑発してたぞ。なかなかクレイジーだと俺は思うがな」

「それにもしても演習場Cのあれはなんだつたのでしょうかね」

* * * * *

演習場Cは実はあまりパニックにならなかつた。というのも、0ポイントヴィランは出てきたと思ったら"すぐに消えてしまつた"からだ。

それをしてたのは甘野操司だつた。

(さて、出てきたな、0ポイントヴィラン。僕まだヴィランポイント75しか集めてないからちよつと消えてもらうよ)

操司は巨大ロボの足元に立つとそれに触れた。そして、過干渉を起こし、ロボの存在自体をなかつたことにした。操司にとつては特筆すべき事ではないのだが、他からすれば驚愕以外のなにものでもないだろう。

他の受験生が固まっているうちに操司がポイントを稼いでいると、試験終了の合図がなった。

「彼の個性は一体なんなのだろう。色々なものを操るかと思えばロボットを丸ごと消しちやうし。かと思えば他の受験生の傷は治すわ3ポイントヴィランのかおを直接もぐわ……稀に見る超人だな」

「私は演習場Dの彼が好きだな。中々派手で大胆な事をしてくれた」

演習場Dで巨大ロボを見た瑛九郎は心の中でニヤリと笑っていた。

(0ポイントヴィランがこの程度でよかつた。これなら余裕だ)

瑛九郎は神足通でビルの屋上まで移動した後、すぐにロボに向かつて飛び上がる。

瑛九郎は特訓の結果短時間であれば空を飛べるようになつていた。その速度は最高時速228km。常人の域をはるかに超えた速度だ。

ロボによる攻撃を難なく避けた瑛九郎はそのままロボの頭部を持ち上げ、

そのまま頭部をもいだ。

他の受験生からは

『はああああああああああ!?』

という声が響いたが、瑛九郎はそれを無視しロボの頭部を振り上げ、

「ほら、お前の頭だ。返すぞ」

そのままロボに向かつて叩きつけた。

派手に破壊されるロボの破片を避けつつ瑛九郎が着地すると、
終了の合図がなつた。

* * * * *

「しかし彼の場合は周りへの被害がある。そこを考慮しなければいけないな」

「みんな、お疲れ様」

人、と言つていいのだろうか。鼠なのか、それとも犬なのか熊なのか。少なくとも成
人男性の半分も身長がないそれは、スーツを着て現れる。彼こそが雄英高校校長の根津
であつた。

「今回の受験生はどうだつたかな？」

「今回は有望な者が多いみたいですね」

返答した男にビシイッと指をさし、根津が嬉しそうに続ける。

「そうなんだ。今年は有望な者が多い。それこそ落としてしまうのはもつたいないほど
に、ね。

そこで提案だ、みんな。今年は20人を超えた人数を雄英の生徒として受け入れるの
はどうだい？」

根津の提案に意見は様々だつた。

「校長、待つてください。確かに有望な者がいる事は確かだが、そういう奴らは大体上
位に食い込んでいる。別に枠を増やす必要はないでしょう」

「いやあ、イレイザーヘッド！俺はギリギリ合格圏内の奴にも良いソウルを感じる者がいたぜ！」

「五月蠅いひざし」

「おねがい！一回だけで良いからプレゼントマイクって呼んで！」

ああでもない、こうでもないと議論は続く。

「よし、なら多数決を取ろうか」

多数決をとつた結果は、

「うん、決まりだね。今年のヒーロー科は23人クラスにしよう」

そう言いつつも、根津の眼には画面越しの操司達が写っていた。

(私立聰明中学校か。彼らの個性はきちんと制御できるようにしてあげないと、とても危険だね)

結果の集計は続いていた。

* * * * *

操司達は試験終了後4人で集まつていた。

「おつかれー、何ポイントだつた?」

「僕は81ポイントだよ、足し算間違えてなければ」

「なに! そんなにとつていたのか。俺は58ポイントだ。悔しいな」

「ふつふつふー。私はなんと85ポイントでーす! さあ、崇め奉れ!」

優姫の自慢げな声を無視し、操司は瑛九郎に声をかける。

「瑛ちゃんは?」

「……51+a。最初5分は数えてなかつた」

「え、私のこと無視?」

「そつか、んじや、ビリは瑛ちゃんだ!」

操司は優姫の言葉をまた無視し次につなげる。

「いや、確実に俺はプラス10はいってるぞ!」

「いやー、数えてなければノーカウントだよね~」

「そうだったのか、烏丸君。よし、俺の負けだ! 悔しいが肉まんは俺が奢ろう

「いや、私のこと無視!?!?」

結局瑛九郎と飯田で2人に奢つたが、またそれは別の話。

甘野操司は夜も早い。遅くとも8時には夕飯を食べ終わす。1日の疲れを落とすため、風呂は約30分程度かけてゆっくり浸かる。風呂から上がりると必ずパックで売っているカフェオーレに手を伸ばし、コップ一杯分を飲み干す。その後テレビを見る、といつたことはなくすぐに勉学に移る。睡眠時間は6時間は確保するべく、夜10時には寝床につく。

こうして彼の1日は過ぎていくのであった。

第3話

結果から言うと、私立聰明中学校の4人は無事合格していた。しかも、1位は瑛九郎と操司の2人だというのだから驚きだ。操司よりも瑛九郎の方が実技のポイントは高かつたが、操司の方は筆記において瑛九郎と差を詰めていたため、総合では同率だつたらしい。

ちなみに、実技トップ5の成績は以下の通りである。なお、ポイントは、敵+救助＝合計の順に示している。

1.	烏丸	瑛九郎	(119 + 11 = 130)
2.	冬野	優姫	(85 + 39 = 124)
2.	甘野	操司	(81 + 44 = 124)
4.	飯田	天哉	(58 + 51 = 109)
5.	爆豪	勝己	(93 + 7 = 100)

育田から（試験終了後に）設定された「150ポイント越え」を達成できなかつたため、4人の春休み特訓メニューが死ぬほど辛くなつたのはまた別の話である。

* * * * *

時は流れ、入学の日。操司はいつもと変わらず『流一』をこなす。

雄英高校の入学初日。そんな日でも彼はペースを崩さない。

「楽しみだなー。どんな人がいるのかなー、うへへへへ」とい、崩されていた。

「操司、朝ご飯できたら降りてきなさい」「りよーかーい」

こうして彼はほんの少し気持ちを緩めたまま優姫達との待ち合わせ場所に向かう。

初登校は3人であつた。そもそも飯田家は3人とは遠い所にある為、4人揃つて登校することなんて滅多にない。

「いやあまさかクロ君が実技一位だとはね」

「でも、だからと言つて天狗にならないでよ」

「なるか、アホ。というか烏天狗と鼻高天狗は別物だからな」

「え、本当に？」

「おい、本気で知らなかつたのか」

などと話しつつ3人は雄英高校にたどり着く。この時点で集合時間の30分前だ。どうやら飯田の早く来る癖がうつり始めたのかもしれない。クラスを確認すると、

「あ、3人とも一緒！」

「てか、天哉も一緒だな」

「騒々しさが目に見えるよ」

「その騒々しさは9割5分優姫とお前だからな」

「A組かー。いやー、緊張するね」

3人は1—A教室に入つた。すると、飯田は既に来ておりこちらを見るなりすぐに近づいてきた。

「3人とも、おはよう！」

「やつほー天ちゃん」

「あれ、天哉くん、少し引き締まつた？この間よりもムキムキだね」

「特段変化させたことはないのだが」

「それ、多分師匠の特訓のせいだろ。天哉は特にきつかつたからな」
など話をしていた。

途中優姫が

「あー、君はあの時の目付きも口も悪いやつ！」

と叫び一悶着あつたり、ある女子に

「梅雨ちゃんと呼んで」

と言われ、抵抗を持った琰九郎が2人から弄られたりしたが、平和な時間を過ごした。

操司がふと廊下を見ると、入り口に立っているモサモサ頭の少年とボブカットの女子の背後に何かが倒れているのを見た。すると、その倒れているものから急に

「友達こつこなら他所でやれ。此処はヒーロー科だぞ」

と声が聞こえた。操司はその様子を見るなりすぐさま神妙な顔をして瑛九郎に話しかける。

「ねえ、瑛ちゃん。あれ先生だよね」

「多分な

「あれさ、あの女子のスカートの中見えてない?」

「……そんなことはない。きっと。しかも、最近の女子なら何か中に短パンとか履いてるはずだから大丈夫だ。きっと」

「瑛ちゃん。新入生が入学初日にどこの短パン履くかも微妙なところだし、そもそも瑛ちゃんがきつとつて連呼するときは大抵反対仮想ないしは実現不可能な希望だつてわかつてる時なんだよね」

「……うるさい」

「はい、ずぼしー」

と、小声でそんなくだらない話をしているうちに寝袋から出た男が話し始める。

「はい、静かになるまで8秒かかりました。君達は合理性に欠くね」

出てきた男の格好は、取り敢えず地味だった。黒髪はケアされてないかのようにだらりと垂れており、口周りには無精髭。服装は黒の簡素なスーツ?のようなものを身に纏っている。首回りに布のようなものが大量に巻かれているのが特徴的である。「担任の相澤消太だ、よろしくね。早速だが、全員これ着てグラウンドに集合」そう言つて寝袋から出てきたのはジャージ。

(あれ、ジャージってみんな入学前に買つてるはずだよな)

案の定自分で買ったジャージを着用し、グラウンドに集まつた。

「よし、それではこれから皆には個性把握テストを受けてもらう」

『個性把握テ스트?』

ボブカットの女子（確か麗日と言つていた）が焦つたように相澤に尋ねる。

「え、入学式は？・ガイダンスは？」

「君らにそんなことする暇も余裕もない。」

雄英は自由な校風が売り文句。それは先生側もまた然り。お前らも中学時代にやつたろ、個性禁止の体力テスト」

そう言つて相澤は手に持つていたタブレットを見せる。タブレットには体力テストの種目が並んでいた。

常人に個性が表れてしまう、という超常現象に政府は、そして文科省は対応できていなかつた。そのため、個性使用禁止、という形で体力テストを行つてゐる。

しかし、これには欠点がある。それは、個性を本当に完全に禁止できるのか、という課題だ。個性には異形型、発動型、変形型、その複合型と様々な種類がある。それらを全て抑制することはなかなか難しい。特に異形型は常時発動されているのと同等であるため、使用禁止などということはできない。この時点で既に差が生まれている。この問題点を相澤も文科省の怠慢だ、と指摘した。

「今年の実技成績トップは、烏丸か。来い」

呼ばれた瑛九郎は前に出る。途中何処から舌打ちのようなクリック音が聞こえたが、瑛九郎は無視して相澤の言葉に集中する。

「お前、これから50mを走れ。個性を使用していい」

瑠九郎が領くと位置につく。皆が固唾をのむ中堂々と構え、スタートと同時に瑠九郎は神足通で瞬時に走り去つた。

「先ずは自身の最大限を把握する。それがヒーローの基盤を作る最も合理的な手段」

そう言いつつ記録を皆に見せる。記録は

「0秒29」

「す、すげえ！」

「楽しそう！」

「個性を使えるのか！流石ヒーロー科！」

記録を見たのをきっかけに皆が歓声をあげ盛り上がる。

「ねえ、操司くん。クロ君さ、益々速くなつてない？」

「いや、あれはラグがなくなつてきたんじやない？意識と発動に差がないからより速く

動けるつてこと

盛り上がる生徒を見た相澤は身に纏う雰囲気を急に変える。

「ほう、楽しそう、ねえ。君たちは本当にそんな心算で3年間過ごすつもりなのかい?」
突如変わる相澤の雰囲気に皆の様子もガラリと変わる。ピンと張り詰めた様子だ。

そんな中相澤はこう繋げる。

「よし、トータル成績最下位の者は見込みなしとみなし、除籍処分としよう」
そう宣告する相澤は先ほどのくたびれた雰囲気の男とは打って変わつて、

「生徒の如何は俺たちの自由。

ようこそ、これが〈雄英高校ヒーロー科〉だ」

強者の空気を醸し出していた。

* * * * *

「最下位除籍つて……理不尽すぎる！」

生徒たちの当然の抗議に対し、語り始めた相澤。まとめるに、日本は理不尽にまみれており、そういつた理不尽を覆してこそこのヒーロー、ということだ。

「これから三年間、雄英は全力で君たちに苦難を与える続ける」

ニヤリと笑みを浮かべ、人差し指をクイッと曲げながら相澤は生徒たちに言つた。。

「" Plus Ultra" さ。全力で乗り越えて來い」

最後の相澤の言葉に対する生徒たちの反応は様々であった。気合を入れ直す者、深刻な顔つきで自身を見つめている者、笑顔のまま何も変化のない者……

そんな中、操司は優姫と琰九郎に宣言する。

「あのさ、僕はこのテストで本気で2人に勝つから。で、1位を取るから」

2人は一瞬キヨトンとした顔を浮かべた後、直ぐに好戦的な笑みへと変化させる。

「私も負ける気ないから」

「俺は実技一位だつたからな。負けるわけにはいかないな」

3人とも気合は十分である。

こうして、入学1日目の幕は開けた。

第4話

第1種目・50m走

操司の番となる。操司は自身を並行世界と干渉させ、スタートの合図とともにゴールへと移動する。傍から見れば瞬間移動だ。記録は

「0秒07」

数秒遅れて並走していた生徒もゴールする。

「お疲れ、梅雨ちゃん」

「お疲れ様、甘野ちゃん。凄いわね、瞬間移動が個性かしら?」

蛙吹梅雨は操司の個性を分析するが、操司は笑つて否定する。

「んー、違うな。僕の個性はもう少し複雑なんだ」

「どんな風に?」

「んじゃ、個性の名称だけ教えるよ。僕の個性は【強制干渉】っていうんだ」

個性の名称を教えられてもいまいちピンときていらない様子の蛙吹。

「まずはここから避けよつか。次の人も来るし」

「そうね」

操司達が皆の元へ戻ると、赤髪を斜め前に立たせた男としようゆ顔の男が近づいてきた。

「お前、すげえなあ。あれってどんな個性なんだ？」

「ふふ、なんだと思う？ ちなみに瞬間移動ではないよ」

「はあ、嘘だろ」

「ほんと」

「あ、そうだ。俺、切島銳児郎」

「俺は瀬呂範太。よろしくな」

「僕は甘野操司。よろしくね切島くんに瀬呂くん」

どこで優姫が走り終わつた。記録は

〈3秒9.1〉

「すいませーん、誰かこの氷溶かせる人いませんか？」

などと話している声が聞こえた。どうやら地面を凍らせて滑つていったのだろう。

「いやあ、優姫さんもやるなあ」

「そういえば2人とあと、瑛九郎？ の3人で登校してたよな。仲良いのか？」

「うん。僕らと飯田くんの4人は同じ中学だからね」

「……ことは聰明!!?」

「あ、今似合わないって思つたでしょ。一応学年トップ2は僕と優姫さんだからね」「はあ？ まじか。エリートかよ」

操司は切島と瀬呂と仲良くなつた。

瑠九郎の記録は変わらなかつたことを記しておく。

第2種目・握力

〈90 kg〉

操司の記録だ。測定器に干渉を起こしてもつと記録をあげることもできたが、それは不正とみなされないか不安になり、自分自身に個性を使うことにした。

「んー、もう少し欲しかつたな」

「普通よりは十分取れてるぞ」

「まあ、そなんだけどね」

「優姫ちゃんすつごーい！」

「へへへ、そう？」

盛り上がっているところを見ると、優姫が「850kg」という結果を叩き出していた。

「ああいうのがいるからさ」

切島と瀬呂は苦笑いを浮かべる。

「いいか、あれを人は『人外』と呼ぶんだ」

「いや、あれは『チート』だな」

「やっぱ2人もそう思うよね」

怒らせないようにしようと誓つた3人であつた。

一方琰九郎は、

「ふん！」

「70kg」

「やっぱ素だとこんなもんか。おい、障子。どうだ？」

「今からやる」

障子目蔵という腕が6本ある男と一緒に行動していた。
障子の結果は

〈540kg〉

周りから歓声が起る。

「凄い便利だな、その個性。でもそれって右手とか左手とかあるのか？」
「…考えたこともなかつた」

「ここでは優姫が一步リードである。

第3種目・立ち幅跳び

「先生」

「何だ烏丸」

「これは跳ぶのしか認められませんか？飛ぶのはダメでしょうか」

瑠九郎の問いに相澤は若干思案すると

「ダメだ。空飛べる奴ばかりが有利になりすぎる。」

「わかりました」

操司はここでは個性を使わずに跳んだ。終了後に切島と瀬呂が操司に尋ねる。

「何で個性使わなかつたんだ?」

「あ、僕の個性は糖分が必要でさ。足りなくなると頭痛で動けなくなるんだ。あと5種目あるからこれは普通にしようかなつて思つて」

「はあ、なるほどな。一応制限もあるのか」

瑠九郎も普通に跳んでいたようだ。優姫は跳んだ後息を後方に吹きかけて遠くまで風に流されることで距離を稼いでいた。

第4種目・反復横跳び

これは小さめの男子が活躍していた。おそらく彼の個性なのだろう、頭の球体を大量にもぎ、線の両端に設置していた。

(あの球にぶつかることで跳ね返つてるのか。面白い個性だな。あの男の子がぶつかつても崩れないってことはある程度の粘着性もある。使い方次第では強力にもなるか)

「何考えてんだ?」

「ん?どうやつて瀬呂くんを弄ろうかなつて」「いや被害者俺かよ!」

「いいツツコミだね。いよつ、係長！」

「せめて社長とかにしてもらえないか！」

結局優姫、操司、瑛九郎は個性を使わなかつた。

第5種目・ボール投げ

操司はボール自体に個性を使った。常に加速度が正になるよう。

結果は〈∞〉

「無限!..?」

「すっげー！」

賞賛の声が聞こえまんざらでもない操司。上機嫌で話していると

「また無限きたー！」

「どうなつてんだこのクラス！」

麗日がちょうど投げたところだつた。自分と同じ結果を出した麗日に興味を持つた操司は麗日と話をしようと近づく。

「ねえ、凄いね。ボール投げ」

「ありがと。てか君も記録一緒じゃん！」

ははは、と2人は談笑する。

「そうだ。僕は甘野操司。よろしくね」

「私、麗日お茶子！ よろしく！」

ボール投げは坦々と行われていた。琰九郎は〈85m〉、優姫は〈70m〉だった。

優姫の測定が終わると麗日が明らかに緊張した顔つきへと変化する。

「どうしたの？」

「うん。あのね、次に投げる人、私の知り合いなんだけど」

そう聞いて操司は次の測定の準備をしている人を見る。緑のモサモサ頭の少年だ。名を緑谷出久という。飯田に試験会場で注意されていた人か、と操司は1人得心する。「そういえば、まだあの人すごい記録出した、って聞かないね。大丈夫かな」

「うななんよ。心配だ、わたし」

そんな話をしつつも緑谷の第1投目が行われた。記録は

〈46m〉

緑谷は驚いたような顔をしている。隣では相澤が髪を逆立てつつ緑谷に何か話をしていた。

その様子を見て飯田が呟く。

「何の話をしているのか」

「けつ、どうせ除籍宣告かなんかだろ。無個性の雑魚だぞ」

吊り目の男、爆豪勝己が吐き捨てるように答えると、飯田は驚いたように反論する。

「なつ、彼が入試時に何をしたのか知らんのか!!?」

「は?」

操司はその会話を聞いており、飯田に話しかける。

「ねえ、天ちゃん。彼が緑谷くん？君の言つてた」

「ああ、そうだ。なぜ個性を使わないのかは分からぬいが」

「それは腕壊れるからでしょ」

ふと緑谷の方に顔を向ける。彼はボールを見つめながら何か思案していた。

(恐らく彼が言われたことは腕が壊れることの代償だろう。1発を敵に避けられたらそれだけで死ぬ可能性だつてある。合理的な事が好きそうな相澤先生ならそんな不合理を認めるはずがない。

てかそもそも何であんなボロボロになるんだろ。個性発動したばかりではあるまいし。調整出来てないのか。ん？調整？）

操司がそう考えていると、緑谷の2投目が行われた。ボールは緑谷の前方を高く飛んでいき、雲を散らす勢いで進む。相澤が結果を見ると

（705・3m）

同時に歓声が起る。

「やつとヒーローらしい記録が出たよー」

「指が壊れている。やはり不思議な個性だ」

そんな中操司はまだ思案を続けていた。

（威力は充分。だと身体がついていけないので。やはり調整不足。0か100しかでないとしたら大変だな。でももししあれが調整可能なんだつたら、相当強力な個性だぞ。シンプルな増強つていいなあ。やれること多いし派手だし）

などと考えていると、隣にいた爆豪が、

「どーいうことだコラわけを言えデクテメエ!!!」

叫びながら走り出していた。

（あの馬鹿、そんな威嚇で教えてくれるはずないだろ。：止めるか）

即決した操司は地面に手を触れる。すると、走っていた爆豪の足元に小さな凸があり、爆豪はそれに足を引っ掛けてしまう。その時操司は既に走り出しており、爆豪を抑え込む。

「はいストップ爆豪くん。訳は後で聞きましょうね」

「おいコラ離せや！」

「なめてんのかゴラア！」

そう言つて操司はラジオ〇操第一を歌い出す。それが爆豪をさらに怒らせることになつてゐるのだが、操司は全くそのことに気づいていない。

「甘野、手を離せ」

相澤が操司に手を離すよう指示した。操司はそれに従う。

「爆豪、それ以上暴れるとどうなつても知らんぞ」

相澤の注意（というよりもむしろ脅迫に近い言葉）に爆豪も大人しくなる。

緑谷はその間に麗日と飯田の所に戻つていた。

操司も戻ろうと歩いていると、

「何である時お前が止めたんだ？」

瑛九郎が声をかけた。

「ん？ 緑谷くんが危ないかなって思つて」

「相澤先生が動こうとしてたことにお前が気づかないわけないよな。だから聞いてるんだ」

「…ふう、瑛ちゃんには嘘つけないね」

一度息を吐いた操司は話を続ける。

「彼が優姫さんと同じグループにいた人だろ。どのくらい強いのかなーって思つてさ。仕掛けてみたけど、案外あっけなかつたね」

「そりやそうだ。人間怒り狂つてる時は周りが見えなくなる。当然のことだろう」「ま、1番は瑛ちゃんだろうからさ。僕は君に勝つよ」

そう言つて操司は切島達の元へと歩いて行つた。

そのまま特に事故もなく上体起こし、長座体前屈、1500m走が終わり、生徒達は一箇所に集められた。

「では結果を発表する。口頭で説明すんのは時間の無駄なんで、一括開示する」

そう言つて相澤は結果を出した。

1位は不動の琰九郎。1500m走では時速200kmで飛ぶという業を見せた。走つてないのだが有りかという操司の抗議は却下されていた。2位は操司。3位は優姫、かと思ひきや、八百万という女子だつた。4位が優姫、5位が飯田である。そして、除籍されるということで注目されていた最下位は緑谷であつた。

誰もが緑谷に同情したその時

「あ、除籍は嘘な」

場の空気が凍る。

「きみらの個性を最大限引き出す合理的虚偽」

してやつたりといつた顔をする相澤。そんな彼にワンテンポ遅れて
『はあああああ!!?』

緑谷達の絶叫が響いた。信じていたものは多かつたのだろう。特に緑谷はまるでモノ
ノクロのムンクの叫びのようになつたまま固まっている。そんな彼らを尻目に相当な
量の髪をボニー・テールに括った女子、八百万百は

「あんなの嘘に決まってるじゃない。少し考えれば分かりますわ」

と呆れた口調で言う。

多種多様な反応をする生徒達を尻目に先生は先に校舎へと戻ってしまった。

「ん？…これって片付けは僕らでやれってこと？」

そんなどうでもいいようなことに疑問を抱く操司であつた。

第5話

入学2日目。午前中は意外にも普通の授業だった。先生が皆プロヒーローであることを除いてはどこの高校でもある普通の授業である。時折プレゼントマイクが盛り上げようとシャウトしたり、エクトプラズムが演習中に個性を使って見回りを倍にしたりしていたが、ほんの少しの刺激に過ぎない。高校の内容を既に網羅している操司に彼から少しずつ勉強を教わってきた優姫と琰九郎にとつては退屈そのものであつた。

席順は相澤の合理的思考が遺憾なく発揮された結果、出席番号順となつた。操司は1列目の1番後ろ、琰九郎は2列目の1番後ろで2人は隣同士となる。

「うわ、隣は琰ちゃんか。新鮮さないな」

「授業中うるさくするなよ」

「……」

「そんな悲しそうな目で見ても無駄だぞ」

「僕のお色気作戦が通じないとは……」

「今のお前にはお色気の欠片もなかつた」

「なん……だと……」

2人は平常運転だった。

また、優姫は5列目の1番前となつていたが、峰田からの黒板が見えないという要望により、5列目の後ろから二番目、八百万の前で緑谷の後ろ、轟の隣になつた。斜め後ろは葉隱だ。

「よろしくね、焦凍くん」

「…ああ、よろしく」

「百ちゃんもよろしくね」

「まさか冬野さんと近くになるとは思いもよりませんでしたわ」

「まあ、私の周りも中々個性的な面子だからね。楽しみだな」

「お前が1番個性にあふれてるだろ」

「ん?なんか言つた? 焦凍くん」

「…いや、何でもない」

「ちよつと! 私も近いんだから無視しないでよ!」

「あ、ごめん透ちゃん。透明で見えなかつたー」

「あ、なるほど。

つてちやんと制服着てるわ!」

優姫は上手く馴染めている（？）ようだ。

昼はランチラツシユが経営する食堂があるが、とても人気があるため並ぶのも一苦労だ。

瑠九郎と操司は上鳴、障子、蛙吹、耳郎と食堂へ行つた。その一方で、優姫は八百万と教室で弁当を広げていた。

「え、百ちゃんそんなに食べんの！？」

「個性の影響も有りますから」

「だからそんなに実つて育つたのか」

「いや、隠されてませんよ！」

優姫の前では誰もがツツコミをしなければならない。それが彼女の凄さであった。

昼食が終わると、ヒーロー科としての特徴もある、ヒーロー基礎学が行われる。生徒達はこの授業を楽しみにしており、皆そわそわしていた。

そんな中、1つの声が響く。

「私が――――！」

「こ、この声は」

「普通にドアから来た!!」

そう言つてオールマイトが前方のドアから教室に入つてくる。生徒達が歎声をあげる中、操司と琰九郎は

「ねえねえ、オールマイトさ。思つてたより静かにドアを開けたよね。結構気を使うんだね」

「でも声のせいで聞こえなかつただけつてのもあり得るぞ」

などと話していた。緊張感のない2人である。

「私の担当する科目はヒーロー基礎学。単位数も最も多いぞ。

早速だが今日はコレ！『戦闘訓練』だ!!」

宣言と同時に何処からか取り出した『Battle』と書かれたボールを見て生徒達は反応を様々にする。

「そして、それに伴つて、こちら！」

入学前に送つて貰つた『個性届け』と『要望』に沿つてつくつた戦闘服だ！」

オールマイトがリモコンのスイッチを押すと、壁から現れたのは23個のボックス。

中には戦闘服が入つて いるようだ。

オールマイトの話に生徒達からは歓声が出る。そんな中オールマイトが話す。

「皆、これを着てグラウンドβに集合だ!!」

* * * * *

『被服控除』

入学のお知らせと共に届く提出しなければならない書類の一つだ。そこには自分の個性、特徴などを踏まえつつどんなヒーローコスチュームにしたいかの要望を記入できる。するとサポート会社がそれに沿ったコスチュームを作成してもらえるのだ。ヒーロー科としての特色とも言える。

(へえ、思つたよりも軽いな。すゞいぞ、これ)

操司達は男女別の更衣室で着替えを済まし、感想を話しながらグラウンドβに向かつていた。

操司のコスチュームは、漆黒の学生服のようなものの上に足元まで届き得る淡い黒色のコートを羽織つてゐる。コートの持ち出しの部分は濃い藍色のラインが引かれてゐるようだ。おまけに首からは十字架のシンプルなネットクレスをつけ、白い手袋をはめている。傍目から見たら完全に神父である。

しかし、サポート会社というのは素晴らしいもので、この至つて平凡な神父の格好の中にたくさんの工夫が込められているのだが、それについての説明は後ほどにしよう。

「お、瑛ちゃんもいいね。かつこいい」

「まさか、素直に褒められるとは思つてなかつた。お前は、神父か」

そう述べる瑛九郎のコスチュームは、白の鈴懸に灰色に近い黒の袴。翼を連想させる茶色の装飾が結衣袈裟と共に掛かつてゐる。背中には一本の長い錫杖が下げられ、腰には二本の刀が。そして顔は鴉天狗のお面で覆われており、見た目からすれば物騒な山伏といつたところであろうか。

「そつちだつて完全に鴉天狗まるつとリスペクトでしょ」

「俺はこういうの考えるのが苦手でな。ネットからパクつた」

「それありなの!?!?」

などと話していると、グラウンドへと到着する。オールマイトは既に待つており、皆の様子を伺っていると、飯田がオールマイトへ質問をする。

「先生！此処は入試の時の演習場のようですが、今から市街地演習を行うのでしょうか？」

「いや、もう二歩先に踏み込む。屋内での対人戦闘訓練だ！」

オールマイトは皆の様子を見つつ軽快に進める。

「敵退治は主に屋外で見られるが、統計的に言えば屋内の方が凶悪敵の出現率は高いんだ。監禁・軟禁・裏商売……このヒーロー飽和社か……ゲフン、眞に賢しい敵は、屋内に潜む!!？」

君らにはこれから「ヴィラン組」と「ヒーロー組」に分かれて、基本2対2の屋内対人戦を行つてもらう!!？」

「基礎訓練もなしに？」

「その基礎を知るための訓練さ。但し、今回はただぶつ壊せばオーケーなロボじゃない所がミソだ！」

「勝敗のシステムはどのようになつているのでしょうか」「ぶつ飛ばしてもいいんすか」

「また相澤先生みたいに除籍とかあるんですか？」

「分かれ方とはどのような分かれ方をすればよろしいのでしょうか！」

「このマントヤバくない☆」

矢継ぎ早に来る質問に対し、オールマイトは言葉に詰まる。結果、出てきた言葉は

「んんく～聖徳太子イイイ!!」

的を得た一言だつた。

オールマイトはカンペを取り出し、書かれていることを伝える。まとめると
 ・片方がヒーロー役、片方がヴィラン役となる。ヴィラン側が保有している核をヒー
 ロー側が取り締まる、という設定で戦う。制限時間は15分。核の場所はヒーローには
 知らされていない。

・くじでペアになるものと対戦組み合わせを決める。どのペアにもお互いの通信機、
 相手を確保するための確保テープ、建物の見取り図を配布。

- ・核にタツチするかヴィランを全員捕まえたらヒーローの勝ち。 15分経つかヒーローを全員捕まえたらヴィランの勝ち。

くじの結果は以下の通り

A : 緑谷出久	麗日お茶子
B : 轟焦凍	飯田天哉
C : 八百万百	峰田実
D : 爆豪勝己	尾白猿夫
E : 茅戸三奈	青山優雅
F : 砂糖力道	口田甲司
G : 上鳴電気	障子目蔵
H : 蛙吹梅雨	常闇踏陰
I : 冬野優姫	葉隱透
J : 切島銳児郎	瀬呂範太
K : 甘野操司	烏丸瓊九郎
耳郎響香	

「先生。何でうちらだけ3人になるんですか？」

耳郎の質問にオールマイトが答える。

「いい質問だ、耳郎少女!!

今年は1クラス23人であつてね、2人チームを組むと1人余つてしまふ！
そこでだ！実は君ら3人チームが戦う相手はもう既に決まつているのさ！」

オールマイトの言葉と共に2人組が入つてくる。

1人は身長190を超えているのではというほどの長身の男。執事の着るような燕尾服の中は白のシャツを合わせている。

もう片方は隣の男に比べるとやや小さいが恐らく身長170は無い程度のショートカットの女性。フリルのついたピンクのシャツに赤のミニスカートを合わせている。ニーソックスを履き、革の手袋、頭には赤いキャスケットを被っているその様子は、スペインの活動家を連想させる。

「それじゃあ、君たちKグループと戦う2人を紹介しよう！君たちの先輩、2—Aの2人だ！」

「糸引 鉤（いとひき まがり）だ。よろしく」
「音楽 玲実（おとらく れみ）よ。楽しみましょう」

操司達の前に、今、最初の壁が立ちはだかる。

第6話

第1試合はAコンビ vs Dコンビ。爆豪と緑谷の2人には一種の因縁があつたらしく、激しい試合展開を見せた後にAコンビが勝利した。

モニタールームで見ていた人は皆この試合の盛り上がりに喚起され、気合十分で次の試合へと移る。

「続いて第2試合！ 対戦相手は——!!？」

そう言いながらオールマイトは2つのボックスからボールを1つずつ取り出す。

「ヒーロー側はBコンビ、ヴィラン側はIコンビだ！」

優姫・葉隠ペア vs 轟・飯田ペアの戦いとなつた。それぞれ所定の位置について作戦会議を始める。

* * * * *

轟と飯田は入り口で話し合いをしている。まずはお互いの個性の確認、それから相手の戦力の分析をしている。

「葉隠の個性は見た目通りだな。透明になる個性か」

「冬野くんの個性は【雪女】。吹いた息を凍らせたり吹雪にしたり、使い魔を出せる。あとは怪力でもある」

「葉隠の方は、どこかに潜伏されたら厄介だな。こつちには察知する術がない。ビルは5階建て。このくらいの大きさなら凍らせることはできる。」

「一旦ビルごと凍らせて葉隠の動きを止めるか？」

「しかし、もし葉隠くんが冬野くんの出した使い魔の上に乗ついたらどうだ？ こちらとしては裏をかかれてしまう」

「使い魔はどの程度出せるんだ？」

「身長1・8m程度ならば20人までは見たことがある。運動神経も悪くなく、1つ1つが意思を持つてる。2vs20で戦つていると考えてもいいくらいだろう」

「そうか。なら、凍らせるのは得策ではないか」

などと考えていると、急に飯田が告げる。

「そ、うか。轟君。こういつた策はどうだろ、う」

* * * * *

一方優姫・葉隠ペアは核のある部屋で話をしていた。

「いやあ、透ちゃんとかあ。楽しみだね」

「いやいや、相手つてやばいじやん！推薦組の轟君に入試4位の飯田君だよ！気合入れないと。

私、ブーツと手袋も脱ぐね

「うん。でも、天哉君の弱点はわかつてゐるから、問題は焦凍君だね。初めつから凍らせてくるかな…」

「だと私動けなくなつちやうや」

「だからさ。えい」

優姫は使い魔たちを大量に出す。全てが2mを超える大男であつた。

「彼らの肩に乗つて行こつか。透ちゃんは1人の肩の上で待機。彼らに確保テープは預

けとくからうまく利用して2人を捕らえて

「うん。分かつた。優姫ちゃんはどうするの？」

「私は……先制攻撃かな？」

優姫がニヤリと笑みを浮かべた。

優姫による悪巧みが着々と進む。

* * * * * * * * * * * *

『それでは第2試合、スタート!!?』

オールマイトによる開始の合図とともに勢いよく中へと入り込む飯田、とその時、

階が一瞬で凍りつく。これはどうやら優姫によるものだつた。すぐさま轟が氷を溶かす。

「飯田！進め！」

「すまない！」

飯田は氷が溶けるとすぐさま個性を使って走り出す。

飯田の最も得意とするのは短期決戦によるスピード勝負。それであれば誰にも負けない、今までの自信があつた。飯田はまず自身が走り回ることで核のある部屋を探索しつつ使い魔たちを倒していくことにした。

1階に核はない。そう判断し階段へと向かう飯田。

二階に上がる飯田の目の前には、一面の銀世界とともに、

"20人の優姫が立つて構えていた"

「なつ！」

飯田の弱点、それは想定外のことが起こった時に判断力が鈍ることだった。自身が想定してもいなかつたことを目の前にした時の飯田はただの人間と同じ程度にスピードが落ちる。そこを狙い、

「(つーかまえた!)」

背後から優姫が確保テープを巻きつけにはいる。

20人の優姫は全て優姫が作つた雪人形。本物は壁に張り付き機を伺つていたのだつた。

「(一人目確保!)」

優姫がそう考えていたその時、

「遅い！」

飯田が前方に飛び空中で1回転する。確保テープを振り切った飯田は優姫を目にも留めず走り去った。

優姫が考えていたことは概ね正しい。しかし、誤っていたのはそのスピードだった。ロータリーエンジンによつて通常のレシプロエンジンの数倍は速くなつた飯田を何の固定もせずに捕まえようとする、ことは愚策である。

とはいひものの、ロータリーエンジンは燃料を多量に使う。出来れば後半まで取つておきたい技であることも確かだつた。

「（くつ、此処でロータリーを使うとは。おれもまだまだだ）」

飯田は反省しつつ雪人形の間を走り抜ける。雪で地面は覆われているが、二階に核らしい大きさのものは見当たらない。飯田は3階へと駆け上がる。

「ふーん。そういうことね、焦凍君」

優姫は一人呟き、動き始める。

開始から此処までの時間、未だ30秒足らず。

* * * * *

飯田は3階へと駆け上がる。そこには優姫が出したであろう使い魔たちがこれでもかというほどひしめき合い、敵の来訪を待っていた。

「うおおおお！」

叫びながら襲いかかる使い魔たち。冷静に走つていく飯田。無駄な消費をする気はないようだ。倒している使い魔も最低限である。

「（1・2・3…：予想よりも多い。この階が勝負だ！）」

飯田は予定を変更し、使い魔を倒すことに専念し始めた。飯田が使い魔を蹴り上げると使い魔は雪となつて崩れ去る。飯田にその雪が多少かかるが、飯田はそれを無視して先へと進む。

使い魔たちは決して弱くはない。そちらのゴロツキであれば1人で5人同時に相手しても勝てるだろう。しかし、相手は飯田である。接近戦闘に特化した彼が使い魔に負ける可能性など微塵もなかつた。

その階に配置されていた使い魔も残り5人となる。

飯田が1人を蹴り上げる。使い魔が崩れる。1人の攻撃を避け、そのまま蹴る。使い魔が崩れる。1人の攻撃を避け、そのまま蹴りあげる。使い魔が崩れる。使い魔が残り2人となつたその時、

「えい！」

確保テープが背後からすごい勢いで宙を浮いて飛んでくる。

「（葉隱君か！）轟君！」

飯田が叫んだその途端、

飯田の周りが

“氷の世界へと変わった”

同時に4階から轟が現れる。

「やつと捕らえたか。飯田！上には使い魔はいなかつた！この階を越えろ！」

これを生み出したのは轟である。

轟は飯田が走つて1階を走るのを確認すると、すぐさま外から中の様子を伺つていた。二階で見えなかつたはずの優姫の確保を避けられたのは轟が外から見て優姫の姿を察知し、飯田に指示していたから。高速で走り回りながらも全ての部屋をチェックできたのはそもそも飯田が窓側の部屋をチェックせず、それらは轟に任せていたからだった。

中で飯田が搔きまわしつつ外から轟がチェックし、指示をする。彼らの作戦はこれが全てであつた。極めて単純で、誰もが少し考えれば思いつく。しかし、能力のある2人がやるだけでその効果は絶大になることを思い知らせた結果だつた。

「冬野くんはまだ捕らえていない。気をつけろ！」

飯田と轟はまず凍らせている葉隠に確保テープを巻きつけ、今度は慎重に部屋を見て回る。

「あらま、もう捕まっちゃったか。でも、まだまだ甘いなあ、2人とも」

開始から此処までの時間、約2分。

* * * * *

「ない、ない、ない、核がない！」

飯田と轟は慎重に、そして入念に3階から5階までの全部屋を見て回った。結果として、核はない。

2人は動搖していた。核があると考えていた3～5階ではなく、だからと言つて1、2階のチェックを怠つたわけではない。1、2階にあるとは考え難かつたのだ。

「飯田、1回落ち着け。きっと見逃してただけだ。4階からもう一度見て行こう。冬野に気をつけろ」
「分かった」

幸い時間はまだ十分にある。2人はもう一度見回ることにした。
しかし、時間があるのは優姫も同じであつた。

2人は5階から降りようとする。階段にさしかかつたその時、

"ドオン"

すさまじい音とともに

階段が崩れ落ちた。

崩れた階段は4階へ向かうものだけではない。1階まで吹き抜けのようになつてい
る。

「(不味い!) 飯田! 捕まれ!」

手を伸ばす轟に飯田が合わせようとすると、

"フウツ"

上から冷たい風が吹き荒れ、飯田は下へと叩きつけられてしまつた。

轟は空気を凍らせ、何とかその上に立つ。

「（くそつ、冬野か。やはりトリツキーなやつだ）

上を見ると優姫が天井に張り付き、笑みを浮かべながら宣言していた。

「油断しちゃダメだよ」

優姫がパツと手を離し落ちてくる。轟は優姫を凍らせようとするが、

轟の脇にある壁を突き破つて使い魔が轟を捕らえた。

「なっ！」

驚く轟を無視して、優姫は轟に確保テープを巻きつける。

「言つたでしょ。油断するなって」

轟は優姫の作つた雪の層の上に降ろされた。

そのまま優姫は1階まで降りて行き、飯田に確保テープを巻きつけに行つた。

その間飯田が何もしていなかつたはずはない。しかし、そこにも 優姫の罠は張られていた。

飯田は吹き荒れる風の中どうにか体制を整え、1階へと着地する。そこには優姫が作っていた2mの使い魔が約40人ほど配置されていた。

「（これらを相手している暇はない！）」

そう考えた飯田がロータリーエンジンで壁を登り轟の元へ向かおうとすると、

"ブルン……"

エンジンが止まってしまう。

焦つてエンジン部分を確認すると小さな雪の塊が大量に中に入り込み、エンジンをストップさせていた。

「（くそつ、これはもう動かない！）」

飯田の弱点はもう1つあつた。それは飯田の個性は排気口が塞がれると使えなくなる、ということだ。つまり、そこを突かれれば、彼はただの一般人。捕らえることは容易い。

飯田はあつという間に使い魔たちに押さえつけられる。排気口を雪に埋もれさせることは忘れずに。

「（動けない！）

飯田が脱出を試みていると、優姫が上から現れ、

「天哉くん。私たちの勝ちだよ」
確保テープが巻かれた。

『ヴィランチーム、WILLIWIN!!』

開始の合図から此処までわずか5分足らず。
オールマイトの宣言が優姫達の勝利を、そして、飯田達の敗北を告げた。

第7話

「さて、今回のMVPは！冬野少女だ！」

オールマイトの言葉に皆が納得する。

「轟と飯田もカッコよかつたけど、優姫は一番漢らしかつたしな！」

「いや、私女だから」

「冬野ちゃん。天井に張り付いていたのはどうやつていたのかしら？」

蛙吹の問いに冬野は答える。

「あれはね、ただ天井に指突っ込んだだけ。元々私は力はあるからさ、壁に穴開けるくらいならできるんだ」

「女版ハルクみたいだな」

「いや、ハルクなら壁壊しちゃうし！」

盛り上がる生徒達をオールマイトは静める。

「H I H I H I 皆そこまでだ。よく講評を聞くのも大切だぞ」

皆が静かになつたところでオールマイトが講評を続ける。

「まず、飯田少年と轟少年の連携は見事だつた！機動力を生かしつつも効率の良い動き

が出来ていてとてもすばらしいと思う」

実際2人の連携が取れていたからこそあのスピード勝負で飯田の力が遺憾無く発揮されたと言える。優姫が1回目に捕らえられなかつた事もあの連携が関係する事も考慮すれば、あれがいい判断だつたのだろう。

「しかし、だ！私はあれをいい動きだとは言えて、ベストな動きだとは言えないな。
さあみんな、どうしてだとおもう？」

皆が考える中真っ先に手を挙げたのは他ならぬ飯田であつた。

「はい、オールマイト先生。それは、今回の作戦に冬野君を捕らえるということを考慮していなかつたからです。我々2人は機動力で冬野君を振り切つて、葉隠君を捕らえることに重点を置きました。冬野君を捕らえる策を熟考できなかつたのが我々の課題です」「んー、いいね！よく考えられている。でも、それだけじゃないぞ！」

皆は頭を悩ませるが理由は出てこない。頃合いを見てオールマイトは答えを出す。

「それはな、皆。飯田少年と轟少年は、相手が核をきっと目に見える所に置いているだろうと仮定して動いてしまつたことだ。相手が何らかの策を講じて核を隠すなんて事を考慮しなかつた。あのままだとせつかくの機動力が無駄になることもあつたわけだ！
そこが君たちの課題だな！まあ、素晴らしい動きもあつたから精進していこう!!」

「はい！」

「…はい」

オールマイトの講評に飯田はいつも通りの返事をするが、轟はその言葉を素直に受け止められなかつた。

「（俺が、負けたのか）」

彼はN.O. 2ヒーロー『エンデヴァー』の息子であり、エンデヴァーに最高傑作、上位互換とまで言わしめる男であつた。それもそのはず、エンデヴァーは彼のような個性を故意に生み出すために相手の個性のみを目的とした結婚、いわゆる個性婚をしたのである。そのこともあり、轟はエンデヴァーから、死に物狂いの特訓を受けていた。となる事をきっかけとして生まれたエンデヴァーに対する憎悪は「戦闘で左側、つまり炎熱を使わない」という決意を生み出す結果となり、今までも氷結の個性のみで鍛錬してきただ。

そんな彼は、「氷結の個性のみでプロヒーローに、そしてN.O. 1ヒーローへと登りつめること」を誓い今までやつてきていたのだ。

その矢先にこの敗北である。轟の自信は失われつゝあつた。

「氷結の個性だけでは冬野のような俺よりも扱いに長けた奴がいる。俺はそんな奴と争つてN.O. 1ヒーローになれるのか？」

オールマイトが講評を続いている間、自問自答している轟に気づいていたのは、誰も

いなかつた。

* * * * *

こうして一部波乱な展開はありながらも、操司達を除く5試合は順調に行われた。

「それでは、最後の対戦だ！」

Kグループ vs 2-Aグループ！ヒーロー組となるのは！」

そう言つてオールマイトはどこからかコインを取り出し、コイントスをする。出たのは、裏。

「2-Aグループだ！よつてKグループはヴィラン組となる！」

それではそれぞれの位置へと集まってくれ！」

そうしてこの日のヒーロー基礎学最後の対戦が行われようとしていた。

* * * * *

操司達は話をしていた。

「先輩とか：大変そうだね」

「でもうちらだつて個性把握テスト1位と2位がいるんだ。負けないよ、きつと
「それ俺らにプレッシャー与えてないか？」

相手の個性が分からぬ。実際に社会に出て敵と戦うことになればいくらでもあり
得る事だ。まったく情報のない相手と戦える、そういうたった点では操司達は良い経験を積
めるのだろう。

「取り敢えず、分担しようか。僕は攻めよりもここでトラップ作つてたほうが良いよね」
「だな。俺は攻めるぞ。響香はどうする？」

「うちは…」

耳郎の個性は【イヤホンジャック】

耳たぶが長いコード状になつてゐる。左右それぞれ6mまで伸ばすことができ、最大
の直径は12m。

また、コードの先端のプラグを挿す事で微細な音を探知できる。分厚い壁があろうと
彼女には筒抜けである。

特製スピーカーブースを通じて自身の心音を爆音衝撃破として放つこともできる。

「守り、かな。攻めに行つてもついていけないだろうし」

「そつか。んじや、頑張ろう」

「てか、この会話も聞かれてる可能性あるんだよな」

「あ、そうか、と2人は考える。相手の個性が何か分からぬだけでここまで不利になるとは思つてもいなかつたようだ。」

「まあ、聞かれてたらしようがないって事で。んじや、作戦に移りますか」

「うち、2人の個性を聞いて1つ策を思いついたんだけどさ……」

耳郎の策に2人はニヤリと笑う。

「良いね、それ。それに少し着色しよつか」

「俺はオールマイトに伝えてくるぞ。許可取らないと」

3人は行動に移つた。

* * * * *

『それでは最終試合、スタート!!』

オールマイトからの合図により、試合が始まる。

入り口側、2—Aの2人はゆっくりと、そして堂々と歩いてきた。

「さて、行きましょ、鉤くん」

「俺の個性は掃討戦のほうが使えるんだけどな」

「文句言わないの。やるよ。私は左ね」

そう言つて玲実はメモ帳をポケットから取り出し、何かを書き始める。

『a p a g a d o s』

書いたのは、演奏記号。

玲実は全く音を立てずに歩いて行つた。

玲実の個性は【譜面実現化】楽譜に書いてある事を実際の行動として自動的に動かせる。例えば、『a p a g a d o s』は『消音で』という意味を持ち、それによつて足音を

無音にできる。

操作のためには操作したいものに書く必要があるが、自身を操作したい時には予め持っている紙に書くとよい。書いたものは一種のプログラミングのようなものとして、遂行するまで終わらない。

「はあ、俺も行くか」

そう言つて糸引も歩き出した。

* * * * *

『瑛九郎、右に1人きた。もう1人は感知できないから、外で待つてるか、そいつが背負つてるか何かだと思う』

『了解。んじや、俺は右のやつを止める。外の奴が行くかもしけんが、その時は頼んだ』

『任せて』

耳郎との通信を終えた瑛九郎は階段を降りる。右手には背中にかけてあつた錫杖が握られている。

「（人相手なら切るのはご法度か。棒術は剣術より苦手なんだけどな。）

さて、俺の相手はどつちだ。男のほうが強そうだつたからそつちが良いがその時は果たして捕らえられるのかが問題になるな」

などと考えつつ動くと、廊下の奥に1人の影が。

「よう、俺の相手はお前か。楽しくやろう」

先に声を発したのは糸引。2人は15mほど離れたところからお互いにゆつくりと歩みを止める。

「俺は糸引鉤だ。お前は？」

「鳥丸瑛九郎。胸を借りますよ、先輩」

先に仕掛けたのは瑛九郎。大地を思い切り蹴り上げ、スピードに乗つて糸引に錫杖を突き立てる。

「（速いな！）」

そう考えた糸引は身体を反らせそれを避ける。と、その錫杖が地面に向かつて叩きつ

けられた。

ドオン

錫杖が床に当たり、床板を碎いた。瑛九郎の持つ錫杖はサポート会社特製の錫杖で、優姫がもし振り回したとしても壊れないよう頑強にできている。その攻撃に対し、糸引は手足をフルに使って横に避けていた。

「凄いな、俺らが1年の頃は相手の咽喉元に突きをかますようなクレイジーな奴いなかつたぞ」

「そうですか？俺は今のを避けた先輩に人外という言葉をプレゼントしたいです、ね」お互いに賞賛（？）しあいながらも、瑛九郎が攻撃し糸引が避ける、という構図は変わらなかつた。

しかし、初めと変わっているものはある。

それは、2人の表情だ。

2人は戦いを進めれば進めるほどに笑みを浮かべるようになつていた。

2人は戦いに悦びを見出している者、つまりは〈戦闘狂（バトルジヤンキー）〉である。ヒーローとしての振舞いはありつつも、心の底では強敵との接戦を夢見ている。彼らにとつてこの戦闘は夢のようなひと時であろう。

瑠九郎は戦いを愉しむ一方である違和感を抱いていた。

「（こ）いつ、まだ個性を使つてない。なのに俺の攻撃を避けてる」

焦り始めた瑠九郎が錫杖を横に薙ぎはらい、糸引は距離をとる。

「瑠九郎。お前、強いな」

糸引からの声掛けに不思議に思いつつも瑠九郎は耳を傾ける。

「だから、俺も今から個性を使うよ。

頼むからさ、

"死ぬなよ"」

そう言つて糸引は両手に手袋をはめる。糸引が右手を一度横にふるうと

"壁に5本の亀裂が入つた"

いや、亀裂というには余りにもまつすぐで、余りにも細い。あたかもそこに線を引いたかのような痕が残る。

「(どんな個性だかは知らんが、遠距離からの攻撃のようだな。早めに攻めた方がいい
か)」

瑛九郎はもう一度大地を蹴る。最初の攻撃はスピード特化の直線なのに對し、今回は壁、天井、さらには急な方向転換も加え、相手に捕らえさせない事を重視した動きをする。

「（神足通！）」

瑛九郎は糸引の背後へとまわり、錫杖を突き立てる。

その時、

「甘い」

糸引は左に避け、右手を錫杖の下から上へとくるりと回す。すると、

パキン

錫杖が真っ二つになつた。

糸引はそのことに目もくれず今度は左手を瑛九郎の顔面に向けて振り下ろす。
「（この手は、ヤバイ！）」

「なあ、瑛九郎。俺の個性、分かつたか？」
瑛九郎が神足通を使い元いた場所へと戻るが、仮面は目元から上が切り落とされていた。

「なあ、瑛九郎。俺の個性、分かつたか？」

糸引の問いに瑛九郎は答える。

「はあ、はあ、大体は。」

「その指先から何本か硬い糸を出してますね。でも、それだけで俺の錫杖を真つ二つにするなんて、考えられない」

瑛九郎の答えに糸引はニヤリと笑う。

「惜しいな。糸を使ってるって所はいい。でも、その錫杖を切ったのはただの糸だぞ」

そう、糸引鉤の個性は糸の生成ではない。物質の【硬化・銳利化】が個性だ。糸 자체は手袋に仕込んでおり、それを銳利化させることで、壁の亀裂や錫杖の破壊をしていた。「それで俺の錫杖を切ったんですか。嫌な個性ですね」

「それは褒め言葉として受け取つておくぞ」

「実際褒め言葉ですよ」

軽口を叩いてはいるが、瑛九郎は必死に打開策を考えていた。

(あの糸を避ける事は至難の技だ。そもそも糸が透明なのかよく見えん。せめてあの糸が見えるなら……)

ん？可視化か）

「んじや、瑛九郎。俺が言われてんのは索敵必殺なもんでな。そろそろ行くぞ！」

「（くそ、耐えられるか）」

2人の戦いは激化する。

* * * * *

一方操司と耳郎の2人は戻を仕掛け終え核の前で待つていた。

「さて、あつちは瑛ちゃんに任せて、こつちも気を引き締めていきますか」

「ねえ、向こうのうち2人目の動きが全くないのはなんでだろ」「探知できないように動いてるんじやない？足音聞こえなければ一緒でしょ」

操司の考えは合っていた。実際に今尚玲実は動き回り、核を探している。

「なるほど」

「だから、僕の予想では、まもなく来ると思うんだけど…」

と、話している途中で操司が何かを感じ取り、ドアの方を睨む。

「解除」

女性の声とともに、

コツン、コツン、

という靴の音が聞こえる。

「ほら来た。響香さんは後ろで構えてて。いざとなれば僕ごとやつていいから」

「わかった」

2人がドアの方を見て構えていると、

床を突き破つて操司の足が掴まれた

「うおつ」

なす術なく下半身をズリ落とされる操司。耳郎はプラグを既にコスチュームに刺しており、後は鳴らすだけにしている。

と、そこに玲実が走り込んで来た。

耳郎が鳴らそうとするが、

「響香さん、まだ！」

操司の言葉に止まる耳郎。

と、玲実がなぜか急に立ち止まり後ろに跳んだ。

「危ない。中々エグいのね、君たち」

「勝つためには手段は選ぶなって教えですから」

操司は地面に干渉を起こし、即席トラップを仕込んだ。踏めば足元から拳がとんでく

る、という簡単なものが、威力は相当なため、油断していると氣絶させられてしまう。

操司は床から抜け出し、玲実に話しかける

「てかなんで気づいたんです？」

「ん？ 個性のおかげだと思う？」

「質問返しはするいですよ」

とは言いつつも個性の影響だと考えていた。

実際、玲実が罠に気づいたのは個性のおかげであつた。『*and achtig*（慎重深く、敬虔に）』と予め書いており、そのおかげで周りに対する観察眼が異様に高くなつていたのだった。

「そこのイヤホンガールは音を出すタイプかな？ 指向性はあるのかないのか。

そして、君の個性はなんだ？ 罠をすぐに張れるような個性なんて中々ないよね。地面のそ…』

玲実が話している途中で操司は玲実の懷に潜り下から蹴り上げる。それを玲実は左手で掴んだ。

「あつぶな…」

操司は玲実の言葉を無視して床に手をつきもう片方の足で横に払う。その姿はまる

で某海賊漫画のコツクのようであつた。操司はコツクとは違ひ女でも容赦ないのだが。

その蹴りを玲実は右手で抑える。

「血気さか？」

話そうとする玲実を無視して操司は土に干渉を起こす。するとついてる手の周りからB.B.弾程度の大きさの土の弾が大量に飛び出す。これは流石に避けようと思つたのか、足から手を放しバックステップしながら手で払おうとする。その途端、操司がその弾への干渉を急に止める。弾は崩れパラパラした砂となり玲実の視界を塞いだ。

操司は土で作った棒で玲実のいた所を横一文字に振るつた。

（手応えはないか）

操司は追撃せずに核の近くへと戻る。

土埃が晴れると、そこには誰もいなかつた。

「操司つて、すごいね」

「響香さんも鍛えればすぐにできるようになるよ」

何も動けなかつた耳郎は感嘆の声をあげるが操司はまだ油断していなかつた。

「なんか、うちの個性ばれてるっぽいけど
不安げな耳郎に操司は淡々と話す。

「だとしてもうちの最終兵器は響香さんだから。音を止められる奴は恐らくいない筈。何があつてもいいように構えておいて」

「…分かった」

そう言つて耳郎は再び構える。

（接近戦は不利か。あれに対応されるのであれば、多分僕ではかなわない。なら、遠距離で牽制しますか）

操司はそう考え、コートの裏にそつと手を伸ばす。

コツン、コツンとまた靴の音が聞こえてくると、玲実は今度はゆっくりと中に入ってきた。

「あぶないなあ、もう

「どこ行つてたんです？僕との楽しい遊びを放つたらかして。嫉妬しちゃいますよ」

「話す隙も与えてくれないのによくも楽しい遊びって言えるね」
 「そりやあ嘘ですから」

おい、と玲実は苦々しく突っ込む。

「まあ良いよ。私は鉤君みたいに

△戦闘狂△じゃないから」

（こ）で、瑛九郎から連絡が来る。

（今かよ。まあ、あつちもきつそうだし、しようがないか）

「響香さん！これ持つて瑛ちゃんの事助けに行つて貰える！至急頼んだ」

「分かった!!？」

操司は耳郎にあるものを持って行かせようとする。

「あら、私がそんな簡単に通すと思う？」

「そのための僕じやん！」

そう言つて操司はコートを翻すと、コートの裏から大量の白いものが。

「なにこれ」

「僕監修サポーツ会社オリジナルの拘束＆戦闘器具。合計500枚あるから、気をつけ
て」

そう告げると同時に

玲実の目の前を白い脅威が覆い尽くした。

残り時間3分をきる

第8話

「すげえ、レベルが違う」

モニタールームで誰かが呟いた。画面の右側では糸引と瑛九郎の戦いが映されていました。もうすでに彼らは常人の目で追えるスピードを超えており、残像がちらつくまでに及んでいる。

「目で追えない…」

「追える限りでは、どんどん烏丸さんが傷ついておりますわ」

「瑛九郎も強えけど先輩の方が上手だつてことか…」

「あ、こっち！」

誰かが指差した方では丁度操司が自身の武器を取り出しているところだった。

「なんじやありや、確保テープか？」

「それにしては多くないか？」

「でも、あれを避けてる先輩つて…」

画面を見る限り操司の武器は縦横無尽に駆け回っているのだが、玲実はそれらを上手く躱し、払い、掴んでいた。

「ケロ、耳郎ちゃんが部屋から抜け出したわ」

「ん？ なんか持つてるぞ？」

「……もう、よく分からん！」

あまりの混戦状態に一部は混乱し始める。

「H A H A H A！ この戦いは予想以上にハイレベルになってしまったからしようがないさ！」

さて、それでは皆に1つ質問をしよう。耳郎少女はおそらくあれを烏丸少年に渡しに行くのだろう。さて、どんな物を渡すと思うかな？」

「そりやあ、瑛九郎の武器とか？」

「いや、それは違うと思う。烏丸君は元々棒術や剣術が得意。既に持つてるものを渡すわけではない筈だ」

「なら飯田君はなんだと思う？」

「それは……」

「さて、それじやもう少し見ていいようか！」

オールマイトの問いの答えを考えながら皆はモニターを食い入るように見ていた。

* * * * *

その頃、瑛九郎の戦況は防戦一方であつた。

はじめは相手の手の動きと糸の動きが連動していると考え、手の動きに合わせていたのだが、糸のたるませ方や硬化・銳利化させている糸がどれかの判別ができなかつた。結果として現在では糸が身体に当たるその痛みに反応して動く、いわば後手に回つていた。

「ほらほらほら、攻めてこいよ！ 守んなよ！ そんなつまんねえ漢かお前は！？」

「先輩に俺の全てを見せたつもりはない」

食い込みつつある糸から避けるが、瑛九郎の身体は少しづつ裂けていく。

2人が距離をとつた。

「（早く来い。これ以上耐えるのは辛いぞ）」

「…すまんな。玲実から呼ばれた。多分さつさと終わらせろつてことだ。だから、これが、さい」「瑛九郎よけて！」…」

重なつた言葉と共に現れたのは、耳郎だつた。耳郎は既にプラグをコスチュームに刺しており、瑛九郎が避けるとすぐさま爆音を鳴らす。糸引は読んでいたのか斜め後ろに下がつて避けた。

「指向性があるのも考えもんだな。避けられることもある」

うるさい、と耳郎は一喝し、瑛九郎に持つてきたものを渡す。

「ありがとう。後は核の方に行つてくれ」

「分かった。待つてるよ」

「おう」

瑛九郎はまた相手と向かい合う。瑛九郎の右手にはバケツのような容器が、左手にはボールが収まっていた。糸引は瑛九郎の持つている物に興味を抱いていた。

「なんだそれ」

「使つてみればわかります。それより、今度はこっちから動きますよ」

瑛九郎の宣言に糸引はニヤリと笑う。覚悟を決めた男との戦いは糸引にとつて何よりも嬉しい事であり、その相手が強者である事は糸引にとつての悦びであつた。

静寂の時間はほんの僅か。

瑛九郎は短く息を吐きながら猛スピードで前進する。初めの攻撃と同じように直進

運動だ。

糸引が左手を振るう。瑛九郎はその進行方向に向けてボールを投げる。すると、
ビシヤツ

ボールが破裂し、中から液体が飛び出てきた。

「うお、なんだこれ」

糸引が躊躇つている間に瑛九郎は懐へと潜り込む。左手を振るつてくる瑛九郎に対
し糸引は服を硬化した。その時、

ピシヤツ

またもや液体が飛び散る。

糸引が左手を振るおうとすると、瑛九郎はバケツのみを残して神足通で距離をとつ
た。

バケツは糸で切られる。

ピシャツ

また液体が大量に飛び散った

「(この色、この臭い) カラーボールとペンキか?」

糸引は瑛九郎の持っているものを見破る。

「そう。先輩の糸は見えなかつたから怖かつた。見えれば十分対応できるんですよ」

糸引は手元を見ると、糸が黄色、赤、緑とカラフルに染色されていた。

「透明じやくなつたか。ま、しようがない。正々堂々とやろう」

糸引の言葉に反応し、瑛九郎は腰に下げていた2本の刀を抜く。

「本気でいきますよ」

2人の間には静寂が訪れる。勝負は一瞬。お互に感じていた事であつた。そして、

"ブオオオオオン"

突然の轟音に糸引は耳を抑える。背後を見ると、先ほど瑛九郎にカラーボールを渡した少女、耳郎が立っていた。

その隙に瑛九郎は

「神足通！」

一瞬で糸引の近くに寄り、確保テープを巻いた。

残り時間1分余り、

糸引鉤、確保完了。

「相手は透明な糸を使う。助けが欲しい」

『相手は透明な糸を使う。助けが欲しい』

という事だけだつた。そこから操司が耳郎に渡したものは前述の通り、カラーボールとペンキ。それに、耳郎に対して「瑛九郎を助けに行つてくれ」と伝えたのみ。後は耳郎に全てを任せていた。

耳郎は悩んだ。そもそも相手は瑛九郎でさえ勝てない相手。どうすれば自分は役に立てるのか、そして勝利に貢献できるのか。

そして考えついた事が今行つた作戦だつた。道具を渡したらすぐさま戻るふりをして階段を上り、1つ上の階を通つて相手の背後に回る。その間瑛九郎はどうにか瑛九郎と糸引の配置を変えないよう留意する。後はタイミングを見計らつて背後から攻撃。隙をついて確保テープを巻くだけだつた。

糸引は思いもよらない結果に不服そうにしている。

「瑛九郎。お前、戦う気は無かつたつて事か。俺との戦いは眼中にないつて事か！おい

！」

思わず熱くなる糸引。彼に瑛九郎は告げる。

「先輩と戦うのは楽しかつたです。やめたくないほどに俺の心は動かされました」「ならよ「でも！」…」

「勝つ事が第一、それだけは変えてはいけないんです。敵との戦いを楽しんで負けたらそれこそ本末転倒。

今の俺では先輩に勝てないとわかつた時点で助けを求める事にしました。それが、仲間だと思うので」

糸引は瑛九郎の事をじつと見る。瑛九郎の目は真っ直ぐに、そして正直に糸引の事を見つめていた。

ふう、と糸引はため息をつく。

「なら良いや。今度俺との自主練に付き合え。この続きやるぞ」

瑛九郎は快活に笑みを浮かべ

「はい、よろしくお願ひします」

とだけ伝えた。

そこで耳郎が瑛九郎に声をかける。

何かと瑛九郎が振り返つて見ると、呆れたように笑いながら、手をあげていた。瑛九郎はキヨトンとしている。

「ハイタツチ、しょつか」

さらに呆れる耳郎に瑛九郎は若干気まずそうに

「おう」

と返事をし近寄ろうと動き始める。

シユルルル

瑛九郎に確保テープが巻かれた。

「は？」

「まだ終わってないよ」

背後には玲実が。手にはペンを持つている。

耳郎が爆音を鳴らそうとするが

『estint（非常に弱く）』

玲実が空中にパンを踊らせる。

耳郎による爆音は全く聞こえなかつた。

狼狽える耳郎の懷に入り込み脇腹に拳を食い込ませる。そのまま耳郎の首元を鷲掴み、押し倒した。派手に倒れ込むが音は聞こえない。

「はい、かーくほ」

玲実が耳郎の脚に確保テープを巻き、

『ヒーローチーム、WIIIIIIIN!!!』

放送が鳴り響いた。

* * * * *

時は少し遡り、操司と玲実のいる3階の一室。操司は自身の武器を操り玲実を牽制していた。

玲実はこれを避けつつ操司に尋ねる。

「なにこれ、紙？」

「それだけならサポート会社に頼みませんよ」

「です、よねー、と言いつつ背後からの紙を軽々と避けていた。

サポート会社に頼んだもの、それは3種類あつた。1つはただの紙、1つは粘着テープ。そして、もう1つはタングステンを中心とした特殊合金。これらは全て白に統一され、5cm×20cmに揃えられていた。

これらを操司は操つている。更に操司は個性によつて合金であろうとも紙と同じようになびかせる事もでき、見ただけでは区別ができるになかった。

「なんか避けんのつらくなつてきた」

「そうじやないと困ります、よ！」

その時玲実の足に粘着テープが貼り付く。一瞬の間だが動きを止められる玲実。それを見逃すほどに甘い操司では無かつた。合金と白い紙計350枚が全方位から襲い掛かる。

「(とつた！)」

そう思つた時、

『allегроconfuoco（燃え盛るような熱を持つて急速に）』

空中に向かつてペンを走らせる。すると、

玲実の周りが炎で包まれた。

あまりの熱量、眩しさに思わず操作を止め目を覆う操司。まだパチパチと燃える音がある中玲実が迫る。

「やばい！」

避けようとする操司、しかし、背後に避けるスペースは無かった。とつさにしゃがむが、玲実がペンを空に走らせる

『tonante（雷のように）』

途端、操司の身体に電気が通ったかのような衝撃が襲う。

「がっ！」

玲実は操司に確保テープを巻こうとするが、操司はなんとか横に避ける。操司は玲実と距離をとつた。

「惜しいなあ」

「はあ、はあ。簡単に負ける気はないですよ」

「うん、強いよ、君は。でもさ、もう君の負けだよ」

玲実の言葉に操司が不思議に思うと、急に心臓の付近が痛み出す。

「(なにこれ。よく分かんないけど、苦しい)」

「辛いでしょう。

それはね『schmezlich』って言つて『苦しみに満ちた』って意味なんだ。君に電撃が走つた時に書いといたよ』

玲実が走り込んで来る。操司はあまりの苦しさにそれに対応できなかつた。

「はい、かくほ」

甘野操司、確保完了。

「んで、これに触れれば勝ちだよね」

玲実は核に触れる。この時点でのヒーローチームの勝利が決まった。

筈なのだが、

「あれ？ オールマイティ先生？ 核に触れましたよー」

放送がならない。玲実は不思議そうな顔をするが、理由はすぐに分かつた。操司がニヤリと笑っているのだ。

「まだ終わってないですよ、先輩。だつてそれ、僕が作った偽物なんですから」

作戦会議の時点で耳郎が考えた案が

『核を操司の個性で複製する』

という事だった。オールマイトに許可を取つたため、オールマイトと3人だけは本物の核が何処にあるか知つている。

「まじか、私結構無駄な戯いしてたんじやん。上の階先に探せば良かつたよ」「頑張つて探ってきてくださいよ、先輩」

まだニヤニヤしている操司を見て玲実は一人得心する。

「これが偽物だつて事は、上の階にも偽物があるんでしょう。うーん、時間の無駄だな」この時点で残り1分を切つていて。そしてまだ調べてないのは4～6階の3フロア。時間内に探し切る余裕は玲実には無かつた。

玲実は面倒臭そうに溜息を吐き、操司に告げた。

「ならしようがない。彼らの事捕まえてくるよ」

「時間はないですよ？」

「なに言ってんの。去年の雄英高校体育祭準優勝者をなめてもらつちや困るよ」

ニヤリと笑つて玲実は懐からメモ帳を取り出す。書いたのは、

『apagados（消音で）』

『molto presto（非常に速く）』

の2つ。

途端に玲実は操司の目の前から風のように去つていってしまった。それから約20秒後

『ヒーローチーム、W I I I I I I I N ! ! !』

放送が鳴り響く。

「いや、速すぎでしょ」

操司の呟きには何故か今までの様な力がない様に思えた。しかし、それを聞いていた者はオールマイトただ一人であつた。

* * * * *

オールマイトによる講評も終わり、全員が初めに集まっていた場所に集合する。

「お疲れさん！緑谷少年以外は大きな怪我もなし！初めての訓練にしちゃ上出来だつたぜ！」

緑谷は既に保健室にて治療を受けていた。他の生徒達は擦り傷や切り傷など小さな

怪我はあつたが、それは戦闘訓練のためしようがない部分もあるのだろう。
オールマイトはテンポよく続ける。

「私は緑谷少年に講評を聞かせねば！ それじゃあ、皆は着替えて教室にお戻り——
！」

そう言つて、オールマイトは走つて行つてしまつた。

「んじや、俺らも戻る」

「また一緒にやる時はよろしくね」

糸引と玲実も戻つて行つてしまつた。2人ともまだやる事がある様だ。

皆が着替えをしている時に、反省会をしよう、という話になつた。教室に戻つてから
も盛り上がるA組。その中で浮かない顔をしていたのは爆豪と轟、それに操司の3人人
だけだつた。

爆豪は着替えを済ますと何も言わずに教室を出て行つてしまつた。

「悪いい、俺も帰るな」

「あ、ちよつ、おい焦凍り!?」

轟もそれに続いて教室を出てしまった。

「僕もそろそろ時間だから帰るね」

「え、おい、操司もか」

操司は荷物を持って教室から出た。玄関に着くと轟と出会う。

「やつほー、轟くん。お疲れさま」

轟は操司を一瞥し、

「お疲れ」

とだけ言つて、それ以降話さない。気まずくなつた操司が何か話そうとすると、後ろから緑谷が走つて2人を追い抜く。2人が緑谷の走つて行つた方を見ると、そこには爆豪と緑谷の2人が何やら話していた。

轟は2人を無視して帰ろうとするが、操司がそれを止める。

「2人の話に水を差しちゃいけないよ。少し待つてようか」

「…分かつた」

特に話し声は聞こえてこなかつたが、だんだんヒートアップしてきたのか声が届く様になる。

「…………君に勝つよ！」

「…………こつからだ！こつから、俺は…………ここで1番になつてやる!!」

2人の言葉が轟と操司の胸に刺さつた。

かたや推薦入学者として、かたや入試1位としてそれぞれ自信、プライドがあつた。ましてや戦闘に関してはどうちらも鍛錬を重ねていたために自分が負けるなんて事考えてもいなかつた。自分が1番だ、その考えが今日崩れ去つたのだ。更に言えば、2人と

もN.O. 1ヒーローになる事への決意が強い。そして、そのためにもここで負けてはいられない、という想いがあつた。

2人とも少し種類は違えど似た様な壁にぶつかっていたのである。

そして、それは爆豪も同じだつた。自分が負けるはずがない、その想いが人一倍強い爆豪にとつて今日の敗戦は堪えるものだつただろう。

しかし、彼はそれを自ら、2人の目の前で、克服した。

「ねえ、轟くん。また明日も頑張ろう」

「……ああ、そうだな」

これが入学2日目の1—Aの記録である。

U.S.J.編

第1話

戦闘訓練の次の日の朝、操司達が登校すると、高校の入口前にたくさんの人だかりができていた。

「何あれ」

優姫の言葉に2人は答えられず、さあ、と言いつつただ首を横に振るだけにとどめた。しかし、何なのかはすぐに分かつた。いや、この時は思い知らされた、といつたほうが正しいのだろうか。

その中の1人が操司達の事を見つける。すると、すぐにその人だかりは操司達の事を飲み込んだ。

「あの、オールマイトについて一言！」

「オールマイトはどんな授業をしているの!?」

「オールマイトが教師として働いている事に対してもう思つてます!!?」

荒れ狂う人の波とともに、言葉の奔流が操司達に押し寄せる。

「オールマイトは良い人ですよ」

「普通の授業です。他の先生と変わりません」

「僕らがオールマイトの行動をどうこう言える立場じやないでしょ。オールマイト
だって1人の人間なんだから。」

丁寧に返答していく坂九郎と優姫だったが、操司は苛立っていた。操司はマスコミの
事をマスゴミと言つているくらいには嫌つているのだ。

そもそも世論というものが本当に世間一般としての総意なのだろうか。マスコミの
報道が激しいと世間はマスコミの扇動するように動きがちだ。だからこそ報道機関は
公正中立な立場をとるべきであるにも関わらず、マスコミは、大抵の場合、ある一方の
ことを猛ブツシユする。操司はそれが気に食わなかつた。

「そもそも貴女達は「操司！お前は喋るな！」…」

どうにかして人によつて出来たビックウェーブを切り抜けた3人。教室に入ると皆
がマスコミの話をしている。どうやら1—Aの生徒は皆総じてあの波に飲まれたよう

である。

程なくして相澤が教室に入り朝のH.R.が始まった。相澤はまず前日の戦闘訓練について講評をする。爆豪の行動について、そして、緑谷の個性について軽く触れていた。

「さて、ここからがH.R.の本題だ。急で悪いが今日は君らに……」

"本題" "急で" の言葉に皆が反応する。なんせ言つたのはあの相澤だ。入学初日に入学式をすっぽかしていきなりテストを強いる、しかもそのテストの最下位は除籍というクレイジーな男だ。皆は気を張り巡らせていた。そんな中相澤は口を開く。

「学級委員長を決めてもらう」

『(学校っぽいのきたあーー!!??.?)』

クラス全員の心が1つになつた瞬間だつた。

そこから教室は混乱に陥つた。数人を除けば皆委員長をしたいのである。やりたい
という思いばかりが先行し、声を上げる者は多かつた。そこに飯田が切り込む。
「静肅にしたまえ！ 多を牽引する重大な仕事だ！！やりたい者がやれるようなものではな
いだろう!!!」

特に一人ひとりの個性が強いヒーロー科においては尚更だ。

「周囲からの信頼あつてこそその責務！ もし民主主義に則り皆で真のリーダーを決めるの
であれば!!!」

飯田は迫力たっぷりに続ける。漫画であれば背後からゴゴゴゴ、といった文字が限り
なく太く描かれるだろう。

「投票で決めるべき議案!!!!」

しかし、皆の考えは1つになつていた。それは、

「いや、お前も手そびえ立つてんじゃねえか！」

飯田の心境として様々な思いが渦巻いていることを操司は感じ取った。

それから先はスムーズに進んだ。結果としては緑谷が3票、飯田と八百万が2票であつた。この時点で緑谷が委員長となる事は確定した。残るは副委員長であつたが、飯田が再投票だとか、決選投票だとか言つていたものの相澤から面倒くさい、との理由で却下され、じゃんけんで決まった。結果、副委員長は八百万が務める事になる。

飯田は後にこの時の事を振り返り、自分の出したパーの事をこの上なく恨んだと言う。

* * * * *

操司と琰九郎、それに轟の3人は昼食を早めに済ませ、2—A教室へと向かつていた。琰九郎は糸引との続きをため、操司と轟は玲実に教えを乞うためであつた。

初めは轟は居る予定ではなかつたが、操司に誘われて今に至る。最終目的は違えど同

じものを目指す仲間として切磋琢磨したいという操司の考えであつた。

「お邪魔しまーす」

3人は2—A教室へと入る。広さは1—Aと同じであるにも関わらず机は2つしかない。どこか淋しさも感じてしまうような光景であつた。

「おう、きたか」

「あれ、轟くん？も一緒になんだ」

2人は待ち合わせ通り教室で待つていた。糸引は見た目と言動に似合わずきちつと着こなし、玲実は緩く着ていた。戦闘訓練では後輩達を圧倒していた2人も、制服を着ているところを見るとなんだかまだ雄英の生徒なんだと意識させられる。

「んじゃ、俺らはトレーニングルームに行くか」

「はい、宜しくお願ひします」

「そう固くなんなつて」

はは、と笑いつつ2人は教室から出て行つた。それから玲実が口を開く。

「さて、私たちもやろつか」

そう言つて玲実は教室の隅の方、と言つても教室の8分の1程度にはなりそうなほど
の山なのだが、に重ねてあつた資料の束を取り出す。

「これは……」

轟の疑問に玲実が答える。

「これは私がこの17年間で思い付いた戦術とかそれをした後のリフレクション」

「この量全部ですか!?」

「うん、そう」

2人はあまりの量に驚愕する。轟は適当に一冊取り出して見てみた。そこには、その
日にやつた戦術、その手応え、結果、反省、改善方法などがびつしりと書いてあつた。

「君ら2人に足りないのは、まずは臨機応変な対応。そのために必要なのは経験値だけ
ど、あいにくそんな時間をかけるならもつと他の事したいつても思うよね。だから、私
の経験を全部読むことで疑似体験して。んで、それに自分の経験を上書きする。それが
私の思う1番強くなれる道」

2人は玲実の話をきちんと解釈し、咀嚼し、理解し、自分のものにしていた。

「というわけで、君らにはこれから2週間でこれを全部読んでもらいます」

『へ？』

今度こそ2人は絶句する。

「ちゃんと脳内でシミュレーションしながら読んでね。わかんないところあつたら聞いてくれれば教えるから」

「ここ」から読み始めて、とだけ言い残して玲実は自身の学習に入る。

「ねえ轟くん。2週間でできると思う？」

「…………やるしかねえだろ」

2人は少しずつ読み始めた。

警報が鳴り響き、操司達の訓練は終わってしまった。警報が鳴った原因がマスコミにすることを知つて心の中で怒る操司と、それを見て若干固まっていた轟、2人の光景に

思わず笑つてしまつていた玲実の3人が織りなす世にも珍妙な空気が2—A教室内に漂つっていたのだが、この話とは直接関係ないために割愛させて頂こう。

* * * * *

同時刻、マスコミが去つた後の雄英高校校門前。そこには校長の根津、保健医のリカ・バリーガール、教諭のミッドナイトと13号がいた。目の前には何故かボロボロに崩れ去つた肛校門のセキュリティが。4人とも険しい顔をしている。

「ただのマスコミにこんな事ができるのかい？」

根津の問い掛けに誰も答えないが、その答えがNOであることは誰もが分かつていた。

「邪な者が入り込んだみたいだね。あるいは宣戦布告の腹積りか……」

彼らは重苦しい顔つきで瓦礫を睨み続けていた。

しかし、彼らは気づいていない。このセキュリティを破壊した者が、雄英に対して、またはヒーロー達に対して憎悪の念を抱いている者が、そしてヒーロー達を抹殺しようと/or>している者が彼らのすぐ近くにいたことに。

「ねえ、弔くん。やつぱりその個性の組み合わせはずるいなあ。使い勝手が良い」

「うるさい、源氏。お前の個性はここでは使い物になんないのになんで来た」

「はいはい、まずはそのことは良いでしょう。先生が3人で行けって仰つてたのですから」

「はあ、もう良い。目的は達した。まずはlistステージクリアだ。帰るぞ、源氏、獅童」「はーい」「了解しました」

止まっていた世界が今複雑に絡み合う。

第2話

マスコミの侵入騒動が収まり教室に戻る。午後は各種委員会活動やクラス係などを決めた。その際、緑谷が、自身は委員長を降り、飯田が新たに学級委員長に就任することを提案した。どうやら飯田は騒動を収めるのに貢献したらしい。皆も賛同したため、飯田が新たに学級委員長に、八百万が副委員長に就任した。その際優姫が

「良いんじゃない？ 天哉くん、眼鏡だし」

と言ひ皆に突つ込まれていたが、若干数名は大きく頷いていたという。

* * * * *

次の日の昼も3人は2—Aに通つた。この日は瑛九郎と糸引の手合わせはなかつた様で、3人揃つて玲実の書いた書類を読んでいた。と言つてもただ読んでいただけでは

ない。読みながらも身体を動かし、実際に動きを模倣していた。
「ここで、操司がある部分に目をつける。

「玲実先輩。これって普通じゃなかなか経験出来ないことですね。なんかあつたんですか？」

操司が指していたのは29冊目の3ページ目、タイトルは「多対1、1対多での動き方part1」だった。相手が1人の時、または自分が1人の時にどう立ち振る舞うのかがベストなのかについて書かれている。

「うん、そうだね。訓練ではそんな事しないよ。だからこそ考えておかないと」

そもそもこれらを書く目的というものは自身の考え方や経験を言語化することでどう動くかを明確化し頭に染み込ませること。訓練外の事であつても例外ではなかつた。

「なんだ。てつきり先輩が誰か相手に無双したのかと」

「そんなことできるほどの実力はないよ」

ははは、と談笑する5人であつた。

午後の授業はヒーロー基礎学。今回はオールマイトではなく相澤が教室に入ってきた。

「さて、今日は俺とオールマイト、後もう1人の3人体制となつた。更に、君らはもう関わつたことはあると思うが、2—Aの2人にも同行してもらうことになつていてる」

相澤の言葉に何か引っかかる操司だったが、周りは何も気にしていない様だつたため無視して話を聞いていた。

「せんせー、今日は何をやるんですか？」

「今回は、水難・災害なんでもござれの『救助訓練』だ」

相澤の返答に皆が嬉しそうに騒めく。それは当然のことだろう。と言うのも、一部の武闘派ヒーローを除けばトップヒーローというのは皆救助という点で目覚ましい活躍を遂げているからだ。

オールマイトは動画でよく取り上げられているが、大災害から多くの人を救つた事がネット上に大々的に取り上げられ、それからトップヒーローとしての道を歩んでいた

し、N.O. 4ヒーローのベストジーニストも新人ヒーローに救助の大切さを教えてい
る。ヒーローとして代表される仕事について教わる事は誰であつても嬉しいことであ
ろう。

「少し離れたところにあるため移動はバスで行う。着替えを済ませて5分後に校門前集
合だ」

『はい！』

相澤が教室を出たのを皮切りに皆が準備を整え、直ぐにバスへと乗り込んだ。バス内
では皆の個性について盛り上ることがもあり、楽しいひと時となつた。

* * * * *

一行は目的の場所に到着する。

バスを降りると、そこには1人のヒーローが待つていた。

「ようこそ皆さん」

「わああ！スペースヒーロー13号だ！」

スペースヒーローの13号である。彼は【ブラックホール】という、指の先にブラックホールを創り出しなんでも吸い込んでチリにしてしまう個性であらゆる災害から人々を救い出しており、紳士的なヒーローとして名高い。

13号に案内され、一行は会場の中に入ると、操司達の目の前に広がってるのは遊園地の様な光景だった。誰かが、

「U.S.Jみたい！」

と言つてゐるくらいである。

「水難、火災、土砂災害、暴風、etc. あらゆる災害を想定して僕がつくつた演習場。

名付けて、

ウソの灾害や事故ルーム!!!!!!

本当にU.S.Jであつた。訴えられる事はないのだろうか……

そんな話をしながら、操司は周りを見渡すが、来ると言つていたはずのオールマイト

の姿が見えない。

(相澤と1—3号が何やら話をしているあたり、トラブルがあつたのかかもしれない)
などと操司が考えていると、1—3号が演習を始める前に心構えについて話を始めた。
曰く、個性をどう使うか、何のために使うかよく意識してほしい、とのことだ。

最後まで丁寧に話をする1—3号の言葉に感動し、拍手喝采を浴びせる1—Aの生徒
達。そんな事もそこそこに、相澤が皆に呼びかけた。

「それじゃ、これから君らに……」

とその時、

"バチイ"

通電の音が鳴り、演習場を照らしていたライトが消えてしまう。

(なんだ? 電気系統の故障か?)

操司達はそういう類の事を考えていた。

操司がふと正面の水難ステージの方に目を向けると、

”何もないところから突然黒い歪みが生まれた”

その歪みはじわじわと大きくなっていく。すると、中から1人の男が出てくるのが見えた。

(なんだあいつ、よく分かんないけどやばい気がする!)

「一塊になつて動くな! 13号、生徒達を守れ!」

相澤の指示が響く。

操司がその様に感じた事は正しい。ただ、もう遅かつた。

黒い歪みは抑えていた蓋が取り去られたかの様に急激な拡がりを見せ、中から大勢の男達がぞろぞろと出てくる。中心にいるのは身体中に手の様なものを貼り付けている男を含む3人と、巨大な黒い化け物だった。

「なんだ、ありや。入試の時みたいなもう始まつてますパターンか?」
思わず間抜けな声を出してしまった切島。ふらりと動く緑谷に対し、

「動くな！」

相澤の鋭い叫びが飛ぶ。

「あれは敵だ」
（ヴィラン）

「先生！ 侵入者用センサーは！」

「勿論ありますが……」

「現れたのはここだけか。なんにせよセンサーが反応しねえって事は向こうにそういう
ことができる個性のやつがいるってことだな」

と、ここで糸引が何かに気付く。

「相澤先生!! あれ、もしかして獅童じゃないですか!!?」

糸引の言葉に玲実と相澤がはつと驚いた様な顔で見る。

「うそ、なんで…」

「……あの馬鹿野郎。そこまで堕ちるか、普通」

くそ、と相澤は悪態を一つ吐き、気持ちを切り替えて指示を出す。
相澤がゴーグルに手をかけると、

「先生、俺にやらせてください」

糸引が申し出た。

「ダメだ。だいぶ力がついた様だがお前も雄英の生徒だ。あいつらと一緒に避難しろ」「でも！」

相澤は即座に却下するが糸引は食いさがる。

「あいつはおれのせいであそこにいる。俺がケリつけないといけないんです。俺がやん
ないといけないんです」

相澤は一瞬糸引の目を見る。真っ直ぐに相澤を見る目。それは陰りを見せておらず、

しかし覚悟の決まつた目。

相澤は知っていた。この目をした人間は何があつても自身の考えを曲げるつもりがないことを。相澤は軽く溜息をつく。

「はあ、わかつた。お前が前に行け。俺がサポートする」

「私もサポートします！」

「……好きにしろ。ただ、死ぬことは許さんぞ」

相澤はそう言つて今度こそゴーグルをかける。糸引は手袋をはめ、玲実はペンを取り出した。

中央に糸引を据え、左に相澤、右に玲実。生徒達はこの3人の後ろ姿を見て、なぜかしつくりきたのを感じた。

「……行きます！」

糸引の決意の叫びとともに3人は飛び出していった。

そこから3人は無双とも言える動きを魅せる。糸引により操られる糸は敵をやや強引にまとめあげる。そこを玲実が一思いに叩く。2人を襲おうとする敵は相澤によつて無効化、捕獲、無力化され、相澤を抑えようとする異形型の敵達は糸引と玲実が潰している。3人のチームワークは絶妙で、一種の見本とでも言える様であった。

この様子を見ていた緑谷は呟く。

「すごい。これが先輩とヒーローの力。イレイザーヘッドがサポートに入るだけでこんなに動きがスマーズになるのか」

緑谷の分析は若干違う点がある。相澤が2人に合わせているのではなく、相澤に2人が合わせてているのだ。相澤の動きはまさしく合理的である、と言える。それに2人が合わせることで、チームワークを乱さない様にしているのだった。

分析する緑谷の隣で立ち止まっている操司。彼の目線の先にいる者は玲実でも糸引でもない。相澤でもない。その奥で相澤達の奮闘を見つめている3人の男達のうち2人であった。

(あれって、照久、だよな。だとしたら、近くに崩土がいるのか？それにその隣、先輩達

が獅童つて言つてた男。あれはやつぱり、音村くんだ。どうしてここに……)

照久とは操司達が中学時代に巻き込まれた事件の犯人グループのうちの1人である。

崩土といふ男とともにその場から逃げ出し、行方は分からなくなつていた。

そして、音村獅童。彼は天野総司とともにノーベル物理学賞を受賞した男である。しかし、操司の知る音村は自身のことを慕つてくれるよく出来た助手であり、性格も明るい。決して敵になつてしまふ様なタイプの男ではなかつたはずだつた。

「甘野君、緑谷君！分析してる場合じやないぞ！早く避難するんだ！」

飯田の声が聞こえ、操司は一旦思考を止めた。

「ごめん、今行く」

そう言つて緑谷に話しかける。

「行くよ？出久君」

「え、あ、うん。ごめん甘野くん」

2人は走つて皆の方に向かう。

入つてきたときは短く感じた入り口までの通路がとても長く感じた。無事に避難しようと思つていたその時、

「させませんよ」

黒い靄が目の前を塞いだ。そこから声が聞こえるところから、どうやら靄はこの男の個性らしい。

「雄英高校のみなさん、初めまして。私達は『敵^{ヴィラン}連合』と申します。」

口調は1・3号と同じく丁寧だが、誰も1・3号と同じ様なイメージを持てたものはいない。それほどにその口調の裏には殺氣、狂気が含まれていた。靄の男は続ける。

「この度、僭越ながらこの雄英高校に入らせていただきましたのは、平和の象徴であるオールマイトに息絶えて頂きたいと思っての事でして」

誰もが一瞬「は?」という顔をする。

「はて、本来ならばオールマイトがこの場にいらつしやる筈なのですが…何か変更でもあつたのでしょうか」

動搖したり警戒したりしている生徒達をよそに、靄の男は思案する様な声を出す。

「まあ、それとは関係なしに、私の役目はこれ」

そう言つて構える靄の男を警戒し、個性の準備をする13号だつたが、

「オラア！」

「オリヤアアアア!!」

爆豪と切島が男に飛びかかつた。それを境に轟が叫ぶ。

「甘野！烏丸！29冊目、3ページ目の5行目だ！」

3人にしか通じないその言葉はこれから行動を大きく変える。

そんな事もつゆ知らず、切島は得意げに告げる。

「その前に俺たちにやられる事は考えてなかつたのか！」

13号が何かに気付く。

「ダメだ、退きなさい、2人とも！」

「ふう、危ない危ない。流石は雄英ヒーロー科。優秀な金の卵」

男は靄を全体に広げた。

「私の役割は、

貴方達をちらして！」

そう言いつつ靄で生徒達の周りを覆う。
「轟りころ…………!!」

とそこで

パキン

男の目の前が氷で覆われた。

「ナイス焦凍くん！」

「甘野もな」

男と生徒達の間にあるのは、氷の壁、そして土の壁だった。

「ありがとよ、瑛九郎、助かつた！」

「まずはあいつから逃げるぞ」

切島は瑛九郎に感謝の言葉を告げる。

29冊目、3ページ目の5行目

「多人数で1人から奇襲を受けたらまずは距離を取れ。相手は混乱のうちに片付けたい筈。まずは落ち着く時間を確保すること。目の前を塞ぐ等で時間稼ぎをするのも可奇しくもそこはこの日の昼に読んだところであつた。

「3人とも、よく動きました。あとは僕が足止めするから、みなさんは逃げて下さい」「そう簡単にはいきませんよ」

13号の後ろから声が聞こえる。靄の男だ。皆は警戒しながらもじりじりと後ろへ下がる。

「正直私はあなた方のことを少し舐めていましたね。改めましょう。そして、今度こそ終わりです」

もう一度男の靄が拡がるが、

「させません！」

13号は今度こそ個性を使用し、靄を吸い込む。

「天哉！行くぞ、皆を誘導してくれ！」

「ああ、わかつた！みんな、こつちだ！」

飯田が氷と土の壁の脇を通り、入り口に向かおうとすると、

ドオン！

壁が粉々に壊れる。

「やあ、久しぶりだね。復讐しに来たよ」

奥から現れたのは、源氏照久であつた。

遂に生徒達は悪と対峙する

第3話

壁を壊してきた存在は、見た目から言えば大体小学校低学年ほどの男であつた。薄ら笑いを浮かべつつも眼の奥には怒り、憎しみが宿つている。敵と言わると余りにも自然に思えるのだが、一般人と言われても腑に落ちない、そんな姿だ。

生徒達は、照久の見た目と行動の不一致からか動搖や油断を隠せない。

「こども？なんでこんなところに」

近づこうとする麗日に照久は目を向いた。

「子供とは酷いな。一応これでも年齢的には中学2年なんだぞ。

もう、思い通りに人を殺せる年だ』

そう言つて麗日に向けてナイフを投げる照久。麗日は動けなかつた。胸にナイフが突き刺さる。

と同時に操司が背後から麗日に触れ、ナイフの存在 자체をなかつたことにした。

「え？ あたし、今刺されたんじや？」

この一瞬で起こつた展開の早さについていけない麗日。彼らを尻目に操司は飛び出し、照久に殴りかかる。照久は難なくそれを避けた。が、その先には既に琰九郎が待つていた。

照久を蹴り上げる琰九郎。吹つ飛んでいく照久。そんな彼らを見ながら操司は皆に向かつて叫ぶ。

「みんな！ あいつは敵だ。^{ヴァイラン}油断しないで早く逃げて！」

麗日にナイフが突き刺さる所を見ていたからか、皆は特に反論する事なく指示に従う。

彼らの背後では瑛九郎が照久を引きつけていた。瑛九郎ならば敵に對して時間を稼ぐだけの強さも非難が終わつた後に逃げるだけの速さもある。だから、まずは自分たちが早く避難しなければ。その様に誰もが思つていた。しかし、その考えはすぐに覆された。

"ドオン"

衝突の音が響き、一行がそつと後ろを見ると、そこには、

「ふう、全くこんなんで僕を時間稼ぎしようとは、君らも無駄な事するね」「……」

「クロ君！」

身体中血だらけの瑛九郎の顔を無造作に掴む照久と

「戦闘経験では一步劣る！」

「や、やられた……」

「先生!!」

13号の背中をチリにする男の姿があつた。

(やばいやばいやばいやばい！)

このままじゃ皆殺される。なんとかしないと)

必死に頭を働かせる操司に対し、照久は告げる。

「なあ、操司くん。僕はね、君を、いや、君たちを殺しに来たんだ。崩土さんをあんな目に合わせた君らを」

覚えのない言葉に疑問が浮かぶ。確か崩土は自ら逃げ出したはず。

「あんな目も何も、君らが逃げ出したんじやん」

「黙れ！」

優姫の言葉に照久は怒鳴りつける。

「お前らがあそこまで痛めつけておいて何が勝手に逃げただ！ふざけるな！！

崩土さんはぼくを守つて死んだ。お前らが崩土さんを殺したんだ！

だから！今度は僕がお前を、いや、お前の大切なものを殺すんだ！奪うんだ!!!

身に覚えのない言葉に混乱する操司と優姫。他のクラスメイトは不思議そうなそして若干疑いを持つた目で2人を見ている。そんな中、靄の男が照久に告げる。

「源氏照久。感情的になつてゐる場合ではありません。早く生徒達をばらくさせますよ」

「ははは、すいません黒霧さん。少し楽しくなつちやつてました。
でもまずは」

異様な雰囲気がこの場を包む中、出た言葉は、

「この男を殺します」

瑠九郎の殺害宣言だった。

途端走り出す操司と優姫。そして、そして、全く同時に緑谷も走つてゐる。

遅れて他の者も何人か走り出していた。しかし、

「させません！」

黒霧が目の前に立ち塞がる。

「ああ、もう邪魔！」

優姫が息を吹きかけると、それは吹雪となつて靄を多少流した。
走る生徒達。

「（間に合え！）エアパルム！」

ダン、と響く足踏みとともに操司は手の平を思いつきり突き出す。空気に干渉を起こし、まるで見えないボールが飛んでくる様に衝撃が飛んでいく技だ。
操司の掌から繰り出されたそれは真っ直ぐに瑛九郎を掴む手にぶつかる。

「いつた！」

照久は手を離した。優姫は黒霧を止めておくため動けない。操司は走り出しが、それよりも早く辿り着いたのは、

「スマアアアアアアアアアツシユ!!」

「うわつと」

緑谷だつた。緑谷の腕から生み出された衝撃、暴風は照久を退けるのに十分であつた。この隙を突いて操司は琰九郎を連れ出す。

「逃げるよ！ 2人とも！」

操司の言葉を合図に2人は撤退するが、

「逃がしませんよ！」

優姫が振り向いた途端に黒霧は全体を覆い尽くした。

（速い！ 間に合わない）

逃げる間もなく一行は靄に飲み込まれた。

* * * * *

うわああ

飛ばされた先で優姫が初めに見たものは、水面だった。何もすることができずボーチャーンと派手な音を立ててダイブする。

「(ここ)は、海ではないか。しょっぱくないし。底は人工的、ブルーか?」

などと考えながら水面に向かつて泳いでいると、遠くから敵と思しきものが泳いでいた。

「きたきたあ！まずは1人目えーーー」

大口を開ける敵に対し、優姫は口の中の息を吐き出した。すると、口から氷が敵に向かって一直線に伸び、敵を凍らせてしまった。

「冬野ちゃん」

ここで蛙吹が冬野を掴んで悠々と進む。彼女らは水の中から抜け出し、近くにあつた船に乗り込んだ。

どうやらここはU.S.J内の『水難ゾーン』のようだ。優姫とともにここに飛ばされたのは緑谷、蛙吹、峰田の3人だけだった。

4人は船の上で話をする。

「さて、と。大変なことになつたね」

「うん。オールマイトを殺す発言に、相澤先生や先輩達の知り合いみたいな敵。それと烏丸くんに重傷を負わせる程の敵もいて……」

「で、でもよう。オールマイトを殺すなんてできっこねえよ！あんな奴らオールマイトが来たらケチヨンケチヨンだぜ！」

そう言つて腕を回す峰田に蛙吹が指摘する。

「本当にそうなるのかしら？」

「へ？」

「あいつら、オールマイトを殺すって言つているのよ。計画がある以上、殺す算段はついているはずよね。それに敵の1人は私たちの内で戦闘力の高い烏丸ちゃんを倒せる程の実力者。果たして本当に大丈夫なのかしら？そもそも私たちはオールマイトが来るまで持ちこたえられるのかしら？」

蛙吹の言葉にブルブルと震えだす峰田。まあまあ、と抑えつつ優姫は3人に尋ねる。

「さて、どうする？ 戦う？ それとも待つ？」

優姫の問いに蛙吹と緑谷は悩む。

待つのも悪い手ではない。敵は油断してたとはいえ蛙吹の蹴りも避けられないような、いわば只のゴロツキ。敵が仮に船に乗り込んできたとしてもこちらには優姫がいるため、負けることはないだろう。

しかし、

「……戦おう」

「そうね。私も賛成だわ」

2人は戦うことを選ぶ。

「ど、どうしてだよー！ オールマイトが来るのを待てばいいだろ！ オレらが危険を冒す必要はまだないって！」

「……そうじやないんだ、峰田くん」

緑谷は反応する。

「あいつらにはオールマイトを倒す算段がある。なら、僕らがオールマイトのためにできることとは、彼奴らと戦つて勝つことだけじゃないかな」

そう言いながら緑谷は皆に告げる。

「まずは皆の安全を確かめるためにも、僕らが、ここで勝とう」

「オールマイトの為に、か。そんなの考えたこともなかつたな。

まあ、私も戦うのには賛成だけど

「決まりね」

「えええ！」

4人はお互いの個性を確認し合い、作戦を立てることにした。

「ていうか今更だけど緑谷ちゃん」

「なに？ 蛙吹さん」

「梅雨ちゃん」と呼んで

蛙吹に言われ顔を真つ赤にする緑谷を尻目に蛙吹は続ける。

「あなた、個性使ったのに腕が壊れていなかわね。調整に成功したのかしら？」

はつと気づいたように他の2人も緑谷の腕を見る。先程瑛九郎を助けるために緑谷は個性を使った。しかし、その右腕は今もなお外傷のないままだつた。

「うん、そうなんだ。何でかは僕にもわかんないけど」

「凄いじやん出久くん！ 無意識でも結果は結果だよ！ 成長して証拠だね！」

「あ、ありがとう、冬野さん」

盛り上がるのもそこそこにして、4人は話を続ける。蛙吹が提案する。

「冬野ちゃんが水面を凍らせるのはダメかしら？」

「うーん。良いけど、私は凍らせるときは0か100しか出来ないからさ。敵さん達死んじやうよ。溶かせないし」

冬野は今まで凍結よりも、どちらかといえれば降雪や使い魔の制御の方に力を入れてい

た。そのため、凍結はまだ調整が出来ないのだ。
ふむ、と考えていると、

ドオン

轟音が響き、船が真つ二つに割れる。

「さつさと終わらせるぞ」

「引き込んじまえばこっちのもんだ」

船の外から聞こえる敵達の声に峰田が動搖する。峰田は耐えられなくなつたかのよう叫びだし、個性であるもぎつた物を敵に向けて投げつけた。

「ばか、個性バレるでしょ！」

慌てて優姫が止める。

「ケロ、峰田ちゃん。本当にヒーロー志望なの？」

「うぐつ、しようがねえだろお！ついこの前までただの中学生だつたんだぞ！」

「まあまあ、落ち着いて実くん。梅雨ちゃんもズバズバ言い過ぎだよ。たとえ本当のことでも時にはビブラーートに包まないといけないって

「冬野ちゃん、多分ビブラーートじゃなくてオブラーートよ」

「何気冬野の言葉が1番グサリときてるからな！」

わあわあ騒いでいたが、

「そうか！」

緑谷の一言に皆が黙る。

「どうしたの？」

「うん。これなら、勝てるかもしねない」

『水難ゾーン』は現状の打破に入る。

* * * * *

「いよつと」

操司が琰九郎を担いだまま飛ばされた場所は『倒壊ゾーン』だった。
「おわつ」

声のする方を向くと、そこには切島と爆豪がいた。

「2人もここにとばされたのか」

「みてえだな。てか琰九郎は大丈夫か？」

「……たぶん」

瑛九郎の容態は見ただけでも酷いものだつた。顔を叩きつけられたのであろう、元々つけていたお面は見る影もなく、頭からは血が滲んでいる。触つてから気づいたのだが、恐らく足は両方とも折れているのだろう。

操司達が思案していると

「いたぞ！ 餓鬼どもだ」
敵ヴァイラン
がやつてきた。

「2人とも、あいつらを頼んだ！ 僕は瑛ちゃんの処置をするから動けない」「うつせえ、俺に命令すんな！ こいつらなんざ俺一人で十分だ！」

「おーおー頼もしっこつて」

食いつく爆豪を受け流し処置に入る操司。

(危ないとこころだけ治しておこう。やり過ぎてこの世界もろとも崩壊なんて洒落にならないし)

そう思い操司は瑛九郎の頭部に触れる。怪我したところが少しづつ治されていった。治療中、操司がちらりと爆豪たちの戦っているところを見るが、爆豪も切島も敵相手に負けるような危なつかしさは全く見当たらない。心配はなさそうだ。

操司による治療が終わる。それと爆豪達が敵を倒すのにもひと段落がつく。

「お疲れさま」

「おう、瑛九郎はどうだ?」

「そんな、僕は医者ではないからそこはよくわかんないよ。でも、取り敢えずは治しついた」

「そうか、と切島は返した。

「さて、2人はこれからどうすんの?」

操司の問い合わせにはまずは切島が答える。

「そりや勿論他の奴らを助けに行くだろ。戦闘に慣れてないような奴が心配だ」

「ふん、勝手に行つてろ」

「はあ?」

「俺はあるの靄モブをぶつ潰す」

またかよ、と抗議する切島だったが、爆豪はうつせー、と返す。

しかし、操司は爆豪に対しても何となく今までとは違つた感じを受けた。今までなら

もつと怒り狂つた顔つきのはずなのに、今はやけに冷静であつた。

「つーか」

「しねえー!!」

突如爆豪の背後からカメレオンのような姿をした敵が現れるが、爆豪は持ち前の反射神経で反撃、あっけなく撃破する。

「俺らにあてられたのがこの程度の奴らなら別に他の奴らも平氣だろ」

「お前そんなに冷静だったか……？」

(他の奴らも平氣つて、信頼してる証拠だよね。爆豪くんは凄いな。僕はまだ不安だよ)

そう思いつつ操司は2人の話を聞いてる。

「よし、爆豪！ お前に乗つたぜ!!」

「僕は瑛ちゃんを運ばなきやいけないし、邪魔になりそだから広場にはいかないよ」

操司は他の所にいるクラスメイトのヘルプに回ることにした。

「んじや、あとは別行動でね」

「おう、気をつけろよ」

そう言つて3人は倒壊ゾーンから離れる。

(まずは近くにある山岳ゾーンから行くか)

操司は山岳ゾーンへと急ぐ。